
バカと奇跡とリトルバスターズ！

ルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと奇跡とリトルバスターズ！

【Nコード】

N92500

【作者名】

ルル

【あらすじ】

修学旅行のバスが事故に遭った。リトルバスターズの面々は気付いたら見知らぬ校庭にいた。

困惑するリトルバスターズの面々を置いて恭介が動く、『よし、おまえらこの学校に入学するぞ』

一同『』『』『は？』『』『』そしてそこはバカテスの世界で……奇跡とともに世界を渡った理樹達と明久達の活躍を刮目せよ！！

『ねえ、何なのさ一体！？』by Mr. ツツコミ「はりやほれうま

うー」by二代目斎藤

ギャグ満載のオリジナル展開！リトルバスターズという存在は文月学園に一体どんな嵐を巻き起こすのか！？いまミッションが始まる。

なんと十万PVアクセスユニーク一万人突破です。一月でこれとは驚きました。応援よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

突然思いついて書き始めたため更新は遅いタイトル適当、ストーリーはめっちゃくちゃ、いやくちゃくちゃだと思いますがよろしければどうぞ

プロローグ

SIDE 理樹

あの時のことはよく覚えていない、ただ気付いたら周りが騒いでて……ブレーキの音が聞こえたと思ったら突然真人と謙吾の顔が目の前にあった、そこまでは覚えてる。

でも……そこからの記憶はなかった。

そして――

無

闇

とても静かな世界に僕はいた、何も見えない、何も感じない、まるで宇宙にほうり出されたみたいだ。
体が動かない

僕はただその世界を漂った

すると僕に語りかけてくる存在があった。

これは……

「恭介？」

僕が呼ぶとその存在は返事をして近寄ってきた。

間違いない、恭介だ。

姿のない、ただの光だったけど僕はそれを恭介だと断定した。

そしてそれを皮切りにどんどん何かが集まってきた。

そしてそれが何か僕にははっきりわかった。

鈴、真人、謙吾、来ヶ谷さん、クド、小毬さん、西園さん、葉留佳さん、

皆だった。リトルバスターズのメンバーだった。

すると恭介が語りかけてきた。

『俺達はもうすぐ死ぬ、ならばどうせ死ぬなら最後に悪あがきをしようじゃないか』

『何をするの？』

僕は反射的に尋ね返していた。

『皆で力を合わせて祈ろうじゃないか、神でも仏でもなんでもいい、

誰かが願いを叶えてくれるかもしれない』

すると恭介はそんな答えを返してきた。何時もなら皆は何を、と呆れただろう。しかし僕らはこのままじゃ死んでしまうことに気付いていた。

だから祈った。

皆の思いが一つになった

『まだ皆と一緒に過ごしたい』

世界に波紋が広がっていった。

そして――

僕達は見慣れない校庭にいた。

転移初日リトルバスターズ（前書き）

まあ、作者はいろいろとうろ覚えです。また少しアレンジしている所もありますので指摘したい所があればどんどん指摘していただきたいです。

転移初日リトルバスターズ

僕らがこの文月学園に転入して一月が過ぎた。

いろいろあったけど楽しく過ごせている。

そして今日は振り分け試験の日だ。

そして……今僕らが置かれている状況を説明するには半年前のあの日に戻ることになる。

S I D E 理樹

「……ここは？」

気がつくと僕はどこかの学校の校庭にいた。

周りを見ると皆もいた。

月が出ていることから分かるように今は夜のようだ。

そしてグランドの中心に僕達はいた。

「おい、みんないるか？」

呆然と周りを見渡していると恭介が声をかけてきた。

「おう」

「ああ、」

「うん」

「いるよ」

「はいなのです！」

「いますよ」

「ああ」

「ええ」

ちなみに上から真人、謙吾、鈴、小毬、クド、葉留佳、来ヶ谷、美魚だ。

全員から返事があった、どうやら全員ちゃんとしたようだ。

「それで恭介、ここは一体……」

どこのの？ と続けようとしたところで僕は頭に突然痛みを感じて言葉を止めた。

「……………っ!？」

痛みが襲うと同時にたくさんの情報が頭を駆け巡った。

周りを見ると皆も同じように頭を押さえている。

しかしそれもほんの数秒で終わり、それと同時に頭の痛みも引いていった

そしてそれと同時に僕は、いや僕達はある程度この世界についての知識を手に入れていた。

「「「「……………」」」」」

皆沈黙していた。

それも当然だろう。何せ先程まで起きた現象は信じられないだろうし、ここが異世界だと言われても正直理解できない。普通夢じゃないかと思うのだろう

でも事実は事実だ。

だから僕は現実を受け止めることにした。

見れば恭介も同じようなことを考えたみたいだ。

「よし、お前らちょっと待ってろよ」

そう言ってまだ明かりのついている部屋に向かって歩いて行った。

「何をする気なんでしょう？」

「さあな、恭介の考えることはわかんねえよ」

クドの呟きに真人が全員の気持ちを代弁して答えた。

S I D E E N D

10分後

「よし、おまえらよく聞け、今日の宿が決まったぞ」

唐突に僕らを置いて行った恭介は、また唐突に戻って来ていきなり僕らに告げた。

「また突然だね、恭介。もう慣れたけどさ……」

理樹の言葉に、恭介を除いた全員が軽く頷いて同意を示す。

「恭介、今日の宿ってのは一体どういうことだ？」

「今日の宿は今日の宿だ」

恭介がまるで哲学者のような答えを返してくる。

「だからよ、俺が言いたいのはそうじゃなくて、今日の宿ってのは

一体どういうことだってことだ!」

「よく噛まずに言えたね真人君……」

小毬が感心していた。

「馬鹿の言うとおりで恭介、それがどういうことか説明してくれ。まあある程度は察しがつくが……」

小毬を無視して謙吾が改めて尋ね直す。

「ああ、我々リトルバスターズがとりあえず今日泊まる場所が決まったことを報告に来たんだ。詳しいことは移動した先で話そう、まずは俺について来てくれ」

そう言うとき恭介は駐車場らしき場所に向かって歩き出した。

僕らは顔を見合わせたが、やがて謙吾がため息をつくと後続き、それにつられて全員が後について行った。

「よし、お前らとりあえず乗れ!」

恭介に連れていかれた先にあったのはマイクロバスだった。

「こんなもん、一体どうしたんだよ恭介」

皆を代表して真人がまた真っ先に尋ねる。

「借りたのさ」

「誰に？」

理樹が尋ねる。

「まあ、それについても説明するからとりあえず乗ってくれ」

恭介が促すと、皆釈然としない雰囲気ながらも素直にバスに乗り込んだ。

皆が乗り込むとバスが音を立てて発車する。

「それで？　これからどこに向かうんだ？」

バスが動き出すと謙吾が皆を代表して運転席に居る恭介に尋ねる。

「ああ、とりあえず今日の所は学園長の家に泊めて貰うことになった」

「学園長？」

「ああ」

謙吾の質問に答える恭介、しかし聞き捨てならない単語があった。

「待って恭介。　もしかしてさっきいた学校の？」

「そうだ、話してみたらとりあえず今日の所は家に泊まるようにと

言われてな、鍵も預かってる」

そう言って片手に鍵を掲げてみせる恭介。

「でも恭介、その学園長の家なんて判るの？」

理樹が当然の疑問を尋ねた。

「勿論、判らん」

何故か自信満々に言う恭介。

「おいおい、どーすんだよそれじゃ」

「馬鹿きょーすけを信じたあたしが馬鹿だった」

「それならなんで自信満々に言うのさ！」

たちまちツツコミが飛んだが、恭介は涼しい顔で言い返した、

「それがミッションだ、ミッション今夜泊まる学園長宅を発見せよ」

「何だよそりゃ……」

呆れた声を真人が漏らしたが周りも似たような反応だ。

「これが学園長の家の写真だ、皆でそんな感じの家がないか探してみてくれ」

そんな理樹達を無視して恭介が携帯を差し出してくる。

「まあ、とりあえずその家を見つけないければ始まらないのなら皆で捜すしかあるまい」

謙吾の一言を聞いて皆、真剣に捜し始めた。

「よし！ それじゃあミッションスタートだ！」

恭介の声が社内に響いた

一時間後

「あゝ疲れた」

「やっと見つかったね……」

「元々知らない場所だからね……」

あれから辺りを捜し回った恭介達は、夜ということも手伝い、学園長の家を発見するのに一時間間近くかかった。

やっとの思いで見つけて上がり込んだリトルバスターズの面々だったが、入ってすぐに手強さを感じていた。

「これは……酷いね」

「ああ、そうだな」

「めっちゃくちゃ、いやもうくちゃくちゃだな」

そう鈴がそう評した部屋はゴミだらけだった。

学園長宅はリビング、風呂、トイレ、寝室はそこそこ掃除してあったが、それ以外の部屋のきたなさが異常だった。

「これって、あきらかにゴミを使ってない部屋にほうり込んだらこうなったって感じだね……」

理樹の想像は外れていないだろう。

「とりあえず、学園長が来るまで皆くつろいでくれ」

恭介が宣言すると皆はまともなリビングに避難した。

「………何だか不安になってきたよ」

「言うな理樹、俺も不安だ」

そのさい理樹が呟いた一言に謙吾が反応して慰めていた。

転移初日リトルバスターズ（後書き）

作者「ご意見、ご感想お待ちしております」

理樹「待って、少し恭介に聞きたいことがあるんだ……」

恭介「何だ？」

理樹「恭介って、車の免許持ってたっけ？」

恭介「持ってないな」

理樹「じゃあなんで運転できるのさ？」

恭介「それは大人の事情って奴だ」

理樹「待って、それなら免許証なしで運転してたの!？」

恭介「そうだぜ」

理樹「ちよっと!捕まったらどうするつもりだったのさ!？」

恭介「それをごまかすのもミッションさ!」

理樹「いや、それただの犯罪だからね!？」

恭介「では、また次回」

理樹「本当にどうする気だったのさー!？」

学園長、もとい妖怪（前書き）

後、一話説明というか前置きが入った後でバカテスの本編に入ります。

学園長、もとい妖怪

リビングで皆が、思い思いに休んでいると誰かが帰ってくる音がした。

「やれやれ……あのガキはちゃんと来れたみたいだね」

そう言いながらリビングに入ってきたのは……

「……妖怪？」

学園長こと妖怪ババアだった。

「いきなり失礼なガキだねえ、出会い頭に人を妖怪扱いかい」

部屋に入るなり真人に妖怪扱いされたババア、もとい学園長がジロリと真人を見ながら言う。

「馬鹿がいきなり失礼した。あなたがこの家の持ち主か？」

そこに謙吾がすかさずフォローに入って尋ねた。

「そうさ、文月学園学園長の藤堂カヲルさね、所で聞きたいんだけど、このガキが言っている事は本当かい？」

学園長が恭介を指指しながら謙吾に尋ねる。

「このガキはあんた達が違う世界から来たって言うんだけどね、それは本当かい？」

それを聞いて恭介を除くほぼ全員が状況を理解した。

「まさか、正直にありのまま話していたとはな……」

「どうやって、車を借りたりしたんだろうと思ったら……」

「ふむ、流石は恭介氏。やることが違うな」

「驚きました。まさかそのように真実を話すなんて……」

「信じて貰えなかったらどうする気だったんだろうね……」

「小毬ちゃん。多分きょーすけは何も考えてない」

皆、恭介がとうてい信じて貰えないであろう、真実を話して学園長を交渉の場に引きずりだしていたことに驚き呆れていた。

「それで？ 本当なのかい？」

「あ、ああ。まあ本当何だが……どう証明すればいいか……」

謙吾が皆を代表して答えるが、正直かなり困っているようだ。

するとそこに黙っていた恭介が自信満々に口を開いた。

「おいおい謙吾。それは簡単さ、俺達はリトルバスターズ、そして異世界という燃えるシチュエーションに今いるんだ。何か一つか二つくらい能力を得ている筈さ」

「「「「「「「………」」」」」」」

絶句する理樹達。

流石の学園長も呆れていた。

「やれやれ、いきなりやって来て妙な事を言い出したと思ったら……」

「ていうか、何でそんなに自信満々に言えるのさ……」

学園長と呆れた声を漏らし、理樹は頭を抱えていた。

しかしそんな周りの反応にもめげない恭介は流石リトルバスターズのリーダーといえるだろう。

「何、例えば何かを召喚したり出来るようになってたりするはずだ、とりあえず試してみようぜ」

そう言うところ恭介は学校長に尋ねた。

「そういえばこの世界にきた時得た情報の中に文月学園の試験召喚システムとやらについての情報があったんだが……何を呼び出すんだ？」

「呼び出すのは召喚獣さね。しかしここにはシステムを配置してないし、あんたはテストを受けてないから例えフィールドがあっても召喚することは出来ないよ」

恭介の質問にあっさり答える学園長。

「それで？何て言って呼び出すんだ？」

「『試験召喚』（サモン）だけど……あんたにゃ呼び出せないよ。あたしの話を聞いてたのかい？」

「ああ、なる程な……ならそれから試すか……『試験召喚！』」

恭介が召喚獣を呼び出すためのキーワードを叫ぶ、それを呆れた目で見ていた理樹達だったが。

ぽんっ！

召喚獣登場。

「「「「つつ！？」」」」

いきなり現れた恭介の召喚獣を見て驚いていた。

しかし1番驚いたのは学園長だったようだ。

「今何をしたのか説明しなガキ！」

老人とは思えないスピードで恭介に駆け寄ると凄い剣幕で問い詰め始めた。

「おいおい、落ち着いてくれよ、俺は何もしてないぜ？　ただ呼んでみたただけだ」

「そんなことで召喚獣が呼びだせる訳がないさね！」

「わからんが、俺達はこの世界の存在じゃあないからな。理樹、おまえらも呼んでみろ」

「う、うんわかった」

とりあえず恭介に話しを振られた理樹達は言われた通り召喚獣を呼んでみることにした。

「それじゃ、せーの！」

『『『『『試験召喚！』』』』』

一斉に皆が召喚獣を呼び出す。

すると……

ぽんっ！

召喚獣登場。

「わあ！　かわいい」

「わふー！　本当ですね」

「小さいクドリヤフカ君達か……これはお姉さんくらっと来てしまいそうだ……」

「うわー、本当に小さいね」

召喚獣が現れるとさっきと違って女性陣から歓声が上がった。

どうやら小さい召喚獣がかなりつぼにはまったらしい。

「ふーむ、やっぱり皆呼び出せたか……。とりあえずこれで俺達が違う世界から来たと信じてもらえるか？」

そんな様子を見ながら恭介が学園長に話しかける

「まあ、違う世界って所は置いておいても、とりあえずあんたらが普通じゃないってところは認めようじゃないか」

「そうか、まだ差し当たってはそれでいい、それで先程言ったこと何だが……」

女性陣を含めたリトルバスターズのメンバーが初めてみる召喚獣に夢中になっている間に恭介は何やら学園長と取引を行っていた。

学園長、もとい妖怪（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

バカテスト第二問（前書き）

バカテストです。

バカテスト第一問

社会

次の文章の○の空欄を埋めよ。

問題 中世ヨーロッパでは国王の権力は神から授かったとされる絶対王政が行われていたが19世紀に入り民主化運動が盛んとなりフランスでは国王ルイ16世と王妃マリーアントワネットが処刑され王政が崩壊したこれは（ ）革命と呼ばれる。

直枝理樹の答え

「フランス革命」

教師のコメント

正解です。流石直枝君ですね。

棗恭介の答え

「学園革命」

教師のコメント

先生も学園革命スクレボは大好きです。

井ノ原真人の答え

「こいつは……筋肉革命だっ！」

筋肉のコメント

いや、違うわ

教師のコメント

違いますが……上のコメントは誰の仕業ですか？

交渉と寮と等価交換（前書き）

次回から本編です。いよいよバカテスのメンバーも出てきます。

交渉と寮と等価交換

あれから……学園長と何やら取引をした恭介はリビングにいる全員に向かって宣言した。

「よし！ おまえら、文月学園に入学するぞ！」

「」「は？」「」

その一言に反応して言葉を返せたのは旧リトルバスターズの面々のみ。クドや小毬に至っては恭介が何と言ったのかさえ聞き取れていなかった。

「ごめん恭介。 もう一回言ってくれない？」

全員を代表して理樹が尋ね返す。

「だから、文月学園に入学……正確には転入すると言ったんだ」

「」「何でさ（だ、だよ）！」「」

理樹と真人と謙吾の声が重なった。 三人ともどうしてと言いたかったようだ。すると案の定恭介が説明し始めた。

「そりゃあ、まだ俺達は学生だからな。 幸い学園長が何とかしてくれるらしいから学籍も何とかなるし、住民表といった細かい所も何とかなる。 なにより……」

「何より？」

「こんな面白そうな学園に入らずにいられるか？」

（（……やっぱり1番の理由はそこ何だね（な）））

理樹達が呆れたような視線を恭介に浴びせていると、ふと来ヶ谷が気付いたように言った。

「そうなるなら恭介氏はどうするんだ？ また一つ上の三年生になるのか？ しかしそれでは……なにより今の時期からは厳しくないか？」

来ヶ谷が懸念の声を上げるのは当然なのである。

何故なら時間軸がリトルバスターズがいた世界とは違うらしく。現在こちらの世界。言うなればバカテスの世界は冬。つまり転入しても三年生はもう受験を終えて卒業を残すのみであり。今から転入したら一人だけ卒業する嵌めになってしまうのだ。

「ふっ、それについては心配ない。」

しかし来ヶ谷の懸念にも恭介は余裕の表情を見せた。

「何故なら新学期を待って、俺もお前達と同じ二年生として転入するからだ」

「「「はあ？」」「」」

再び疑問の声を上げる面々。

「新学期まで待つのはいいとして。どうして三年の恭介まで二年になるんだよ？」

「ふっ、それは前の失敗からだ」

「失敗？ 失敗ってなんのことさ？」

真人の疑問に答えた恭介にすかさず理樹が尋ねる

「ああ、それは修学旅行に俺だけ行けなかったことだ……何て理不尽！」

対して答えた恭介の理由は非常に子供じみた理由だった。

そういえばそんなこと言って騒いでたなあ……と思いつつ、理樹が恭介に尋ね返す。

「つまり、修学旅行に一緒に行けなかったから二年生になるって事？」

「その通りだ」

満足気に返事をする恭介

「こいつ馬鹿だ！」

そんな恭介を見て鈴がそんな声をあげる。

「まあ、恭介の気まぐれは今に始まったことじゃないし……それより恭介、新学期まで何をするの？」

理樹がこの場にいる全員の疑問を投げかけた。

「それについてはあたしあら説明するよ」

そう言って前に出てきたのは学園長

そう言えばいたなあ、という雰囲気が場に漂ったが、学園長が話し始めると一気に吹き飛んだ。

「とりあえず、こっちのガキの要求で寮を建ててやることにしたけどね、勿論タダという訳にはいかないからね。相応に働いて貰うよ」

「「「はああああ!?!」」」」

リビングに絶叫が響き渡る。

「ちょ、ちょっと恭介!?!聞いてないよそんなの!?!」

「どういふことだ馬鹿兄貴!」

「働くって何をするの?」

「ふふ、小毬君。それはおねーさんが手取り足取り教えてあげよう」

「何だ? 肉体労働なら任せな!」

反応は様々だった。(一部妙な声もあったが)

「やって貰うのは力仕事でも何でもないさね。簡単に言えば実験の

手伝いってどこかね」

「えっとつまり……?」

「早い話しがキブアンドテイク。要求を飲ませたいならそれなりの代価を寄越せてことさね」

「つまり等価交換って訳だ」

恭介がどこぞの漫画のような事を言いだした。

「頑張れ鋼の」

「いや、それは言っちゃ駄目だし違うでしょ!」

とりあえず理樹がツツコム。

「それじゃあ、他のガキもわかったみたいだし。あたしはもう寝るよ、風呂とかは自由は使っていいからあんたらは好きな所で寝な」

そう言って学園長は寝室に消えたが……。

「えーと、どこで寝ようか……?」

後には寝る場所や、着替えに困るリトルバスターズ全員が残された。

余談だが……

「少年。君はこっちで寝ないかい?」

「ええ!?! いや、寝ないよ!」

「うーん。でも理樹君なら問題ない気もするけどね」

「いやいや、僕は男だよ!?!」

「でも理樹君だしね」

「理樹ならノープロブレムなのです」

「理樹だしな」

という一幕があり、寝る場所決めは困難を極めた

バカテスト第二問（前書き）

バカテストです

バカテスト第二問

国語

次の意味を持つことわざを答えなさい。

名人でも、どんなに得意なことでも失敗することがあるということ。

直枝理樹の答え

「猿も木から落ちる」

「弘法の筆の誤り」

教師のコメント

正解です。一つだけでよかったのですが二つ答えたのは素晴らしいですね

井ノ原真人の答え

「猫も棒から落ちる」

教師のコメント

奇跡的に間違えていますね。どうしたらそのような解答に辿り着くのでしょうか？

棗鈴の答え

「きょーすけを信じたあたしが馬鹿だった」

教師のコメント

何かありましたか？それなら次から気をつけてください。

新学期〜S（特別）クラス（前書き）

さて、続く限り投稿します。次は新学期。そろそろ明久達が登場です。

どうぞ

新学期くS（特別）クラス

4月 文月学園にも春がやってきた。

校庭には鮮やかに桜が咲き乱れ、風が吹くと鮮やかな色の花びらを散らし、幻想的な光景を作りだす。

暖かな陽射しが校庭に降り注ぎ、やってくる新入生を祝福するかのような天気の良い春の朝。

そんな天気もあってか文月学園にも穏やかな雰囲気が漂っていた。
そんな校舎の一画で……

「何だ……やんのかよ」

「どうしても言うのなら相手してやらんこともないぞ」

真人と謙吾のバトルが始まろうとしていた。

「ちょっと二人とも、一体どうしたのさ」

駆け付けたばかりで情況がよく分からないながらも、理樹がなんとか事を収めようと事情を尋ねる。

「理樹、聞け……こいつは俺に嘘を教えやがったんだ」

どうやらまた真人の言い掛かりが炸裂したようだ

「わかったから、それより二人とも勝負は後にしてよ、教室に行かないといけないからさ」

しかしそんな事で引き下がる真人ではない。

「なら速攻で決めればいいんだろ」

「ほお……貴様今何と言った？ 俺を速攻で倒すだど？」

そして、当然真人がそんな言葉を吐けば謙吾も反応する。

「なら……まずは武器を決めるか、理樹武器を投げ入れてくれ」

「いや、だから早く教室に行かないと……」

しかしそんな理樹の抵抗虚しくバトルが始まる運びとなった。

……のだが

「よっしゃ！ それじゃあ理樹武器をたのー」

む、と続けたかったのだろうがそんな真人の頭に強烈な一撃が入っていた

「井ノ原に宮沢、廊下で暴れるな」

暴れる気満々だった真人を止めたのは鉄人こと西村先生だった。

ちなみに真人いわく

「あの人の筋肉は完璧だ、まさに筋肉の神に愛されてるとしか思えねえ、俺もまだまだ修業が足りねえな」

とのことである。

「あっ、西村先生。ありがとうございます。ほら、行くよ真人。謙吾も手伝ってよ」

理樹は馴れた手つきで真人を抱える……というより引きずって真人を教室に運び始めた。

S I D E 理樹

「よし、おまえら全員いるな？」

教室に全員（と言ってもリトルバスターズのメンバーだけだが）が揃うと恭介がそう口を開いた。

「これより我がSクラスのホームルームを始める！」

新学期、リトルバスターズの面々は校舎の一画にある教室に集まっていた

「それじゃあ、記念すべきリトルバスターズの文月学園デビューとなった訳だが……。この学校では何かしようというアイディアがある奴はいるか？ 前みたいに野球でもいいぞ」

とりあえず担任の先生がいないので恭介が議事進行は恭介が行っている。

ここで少し僕達リトルバスターズのメンバーにより構成されている。特別クラスSクラスについて説明しておこう。

まず、僕はSクラスなんてついてるけど学年トップの学力を持つAクラスより学力が上という訳じゃなくて、単純に学園長が振り分け試験でばらばらにするのはリスクが高いと判断したからだ。

その理由についてはまた後で説明する。

それで学園長によって僕らリトルバスターズのメンバーだけのクラスSクラスが作られた訳だ。

ただ、いつまでもこのままという訳にはいかないからA〜Fのいずれかのクラスに全員で編入されることになっている。

ただし、試召戦争には（ルールは特別だが）参加しなければならないし。

施設は一応Dクラスと同じになっている。

ちなみに僕は文月学園では特待生扱いされている。
簡単に説明すると以上だ

「それならランキングバトルをまたやろうぜ！」

恭介の問い掛けに対して真人が意見を述べる。

……どうやら先程の続きがしたいらしい。

「それには賛成だが、どうせやるなら他にも参加者が欲しい所だな」

「なら、また野球はどう？」

また野球がしたくなった僕はそう提案していた。

「そうだな、確かにせっかく前にあれだけ練習したんだ、いいかな」

「だが、そう簡単に相手してくれるチームもしくは相手がいるのか？」

しかしそれに疑問の声を上げたのは謙吾だ。

「どういうことだ？」

「確かに前は恭介の顔が聞いたから相手チームを見つけることが出来たがこちらにはまだろくに知り合いがないだろ？」

確かに謙吾の言う通りだった。

「なーに、それならこちらから見つけばいいのさ！」

けど恭介は自信たっぷりにこう言い返した。

「いないのなら見つければいい、前はメンバー集めだったが……今回はそれが相手チーム探しになったただけだ、それもいいだろ？」

「む、確かにそうだな」

謙吾は納得したようで引き下がった。

「それじゃあ、他に意見があるやつはいるか？」

恭介が全員を見渡したが全員が首を振っていた。

「よし！ それじゃあまずは野球の相手チーム探した！」

そして恭介が高らかに宣言した。

「ミッションスタート！」

と、言っても授業は受けなくてはならない訳で…

「それじゃあ、授業を始めます」

「……………なんか締まらねえな」

何となく出鼻をくじかれた感じがした。

S I D E E N D

昼休み

「よし、それじゃあ食堂に行くか」

授業が終わり、昼休みに入ると恭介の音頭のもと全員で学食に向かうことになったが。向かう途中で理樹は財布を教室に取りに戻っていた。

すると途中で何やら凄い勢いで走っている生徒に出くわした。

「騙されたあつ！」

命懸けで廊下を走っているその生徒はボロボロだった。明らかに暴行を加えられたようで、服もところどころ破れている。

「……………」

咄然としている理樹の側を駆け抜けると、その生徒吉井明久はFクラスの教室に転がり込んでいった。

「……………何だったんだろう」

理樹はただそれを呆然と見送るしかなかった。

「何？制服をボロボロにした生徒が走っていた？」

先程の事を学食に戻ってから話すと恭介がそう聞き返してきた。

「うん、なんか凄い勢いで走ってたんだけど。一体何があったんだろうって」

「そうか……多分それは『試召戦争』が始まるのかも……」

「試験召喚戦争？何でそんな事が判るのさ？」

「ああ、それは下位クラス、例えばFクラスがEクラスに試召戦争を持ち掛けたとするだろ？ そしたら大体上位クラスの生徒に取って自分の教室を取られるかもしれない試召戦争は厄介事以外の何物でもないからな。大体の生徒が宣戦布告に来た生徒をボコボコにす

るのさ、多分理樹が見たのは宣戦布告した帰りの生徒と考えるべきだろうな」

恭介の説明に納得した理樹だが、同時にその見知らぬ男子生徒に同情した

「へっくし！」

「なんじゃ？ 明久、風邪でもひいたのかの？」

「いや、急に鼻がむずむずしてさ」

「たまたまだろ、大体明久が風邪を引く筈がないからな」

「雄二！ 貴様僕がバカだと言いたいのか！？」

「言いたいも何もそう言ってるんだ」

「雄二貴様……！ 試召戦争の前に貴様を殺す！」

同時刻、Fクラスでは一波乱あった。
そして……

「試召戦争か……面白そうだな……」

そんな呟きを恭介が漏らした事に気付いた者はいなかった。

バカテスト第三問（前書き）

バカテストです

バカテスト第三問

生物

昆虫の中でも蝶の仲間などは幼虫↓蛹↓成虫の順に成長していきますが蛹から成虫になることを何と言うのでしょうか答えなさい。

直枝理樹の答え

「変態」

教師のコメント

正解です。形態が劇的に変化するため変態と呼ばれます。

棗鈴の答え

「寄るな、ど変態」

教師のコメント

とりあえず（ど）はいりません。なければ一応正解？なのですが…
…棗君が落ち込んでいましたがそれと関係あるのでしょうか？

棗恭介の答え

「進化」

教師のコメント

とりあえずトランセルでもコクーンでもありませんが……先生もポ
○モンは好きです。

試召戦争とバカとの邂逅（前書き）

少しおかしいかと思いますがいつか訂正します。

試召戦争とバカとの邂逅

『さあ来い！ この負け犬が！』

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌なんだっ！』

『黙れ！ 捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！ 終戦まで何時間かかるかわからんが、 たっぷりと指導してやるからな』

『た、頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？ そんなことはしない。 これは立派な教育だ。 補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう』

『お、鬼だ！ 誰か、助けっーイヤアアー （ボタン、ガチャ）』

僕らの前には地獄が展開されていた。

恭介に教室から連れ出された理樹達は、FクラスとDクラスの試召戦争を見に来て目の前の光景を眺めていた。

「とりあえず、試召戦争が恐ろしいってことが十分わかったね」

理樹の言葉にうんうんと頷く面々。 どうやら皆試召戦争の恐ろしさを十分に感じたようだ。

しかし……

「よし、おまえら、試召戦争に参加するぞ」

「「「は?」」「」」

やはりというか何と言うか、恭介はそんな声を無視して何事もなかったかのように堂々と言い切った。

「あのさ、恭介聞いてた? 何で今の会話の流れからそうなるのさ!?!」

流石と言うか何と言うか……最初に恭介の言葉にツツコミを入れたのは理樹だった。

「理樹! よく見る格下の弱者が、結束力を持って上位クラスを倒そうと戦う姿を! まさしく燃える展開じゃないか!」

しかし恭介の言葉はまったく理樹の言葉は無視したものだった。

「駄目だ……恭介がこうなったらもう……」

恭介が一度決めて言い出したことを覆すことはない。 それを知っている理樹はあっさりと諦めてしまった。 周りも仕方ないといった感じだ。

……納得しているかは別として。

「でもよ恭介、参加するたって俺達は宣戦布告も何もしてないだろ? それにどっちに味方するってんだよ?」

真人が参加することを前提に質問するが、意外といい所を突いていた。

「ああ、それに関しては後で説明するから俺に任せておけ、とりあえず教室に戻ろうぜ」

恭介のその一言でその場は解散となった。

SIDE 明久

「あゝ、疲れた……」

廊下での戦闘を終えた明久はFクラスで茶伏台に突っ伏していた。

「よくやった明久」

すると雄二がやって来て爽やかな笑顔とともに親指を立ててみせる。

「雄二……貴様まさかあの放送を……聞いてたな？」

「ああ、バッチリな」

明久がむかつくほど楽しそうに答える雄二。

「ところで須川君はどこだい？」

しかし優先順位の高い須川を捜す明久、そこに……

「言っておくがあの放送を指示したのは俺だ」

雄二が爆弾を投下する。

「貴様かああああ！」

まだ武器は用意してないけどカッターなら持ち歩いている。刃が薄くて制服の上からじゃ刺さらないから剥き出しの首筋が手首を狙って致命傷となる動脈を切る！

「あ、船越先生」

「ちいっ！」

撤退だ、まずは僕の貞操を守りきるほうが大事だ

慌てて掃除用具入れに隠れる。

「あー、ちなみに明久」

教室から皆が出ていく気配を感じながら隠れていると外から雄二が話し掛けてくる。

話し掛けるな！ばれるじゃないか！

「船越先生が来たってのはのは嘘だ！」

「逃がすか雄二いい！」

慌ててロッカーから飛び出す、辺りの気配を探るがどうやら雄二達は作戦を実行しに向かってしまったようだ。
すぐに後を追うつもりだったけどよく考えたら武器がカッターじゃ少し厳しいのに気付いた。

「これじゃ服の上から刺せないじゃないか、せめて包丁がいるかな……」

幸い雄二の居場所はわかっている。

僕はまず家庭科室で包丁を調達することにした。

SIDEクド&小毬

「えーと、確か包丁はこの辺にあった筈だけど……」

私とクーちゃんが家庭科室に行くと一人の男の子が何かを探していた。

「えーと、何をしているのかな？」

「うわ!？」

私が声をかけると驚いた声を上げてこっちを向いた。

「ふう、助かった。船越先生じゃなくてよかった」

その男の子は何故か私とクーちゃんを見ると安心していた。

「それで何をしていたの？」

私が再度尋ねると何故か慌てて何かを後ろに隠していた。

「な、何でもなしよ！ただちょっとお腹がすいて……」

「？何か食べに来てたの？」

「う、うん、ちょっと砂糖と塩を食べにね」

「え？ 砂糖と塩？」

「わふ、それは食べるものじゃないと思いますけど……」

クーちゃんがそう言うのと男の子はきょとんとした顔で

「え？ 食べないの？」

と逆に聞き返してきた。

「う、うーん。普通は食べないかなあ」

私がそう返事すると男の子は信じられないって顔をしてたけど、急に何かを思い出したかのように表情を変えるところに走っていきうとしたので慌てて呼びとめる。

「お腹が減ってるなら……はい」

私はポケットに入れていたお菓子を渡した。

「え？ いいの？」

男の子は戸惑ってそう聞き返してきたけど私は笑顔で答えた。

「いいの、いいの。お菓子は皆に食べて貰うのが1番だから」

「そうなんだ。ありがとう。所で見ない顔だけど二年生？」

「ううん。私はこの春から転校してきた二年Sクラスの神北小毬だよ。」

「そうなんだ。僕は二年Fクラスの吉井明久って言うんだ。よろしく神北さん。」

「こちらこそよろしくね」

そうやって自己紹介を終えると男の子、吉井君はそわそわしだした。

「それじゃあ、僕はこれで、お菓子ありがとうじゃ！」

そう言って吉井君はどこかに走って行ってしまった。

「あ、うん。またね」

私はそれを見送るしかなかった。

「わふゝ。嵐のような人でしたね」

「うん、そうだね」

S
I
D
E
E
N
D

バカテスト第四問（前書き）

バカテストです

バカテスト第四問

家庭科

あなたが生きていく上で必要と考える物を答えなさい。

直枝理樹の答え

「ライフライン、家、リトルバスターズ」

教師のコメント

住む場所と電気などのライフラインですか。三つ目は友人ということですかね、先生この解答は嫌いではないです。

棗恭介の答え

「努力、友情、勝利」

教師のコメント

つまり棗君はジャ○プがあれば生きていけるのですね。

井ノ原真人の答え

「プロテイン、ダンベル、バンダナ」

教師のコメント

筋肉があれば生きていけるのですか……ちなみにバンダナがないと死んでしまうのですか？

交渉と参戦（前書き）

短いですが投稿です。

誰か……文才をくれ。

今回は後書きを見ていただくと助かります。

交渉と参戦

夜。

寮の食堂でリトルバスターズの面々が夕食を食べている中小毬が夕方にあった少年の事を話していた。

「それで私とクーちゃんが家庭科室に行ったら何故か男の子が砂糖と塩を食べに来ていたんだよ」

「はあっ？ 砂糖に塩？」

真人が疑問の声を漏らす

「う、うん。何でそんな物を食べるの？ って聞いたら逆に食べないの？ って聞かれちゃって……」

「阿呆だな」

鈴が一撃で切り捨てる。

「それはまた……珍しい人だね」

理樹が少し引きながら答える。

「うん。確かFクラスの人だって言ってたから試召戦争の最中だったのかなあ？」

「多分それで合ってると思うけど……」

「でも、いくらなんでも砂糖と塩を食べるかなあ？」

「食べるというより舐めるが表現としてはあってないか？」

何故か場が塩と砂糖の話で盛り上がる。

「おい、お前ら。ちょっとこっちを向いてくれ」

しかしそこにストップをかけたのは恭介だった。

「何だ？ 野球の相手でも見つかったのか？」

謙吾が尋ねる。

「そうじゃないが。そうとも言えるかもな」

「それはどういうことだ恭介氏？」

「試召戦争に参加することが決まったんだが……その協力条件に野球の相手をするという項目を加えておいたからな。相手が条件を呑めば野球の相手も見つかることになるからそう言ったのさ」

「へー、もう見つけたの？ 早かったね。それで相手は？」

「試召戦争の相手はBクラスだ。ちなみに味方するのはFクラスだ」

「え？ そうなの？」

小毬が驚いた声をあげる

「ああ、代表の坂本と接触してきたんだがな……様子見のつもりがいつの間にか引き込まれてしまった」

「でも、どうせ恭介も参加するつもりだったんだからいいんじゃない？」

「まあ、理樹の言う通りなんだが……あの坂本って奴らはいいいライバルになりそうな気がするぜ」

「確かに、恭介を丸め込むとはなかなか頭の切れるやつのような」

「謙吾の言う通りだね、やっぱりFクラスだからって、頭の回転が悪いつてわけじゃないみたいだね」

「ま、とにかく明日から俺達も参加するから、準備はしといてくれよ？」

「了解、わかったよ。ってええええ！？」

さらっと爆弾発言をした恭介に理樹がきっちり反応する。

「ちょ、ちょっと！？　いきなり！？　いくら何でも急過ぎない！？」

「理樹の言う通りだ。　恭介、少しは猶予はないのか？」

「ない！」

理樹と謙吾の反論、というか反発に清々しいくらいきっぱりと返事

をする恭介。

「結局、こうなるんだよね……」

真人の呟きに、その場にいた全員が無言で同意した。

翌日

「Fクラス代表の坂本雄二だ。昨日の条件を吞ませて貰うことにした」

「Sクラス代表の棗恭介だ。こちらこそちらの条件を吞ませて貰う」

「そうか……なら同盟は成立したということでもいいな？」

「ああ、こちらとしては異存はない。ところでこっちからは何人出せばいいんだ？ そちらも誰が抜けるか決めてもらわないといけないしな」

「ああ、それについては五人こちらから抜ける予定だから、そちらからは五人出して貰いたい」

「そうか……なら理樹、鈴、真人、謙吾、来ヶ谷の五人に出て貰う

か……残りのメンバーはとりあえず試召戦争の雰囲気慣れしてくれ」

「わふっ、了解なのです！」

「了解だよ。頑張って鈴ちゃん」

「ふっ、この程度。はるちんの出番ではないようですね」

「……皆さん、頑張ってください」

恭介に控えているよう言われた面々がそれぞれ思い思いの言葉を返す。

ここで状況とSクラス、つまり理樹達の参加による特別ルールについて説明しよう。

まず現在の時刻は朝であり、恭介と雄二達がSクラスの教室で昨日出した条件を互いに確認している所だ。

次に特別ルールについて説明しよう

Sクラスは人数が少ないため試召戦争を行う場合少し特殊な事が可能となる。

それは同盟と共同戦線である。

簡単に説明すると人数が五十人になるよう参加人数を調整するのであればSクラスに限って他クラスと共同戦線を張ることが可能となる、また同盟を結んだ場合、試召戦争に参加しない生徒、つまり非戦闘員が生まれるが彼らと交代することも可能だ。つまり、上手く

「よし、それじゃあ行くぞ！」

ミッションスタートだ！

恭介の声が教室に響いた

交渉と参戦（後書き）

さて、今回は少しアンケートを行います。

図々しいとは思いますが見るだけ見て戴けると助かります。

アンケートというのは簡単、皆さんに理樹達リトルバスターズのメンバーの召喚獣の武器、装備について意見を求めたいのです、真人は素手、だとか謙吾は竹刀だとか、

可能な限り採用しますので、感想なりなんなり使って意見を下さるとありがたいです。

ちなみに召喚獣に限らず要望については受け付けますので。

では今回はこのあたりで失礼します。

次回予告

「ちょっと真人！？それは駄目だって！？」

「筋肉馬鹿が！」

「筋肉が通りまーす！」

「こいつ馬鹿だ！」

「ふっ、ここはおねーさんに任せてるがいい」

次回 大乱闘 ～ BATTLE

バカテスト第五問（前書き）

バカテストです。

バカテスト第五問

心理テスト

あなたは今小学生だと考えてください。あなたは今日友達と遊び、夕方になったので帰ろうとしています。そのとき友達が「さようなら」と言ってきました。あなたは何と返事をしますか？

直枝理樹の答え

「また明日」

教師のコメント

また明日も遊ぼうということですね。このことから直枝君は非常に友達を大切にするタイプだとわかります。

井ノ原真人の答え

「じゃ、いい筋肉で。また会おう」

教師のコメント

とりあえず余計なコメントがある気もしますが、井ノ原君も友達を
気遣っていることから友情に厚いタイプだとわかります。

棗恭介の答え

「さらば諭吉い！」

教師のコメント

貴方は福沢諭吉と友人なのですか？ とりあえず福沢さんに対して
謝罪を要求します。

Bクラス戦開始！（前書き）

戦闘描写が下手くそだ………死にたい。

Bクラス戦開始!

午後一時前。

開戦まで後5分程だ。

その開戦を前にしてFクラスでは雄二が演説を行っていた。

「いいか? 今回の戦いはスピードが鍵を握るからな、チャイムと同時にダッシュでBクラスに向かって奴らを教室に押し込めろ。」

『『『おお〜!』』』

「よし! これからBクラス戦に突入する! 覚悟はいいな野郎ども!」

『『『うおお〜!』』』

「よし! それから今回はSクラスと共同戦線を張ることになったからな。とりあえず今から紹介するが……すまん、入って来てくれ」

雄二が呼ぶとリトルバスターズのメンバーがFクラスに入ってくる。

『『『おおおおお!?』』』

すると女子メンバーを見て男子が歓声を上げる。

リトルバスターズの女子メンバーは元の世界でも人気があったのだから当然であると言えよう。

一方、当のメンバー達かというと

「うわ……これは想像以上に酷いね」

「めっちゃくちゃ、いやもうくちゃくちゃ汚いな」

「おい、あれキノコじゃねえか？」

「畳に茶伏台、想像以上に酷いなこれは……」

「わふー！ベリーベリーばつとなのです！」

「こ、これはちょっと酷いね……」

どうやらFクラスの酷さに驚くあまり、Fクラスの男子の歓声もあまり聞こえていないようだ。

全員が入って来たのを確認すると雄二が恭介を促した。

頷く恭介。

「まずは自己紹介をさせてもらおう、Sクラス代表の棗恭介だ。リトルバスターズのリーダーもやらして貰っている」

その一言にFクラス男子がざわめき出す。

それは当然、恭介が語ったリトルバスターズについての疑問によるものだ。

「まあ疑問に思うのももつともだろうが……とりあえずよろしく頼

むぜ」

恭介が挨拶を終える。

この後はメンバーがそれぞれ自己紹介をしていたが、女子メンバーに対してのFクラス男子の反応はまあ予想通りのものといえた。

そして午後一時

「よし、おまえら行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『『『サー、イエッサー！』』』

返事をする勢いよく教室を飛び出して行くFクラス男子達。

理樹はその勢いに圧倒されたが。

「うおおおっ！」

「貴様には負けん！」

真人と謙吾は高い運動能力もあってか、ついていった。

「まあ、気にするな少年。それより私達も行こうじゃないか」

呆然とそれを見ていた理樹だったが来ヶ谷に言われて我に返ると慌てて鈴と来ヶ谷とともに真人達を追った。

そして戦線に辿り着くと聞こえてきたのは……

「井ノ原真人戦死！」

真人が戦死したという報告の声だった。

「ちょっと真人!？」

理樹が驚いて声をあげて真人を呼んだが既に真人は鉄人に連れさられた後だった。

そして聞こえてくるBクラスの会話。

『おい、さっき倒した奴ってSだったらしいぜ』

『嘘だろ!? 数学12点だったぜ?』

『いや、だから案外Sクラスってバカなのかもしれないと思ってな』

「」「……………」

それを聞いて沈黙する理樹達。

「真人……どうして数学で挑んだんだろう……」

「ふむ、察するにあそこで戦っている謙吾少年に張り合おうとしたのだろうな」

来ヶ谷に言われたほうを見ると謙吾の召喚獣が数学で戦っていた。

「真人……少しは考えようよ……」

理樹が歎いたが後の祭だ。

「ふむ、しかし謙吾少年の召喚獣はやはり胴着なのだな」

「武器も竹刀だ。謙吾をそのまま小さくしたみたいだな」

来ヶ谷と鈴が謙吾の召喚獣を見て感想を漏らす。

釣られて理樹もそちらを見ると戦う謙吾の点数が表示されていた。

Sクラス 宮沢謙吾

数学178点

VS

Bクラス 芳野孝之

数学161点

謙吾の召喚獣が竹刀で敵の召喚獣を真っ二つに切る。

（竹刀でどうやって斬ってるんだろう？）

理樹はどうでもいい疑問を抱いた。

その後も戦いは続いていったが明らかにFクラスは劣勢だった。

「数学側、戦力が足りない！」

Fクラス男子の声が響き渡る。

「ふむ……ではそろそろ動くか。鈴君も少年も、そこでおねーさんの華麗な姿を見ているといい」

来ヶ谷が動く。

「Sクラス来ヶ谷唯湖だ。 Bクラスの少年少女に数学勝負を申し込む」

『試験召喚！』

来ヶ谷の召喚獣が姿を表す。

「……………なんか、妙に露出が大きい召喚獣だね」

現れた召喚獣は胸の部分が大きく開いた鎖帷子をきており、クノイチと呼んだほうがぴったりくる姿だった。そして装備は……

「ノリムネ？」

そう刀だった。以前ランキングバトルで来ヶ谷が使っていた模造刀そっくりだった。

そして互いの点数が表示される。

Sクラス 来ヶ谷唯湖

数学 624点

VS

Bクラス×5人

平均160点

「ふっ、」

来ヶ谷が不敵に笑うと召喚獣の姿が掻き消える。

「「「うわぁ!?!」」」

次の瞬間Bクラスの生徒の召喚獣が吹き飛んだ。

……何故か男子だけ。

そして再び彼らの来ヶ谷の現れた時、何故かBクラス女子二人の召喚獣の装備が変わっていた。

……何故かメイド服に

「ふむ、猫耳を付けたほうがよかったか?」

一人そんな相手二人の召喚獣を見て呟く来ヶ谷。

「来ヶ谷さん！？ 一体何なのそれ！？」

周りの皆が呆然とする中、理樹が一人素早くツツコンだ。

「何、これが私の腕輪の効果だよ少年。 何と相手の召喚獣を萌える恰好に着替えさせた上で、私に従わせることができるのさ」

そう言って来ヶ谷の召喚獣が腕を動かすと相手二人の召喚獣が来ヶ谷の側に控えるように動く。

「召喚獣がコントロールできない！」

「律子どうしよう！？」

相手の女子二人が動揺した声をあげる。

「ふふ、少女達の召喚獣による萌え軍団の完成が楽しみだよ」

陶然とした顔をして完全に妄想の世界へ入り込む来ヶ谷。

（……………恐ろしい）

その場にいた全員。（特に女子が）そう思った。

あの後戦闘は続いたが、来ヶ谷の召喚獣は恐ろしく強く、男子の召喚獣は吹き飛ばされ、女子の召喚獣はメイド服を着せられて来ヶ谷の支配に入れられ。

Bクラスはどんどん後退し、午後4時には完全にBクラスを教室内に押し込むことに成功した。

「僕らがいた意味って……」

「なかったな」

理樹がそうばやくと鈴が続きを補足してくれた。

Bクラス戦開始！（後書き）

ご意見お待ちしております。

召喚獣設定（前書き）

ちよつとした召喚獣の設定です。読まなくてもよいかと思います。

召喚獣設定

真人

描写をする前に速攻で戦死したが、とある強化だと最強と言える強さを誇る。

装備は 何と無し。本人いわく筋肉が武器であるとのこと。（実際はあるが腕輪がないと使用不可）

召喚獣の外見は学ランにバンダナを巻いた姿であり。真人をそのまま縮めたようなもの。

謙吾の召喚獣

描写があつたが装備は竹刀と胴着である。

こちらも真人と同じくまさしく謙吾を縮めたままの姿である。

特殊能力得意科目は共に未定

来ヶ谷

召喚獣の装備は鎖帷子。

武器は刀であり、以前にランキングバトルで使っていたレプリカノ

リムネに似ている。

腕輪の能力は、相手の召喚獣をメイド服に着替えさせた上で操ることができるといふ、本人の煩惱がそのまま顕れたかのような能力。
(ちなみに男子だと執事服になるらしい)

得意科目は数学。

Bクラス戦Ⅰ後半（前書き）

自分で書いててわからなくなりました。おかしいところがあります
がどうぞ

Bクラス戦―後半

あの後、Bクラスを教室に押し込んだ時点で戦闘中止を告げられた理樹達は、Fクラスの教室に戻ってきていた。

「？ 理樹、真人はどうした？」

恭介が理樹達の姿を認めると1番目立つ真人の姿が見えないことに気づいた。

「あ、真人は戦死しちゃったよ」

「何？ 真人がか？ どうしてやられたんだ？」

「まあ、真人だからね……」

「うむ、まあそういうことだ……」

理樹がちらっと謙吾を見ながら歯切れ悪く呟くと恭介は理解したようだ。

「真人……運のない奴だ」

どうやら教科が数学だったことを歎いているようだ。確かにまあそこそこ点数が取れていた教科だったなら戦死は免れただろう。（その理由についても後日）

「よし、それじゃあ今日はここまでだ！」

「戦闘中止だおまえら、明日また同じ状況で再開する」

恭介と雄二の声が響いた

SIDE 雄二

今日の戦闘は思いの他上手くいったな。明久に聞いた話じゃSクラスの間中が暴れたらしい。まさかBクラス五人を相手にするとは……恐ろしいぜまったく。始めに向こうから接触してくると思っていなかったが……

まあ何にせよ、仕切り直しだな。

だが情報は多いに越したことはないからな

「おい、明久。Sクラスの間中はどうだった？」

「え？ うーん。一言で言うなら恐ろしかったよ」

「うむ、確かにあれはわしも怖いもの」

恐ろしい？ 秀吉まで同意するとはそんなにSクラスの間中はやばいのか？

俺がそんなことを考えていると。

「何バカな事を言ってるのさ秀吉！ 秀吉なら絶対似合うから寧ろやられるべきだよ！」

「それは、わしにとって不幸以外の何物でもないのじゃが!？」

「いや、秀吉も自分のメイド服姿を見ればそんな考えはなくなるよ」

メイド服? 一体こいつらは何を言ってるんだ?

「おい、明久に秀吉。詳しく、俺にも分かるように説明しろ」

「ん? ああえっと……」

この後來ヶ谷の能力を聞いた雄二は戦慄すると同時にSクラスのリトルバスターズの恐ろしさ? を知ることとなった。

S I D E E N D

翌日 昨日と同じ教室の入口から試召戦争は再開されたが、FクラスとSクラス（リトルバスターズ）の面々は予想外の苦戦を強いられていた。

教室の入口は狭い為多対一の戦いに持ち込めないのだ。しかしそれは当初から予想されていた為に、本日も来ヶ谷による強行突破が計られたのだが、どうやらBクラスは昨日の戦いで来ヶ谷の性格とどうか性癖を見抜いたらしく、入口に男子、さらに言えばむさ苦しい、もしくは熱苦しい男子ばかりを配置したのだ。

その結果、著しくやる気をそなった来ヶ谷をたいした苦労もなく

撃退。

しかし、教室に押し込まれているせいでBクラスも反撃に転じることもできず、戦線は膠着状態に陥っていた。

「ちょっと恭介、一体どうするの？」

本日も昨日に引き続き参加した理樹が恭介に指示を仰いでいた。

ちなみに今日の参加者は理樹、クド、小毬、美魚、葉留佳の五人だ。

現在五人は廊下の後ろで戦況を見守りながらトランシーバー、（恭介謹製鈴も野球メンバー勧誘時に使用）を使って恭介と話していた。「それについては、とにかく時間を稼いであれと坂本から指示がきているから、とりあえず戦線を維持してくれ、もうすぐ坂本がそっちに着くはずだ」

「了解！」

理樹はそう返すと自らも戦闘に加わるべく前にでた。

SIDE根本

「くそっ！ Sクラスの奴ら！」

学年最下位クラスのFクラス相手に苦戦している状況に根本は苛立っていた。

「あの時邪魔さえ入らなければ……！」

苦々しい思いとともに根本は昨日の放課後を思い出していた。

戦闘中止後のFクラス

「何？ Cクラスの様子が怪しいだど？」

「……………（こくり）」

放課後、明久達と話していた雄二はムツツリーニからCクラスの動きが怪しいことを伝えられていた。

「漁夫の利を狙うつもりか、いやらしい連中だな」

「雄二、どうしたの？」

「ああ、どうやらCクラスの動きが怪しいらしい」

「まさか試召戦争の準備ではなからうな？」

「そのまさかだろうな、多分この戦争の勝者を相手に戦うつもりだろうな……」

「ならどうするの？」

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるぞ、と

か言って脅かしてやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろう」

そうして、明久達はFクラスに向かった。

……ところが

「当然却下。　だって必要ないだろう？」

「なっ！？　根本君！　Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

Cクラスに向かった明久達は根本の罠にはまっていた。

そう、ここまではよかったんだ……

しかしここから先を思い出して根本は床を蹴った

もう少しで坂本を討ち取れたというのに。

逃げ出した雄二達だが、走る速さを姫路に合わせていたため追いつかれ始めた。

しかしもう少しで召喚可能範囲に入ろうとしたその時！

「やほー、これはFクラスの皆さんじゃないですか。何かお困りのようですね」

葉留佳が現れた。

「Sクラスの三枝か？ 見ての通りだ、追われている」

雄二が返事をする。

「成る程、成る程。ならここははるちんにお任せを」

そう言って葉留佳は廊下に何かをばらまいた。

すると次の瞬間！

「うわぁ!？」

「な、何だ!？」

立て続けに追っ手のBクラスの生徒が転倒する。

「おい、何してやがる! さっさと追え!」

「わかってるけど何かがばらまいてあって追えないんだよ!」

「これは……ビー玉?」

後ろからBクラスの生徒の困惑した声が聞こえてくる。

それを葉留佳は満足そうに見ると、雄二達を促した。

「やはー、さー一緒に逃げようラナウェイ!」

葉留佳の声にはったとなった雄二達はFクラスに無事避難した。

あの時仕留めることが出来ていれば……

根本は悔やんだが後の祭だった。

S I D E E N D

一方廊下では……

「本当にロープなしで大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

恭介と雄二によって作戦に向けての準備がちゃくちゃくと進んでいた。

Bクラス戦―後半（後書き）

ラストで次の展開が読めた人もいるかもしれないですね。

バカテスト第六問（前書き）

バカテストです。

バカテスト第六問

時事問題

先日民主党の柳田法務大臣が辞任、（実際はほぼ罷免された形でしたが）しました。では何故辞任することになったのか原因を答えなさい。

直枝理樹の答え

「国会での答弁を軽視する発言を行ったから」

教師のコメント

正解です。野党が問責決議を採択しようとしたため辞任しましたね。

来ヶ谷唯湖の答え

「むさ苦しい中年だから」

教師のコメント

何てことを……

井ノ原真人の答え

「筋トレをサボったから」

教師のコメント

大臣は筋肉が弱いといけないのでしょうか？

Bクラス戦終結！（前書き）

今回短いです。どうぞ

Bクラス戦終結！

あれから一時間、膠着状態が続いていた廊下に変化が起きていた。

「皆、恭介からの指示だからよく聞いて、今から教室に突入するか
ら誰か点数に自信ある？」

理樹が恭介からの指示を実行する為に点数が高い人を捜す。

ちなみに恭介からの指令は「5分後に教室に強行突入しろ」といったものの為、理樹は点数が高い人を探していた。

「……（スッ）」

理樹が女子メンバーに問い掛けると美魚が手を挙げた。

「西園さん、いける？」

理樹が確認するように尋ねる。

「………わかりませんが、やれるだけやって見ましょう」

そう言って美魚はBクラスの入口に向かった。

「……Sクラスの西園美魚です。 古典勝負を挑みます」

「…試験召喚」

美魚の召喚獣が姿を表す

「あれは……？」

その召喚獣は理樹が声をあげてしまう程他とは違召喚獣だった。

何故なら……

「あれってビームサーベル？」

小毬が声を上げたように美魚の召喚獣は巨大なビームサーベルを構えているのだ。装備は制服なのが余計それを際立てている。

理樹達が呆然と眺めていると点数が表示された。

Sクラス 西園美魚

古典432点

V S

Bクラス 野中長男

古典172点

美魚の召喚獣が相手の武器ごと真っ二つにする。

すぐさま次の相手が向かってくると美魚の召喚獣の手からビームサーベルが消え今度はビームライフルを持っていた。

「今度はライフル!? って、これってまさか……化学部のサイバー兵器?」

理樹が思わず声をあげると美魚が丁寧にも答えてくれた。

「はい、私の召喚獣の武器は毎回ランダムに決まるんです。腕輪に
関しては……また今度説明します」

そう言いつつライフルで相手を吹き飛ばす美魚。

Bクラスは軽い混乱が起きつつあった。

一方恭介は……

「よし、そろそろいくかな」

屋上からBクラスに降りようとしていた。

「準備はいいか?」

「……（コクリ）」

隣にいるムツツリーニに確認をとる。

「よし! それじゃあ行くか!」

そして恭介は屋上から飛び降りた。

ダンッ！ダンッ！ダンッ

三つの着陸音が響く。

そして……

「Sクラス棗恭介だ。Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」

「Bクラス山本が受けます。試験召喚！」

「ちっ、近衛部隊か。理樹、援護しろ。こいつらまとめて片付けるぞ」

「わかった、西園さん。任せたよ」

「「試験召喚！」

二人の声が重なる。

Sクラス棗恭介&直枝理樹

保健体育 323点&221点

V S

Bクラス生徒×5

保健体育平均160点

「行け！土屋！」

恭介が声を張り上げる。

こうなっただらもはや根本を守る人間は一人もない。

「ムツツリイーニイーンツ！」

叫ぶ根本の召喚獣をムツツリーニの召喚獣が小太刀を一閃し、一撃で切り捨てる。

今ここに、Bクラス戦は終了した。

戦後処理と理樹の災難（前書き）

少しオリジナリテイがないかな……

戦後処理と理樹の災難

Bクラス代表 代表根本恭二戦死！

その事実を終戦後、学園中に広がった。

「「うおおおお！」」

Fクラスの勝鬨の声上がる。

「よし、よくやったぜ理樹！ミッションコンプリートだ！」

ミッションコンプリート！！

その声を聞いてリトルバスターズのメンバーも勝利を実感した。

一方、すでに雄二達が戦後対談を始めていた。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓伏台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

当然理樹達リトルバスターズのメンバーも例外ではない。

「ちょっと恭介！？ 一体どういうこと！？」

「落ち着け理樹、後で説明する」

そう言って雄二の説明を聞くように促す恭介。

「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「うむ。確かに」

雄二の言葉に納得したような言葉を浮かべるFクラスの面々。

しかし理樹達はよく状況を理解していなかった。

「……条件はなんだ」

力なく根本が問う。

「条件？ それはお前だよ、負け犬代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝ってやってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

凄いいい様だが、そう言われるだけのことをやってるだけあって誰もフォローしない。

わかっていないのは理樹達リトルバスターズのメンバーぐらいだろう。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ」

昨日の放課後に雄二が言っていた、取引の材料を提案する。

「Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来ていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやっていい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるただけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。

当初の予定ではそれだけだったが……

「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃がそう」

そう言つて雄二が取り出したのはとある事情により秀吉が着た女子の制服

当初の予定ではなかったのだが、昨日の放課後に明久達から来ヶ谷の召喚獣の能力を聞いた雄二の個人的感情によるものだ。

「ば、馬鹿なことを言うな！ この俺がそんなふざけたことを……！」

根本が慌てふためく。

理樹も同情の目を向けていたが。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラス生徒達の温かい声援、それだけで根本のこれまでの所業がわかる気がしたリトルバスターズのメンバーであった。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、寄るな！ 変態ぐふうっ！」

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラスの男子。流石の雄二も変わり身の早さに驚いている。それはリトルバスターズのメンバーも同じだったが。

「では、着付けに移るとするか。明久、後は任せたぞ」

「了解っ」

ぐったりと倒れている根本に近付き制服を脱がせる明久。その姿を見て美魚が

「男子の制服を脱がす美少年……これはあります」

と言って鼻を押さえていた。

そうこうしているうちに制服を剥がされた根本だが、明久がどう着せればいいのかわからず悩んでいた。

すると……

「ふむ、私の出番か。少年、来てくれ」

そう言って前に出る来ヶ谷。

「え？ 僕……？」

訝しみながらも言われた通りも前に出る理樹。

「少年。私が手本を見せるからその通りにしたまえ」

そう明久に声をかけると来ヶ谷は一瞬で理樹の服を剥ぎとった。

「うわぁ!？」

突然制服を取られた理樹は慌てて服を取り返そうとしたが、そうさせる程来ヶ谷は甘くない。

「貸したまえ、女子の制服はこうして着せるのだよ」

そう言って次々と理樹に女子の制服を着せて行く来ヶ谷。

理樹も抵抗しているのだが、まったく意味がなかった。

そして……

「完成だ」

満足そうに頷く来ヶ谷。

そこには秀吉にも劣らない美少女、否理樹の姿があった。

それを見た女子メンバー及びBクラス女子は歓声をあげ、男子は絶句していた。

「ちょ、ちよつと、来ヶ谷さん！？ どうして僕に着せるのさ！？」

そう言って理樹は抗議するが半泣きの為、ますます可愛く女子らしくなっており逆効果だった。

「理樹君凄く似合ってるよ」

「リキ、べりーべりーきゅーとなのです！」

「うわー！理樹君超可愛いじゃないですか」

「うん。似合ってるぞ理樹」

「そんな事言われても嬉しくないよー！」

女子メンバーからの称賛の声を受けた理樹の悲しい声がBクラスに響いた。

余談だが、理樹の着せ替えに夢中になったBクラスの女子及びリトルバスターズ女子メンバーに放置された根本恭二は、トランクス一

張で宣戦布告するはめになり、警察に通報され、犯罪者となった。

ちなみに理樹の女装姿はその後ムツリニによって撮影がなされ、一枚五百円で販売され、300枚近く売り上げ、写真集まで作られたうえにファンクラブまで結成され理樹の心に大きな傷を作ると同時にある騒動の引き金を引くこととなる。

バカテスト第七問（前書き）

バカテストですが……ネタが欲しい……誰かお題を下さい

バカテスト第七問

あなたが最近悩んでいることについて答えなさい

直枝理樹の答え

「最近自分の男らしさというか……周りの人間というか……そんなものに疑問を感じました」

教師のコメント

強く生きてください。先生応援しています。

棗恭介の答え

「妹が……反抗期で困っている」

鈴のコメント

「うっさい。キモイ。死ね」

教師のコメント

……確かに大変そうですね、頑張ってください。

井ノ原真人の答え

「最近プロテインが不足している」

教師のコメント

そうですか。

宮沢謙吾の答え

「剣道の素振りをしている時の声が気になる」

教師のコメント

宮沢君にしては珍しい悩みですね。何かありましたか？

交渉（前書き）

明日おそらく投稿できないので投稿します。

交渉

Bクラス戦終了から二日後。

あれから理樹が落ち込んだり、理樹が引きこもったりしたがAクラス戦を前に理樹も復活してFクラスで雄二から最後のAクラス戦に向けての作戦の説明を受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能と言われていたのにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったのことだ。感謝している」

「ゆ、雄二！　どうしたの？　らしくないよ？」

明久が驚いている。

そんなに驚くことかな……と理樹が思っていると……

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

雄二が認めていたので呆然とした。　しかし周りのFクラスの面子は気にしたようすもない。

雄二の演説は続く

「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝って生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ！」

『おぉーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃねえんだーっ!』

『へっ、いいこと言うじゃねえか』

『真人!? 共感しちゃ駄目だよ!?』は

『阿呆だな』

最後の勝負を前に、皆の気持ちが一つになっている。そんな雰囲気
が漂っていた。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決
着をつけたいと考えている」

先日の昼食時に聞いた話だったので明久達は驚いていなかったが、
Fクラス及びリトルバスターズの皆はかなり驚いたようで、教室中
にざわめきが広がった。

『どういうことだ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

ちなみにもう理樹は慣れたらしく今回はおとなしく雄二の説明を待

っていた。

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、て机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

「……恭介、翔子さんって？」

理樹が小声で尋ねる。

「ああ、Aクラスの代表だったはずだ」

そこまで聞いて理樹は疑問に思った。Aクラス代表ということは学年トップであるということだ、こう言ってはなんだが……

「馬鹿の雄二が勝てるわけなああっ!？」

明久が考えたことを代弁してカッターを投げられていた。

「次は耳だ」

どうやら本気で明久を殺そうとしていたようだ。

「まあ、確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

そこを認めるならカッターを投げなくてもよかったんじゃないかと理樹は思ったが口には出さなかった。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？　まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

雄二の演説は続く。

どうやら周りは雄二の言うことを信じているようなので理樹は再び驚いた。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『おおおーっ！！』

教室に皆の声が響いた。

そして理樹は恭介に少し似ているなあと思った。

「さて、具体的なやりかただが……」

雄二の説明が始まった。

「ねえ恭介、信じていいと思う？」

「俺は良いと思うぜ。奴の筋肉は信用できる」

「うっさい、ぼけっ！」

「鈴の言う通りだ、筋肉は関係ないだろう」

「なら、どうするのだ？ 私は恭介氏の決定に従うが」

「……そうですね、それでいいと思います」

「そうだねえ、私もそれでいいよ」

「あい、あぐりーういずなのです」

「私は姐御の意見に賛成ですね」

「そうか……なら信じてみよう」

恭介の出した結論は信じるだった。

「うん、それじゃあ僕らもこのまま参加で」

頷くメンバー達。

意思統一が終わった所で再び前を見ると――

「総員、狙ええっ！」

男子が上履きを構えていた

「なっ！？ 何故明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！ Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

またもや呆然とそれを眺める理樹達。今まで騒ぐ側だったリトルバ

スターズのメンバーもFクラスにはなかなかついていけないようだった。

「遺言はそれだけか？ ……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むものだ」

「了解です隊長」

一方理樹達は唯一状況を把握していた来ヶ谷によって説明がなされていた。

「つまり、代表の雄二少年とAクラス代表の霧島君が幼なじみだとわかって嫉妬している訳だな、霧島君は美人だし仕方ないだろう」

「嫉妬でここまでするものなのかなあ……」

「成る程、どおりで男子だけ殺気だっている訳だな」

理樹と謙吾が声を漏らす。

と、見ている内に事態は終息していった。

「と、とにかく俺と翔子は幼なじみで、小さな頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

雄二がまともに入る。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机はー」

『システムデスクだ！』

S I D E 理樹

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスと」

「我がSクラスは」

「「試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

恒例の宣戦布告であるが、理樹達は初めてである。

今回は雄二達に加えて理樹達もAクラスに来ていた。

ちなみに鈴達はAクラスの設備を小毬らと見て周っている。

「うーん、何が狙いなの？」

「もちろん俺達の勝利が狙いだ」

相手が訝しむのも無理はないだろう。

「賢明だな」

予想通りの展開、しかし雄二はBクラスやDクラスを引き合いに出してうまく交渉していく。

「……それって脅迫？」

相手が思わずといった感じで尋ねてくる。

まあ悪役だしなあ……

と理樹が思っていると

「……受けてもいい」

「うわっ！」

いきなり声がかかった。見れば霧島さんが側に来ていた。

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり条件がある」

「条件？」

「……勝負は互いに代表を出しての五回勝負、そして……負けた方は勝った方の言うことを一つだけ聞く」

まあ、当然警戒するよね……

そう考えた理樹だったが何故か明久達の様子がおかしかった。

「ムツツリーニ！撮影の準備はまだ早いよ！ていうか負ける気満々じゃないか！」

理樹は疑問に思ったが交渉に集中し直した。

「じゃ、こうしよう？勝負内容の内、三つはそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」

相手から妥協案を得ることができた。

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝ってに！」

何故かまた明久が騒いでいたが……

「安心しろ、姫路には迷惑をかけない」

と雄二が言うとおとなしくなった。

「……勝負はいつ？」

「そうだな……10時からでいいか？」

「……わかった」

独特の雰囲気を持つ人だなあ、と思いながらも交渉は終了した。

バカテスト第八問（前書き）

バカテストです

バカテスト第八問

貴方が尊敬する人物を答えなさい※複数解答可

直枝理樹の答え

「棗恭介」

教師のコメント

おや、意外ですね。まさか棗君とは……しかし貴方達を見ていると分かるような気がします。

棗恭介の答え

「直枝理樹」

教師のコメント

互いに信頼して尊敬しあっているんですね。友情は特に高校時代の友人が1番続きやすいそうなので大切にして欲しいですね。

リトルバスターズの答え

「「直枝理樹」」

教師のコメント

本当に貴方達は仲がいいですね、素晴らしいと……

井ノ原真人の答え

「ビリー、直枝理樹、鉄人」

教師のコメント

君にとって筋肉と友情は同列なのですね。解答を一つに絞るべきだったと後悔しています。

Aクラス戦開始！

SIDE理樹

「では、両名共準備はいいですか？」

立ち会い人はAクラス担任かつ学年主任の高橋先生が努める。

ちなみに多少理樹達の事情も知っている。

「ああ」

「……問題ない」

一騎打ちの場所はAクラスになった。まあこっちの方が広いから当然と言えるだろう。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは木下君？の姉の木下優子さん。

対するこちらは、

「はい、私がいきます」

対するこちらは小毬さん

「では、初めて下さい」

「試験召喚！」

二人の声が揃う。

Sクラス 神北小毬

英語 413点

VS

Aクラス 木下優子

英語 386点

「嘘っ!？」

対戦相手の木下さんから驚愕の声が漏れる。

「神北は勉強できたんだな」

真人が感心したように唸る。

「うん。あたしこう見えても英語は得意なんだよー」

真人の言葉が聞こえたのか小毬が振り返って胸を張る。

「くっ、こうなったら仕方ないわ！」

木下さんが召喚獣を突っ込ませる。

一方小毬さんは冷静に迎撃した。

「お菓子をどーぞ♪」

「「「は？」」」

なんと、小毬の召喚獣はどこから取り出したのかお菓子を優子の召喚獣に差し出していた。

「いきなり何を……って!？」

驚きはまだ続いた。なんと優子の召喚獣が誘われるように近寄ってお菓子を食べたのだ。

さらに幸せそうな顔をしてそのまま武器を捨ててしまう。

「え？コントロールが効かない!？」

慌てて召喚獣に指示を出す優子だが、召喚獣は全く反応しない。

それどころか点数が失くなって消滅した。

Sクラス 神北小毬

英語 749点

V S

Aクラス 木下優子

英語 0点

得点お互いの得点が表示される。

まずは僕らの一勝だ。

「鈴ちゃん、皆、勝ったよー」

「凄いな小毬ちゃん」

「わふー、こんぐらっちゅれーしょん、です小毬さん」

「ふむ、やるじゃないか小毬君」

「ありがとう唯ちゃん」

「……だから唯ちゃんと呼ぶのはやめて欲しいんだが……」

とりあえず、幸先よくスタートした。ちなみに小毬さんの召喚獣の能力幸せスパイラルといい、相手がお菓子を食べて幸せになり、自分も幸せになるという、オリジナルとは少し違うが概ね似た概念を発生、お菓子一つにつき50点を消費するが、代わりに相手の点数を吸収することができるという能力である。

「では、次の人」

高橋先生は動揺することなく進める。事前に能力を知っていたみたいだ。

「じゃあ、僕が行こうかな」

Aクラスからはボーイッシュな女の子が。

「…………俺が行く」

こちらはFクラスの土屋君が出る。

先日の保健体育の点数は圧巻だったしまず勝てるだろう。

「教科は何にしますか？」

高橋先生がムツツリーニに尋ねる。

「…………保健体育」

土屋君の得意科目が選ばれる。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね」

工藤さんが土屋君に話しかける。なんだろう？

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って、実技で、ね♪」

な、なんだかとっても問題発言！？ Aクラスはまともだと思っていたのに！

「そっちのキミ、直枝君だっけ？ 運動苦手そうだし、保健も込みで良かったらボクが体育を教えてあげようか？ もちろん実技で」

呆れて見ていたのがいけなかったのか、工藤さんに指名されてしまった。

「い、いやいいー」

「少年には必要ないさ、今度私がじっくりと教えてあげる予定だからな」

「うん。理樹には必要ない」

「わふー！ リキにはまだ早いのです！」

「理樹君にはまだ早いんじゃないかなあ」

「うわー！ 姐御に教えてもらうなんて、理樹君エロいなあ！」

「……必要ありません。直枝さんには恭介さんが」

「……………」

女性陣から猛反対された。……それと何故か背筋がゾクッ！とした。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試験召喚っ」と

「……………試験召喚」

どうやら軽くからかわれただけのようで二人は大人しく召喚を始めていた

『なんだあの巨大な斧は!?!』

吉井君の叫びが聞こえてくる。

工藤さんの召喚獣は見るからに巨大な斧を構えていた。しかも……

「腕輪付き!?!」

腕輪を装備していた。

ということは400点は越えているということだ。

これは厳しい勝負になる。僕だけじゃなくて、皆もそう思った筈
だけど…

「……………加速」

土屋君が呟いた一言で戦いは一瞬にして終了した

Fクラス 土屋康太

保健体育 572点

VS

Aクラス 工藤愛子

保健体育 446点

つ、強い！

「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいぞ」

恭介が驚く僕に教えてくれた。

「これで二対零ですね。次の方は？」

高橋先生が尋ねる。

Aクラス戦終結！（前書き）

短い上にオリジナリテイがないです

Aクラス戦終結!

SIDE 理樹

「じゃあ、俺が行こう」

そう言って前に出たのは謙吾

まあ女子からは小毬さんがでたから次は男子の番だろうけど……

「では、私が出ます。科目は物理をお願いします」

相手からはメガネをかけた女子が出てくる。

「試験召喚!」

二人の声が揃う。

Sクラス 宮沢謙吾

物理163点

VS

Aクラス 佐藤美穂

物理375点

「ぐっ！」

バトルが始まったが、明らかに謙吾が劣勢だ。

相手はCクラス戦を経験している分、Bクラスより動きもよかった。

「くっ！　まああん！」

謙吾が起死回生の面取りに行った。

「くっ！」

見事命中！　だけど……

「はあっ！」

相手の召喚獣は持ちこたえて反撃してきた。

Sクラス　宮沢謙吾

物理0点

VS

Aクラス　佐藤美穂

物理196点

謙吾の召喚獣が吹き飛ばされて点数がなくなる。

残念ながら点数の差が出たようだ。

「勝者、Aクラス佐藤美穂」

高橋先生の声が響く。

これで三対一だ。

「くっ、……すまん、負けてしまった」

謙吾が戻ってくるなり謝った。

「仕方ないよ、あの点数なもの」

慰める理樹。

「まあ、仕方ないさ、それより味方を応援しよう」

そういう恭介の言葉通り、応援したけど。姫路さんも負けてしまった。

ちなみにそのとき相手の久保君が呟いていた言葉が妙に気になった。

結果だけ載せておくと。

Fクラス 姫路瑞希

日本史 354点

VS

Aクラス 久保利光

日本史 402点

どうやら相手の得意科目だったらしい。既に科目選択権を二つ使ってしまったからこそその結果だ。

そして今、最終決戦を迎えようとしていた。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

Aクラスからはクラス代表の霧島翔子さん。

そしてこちらからは

「俺の出番だな」

坂本君。

「教科はどうしますか？」

霧島さんが負けるわけがないと思っているのか、Aクラスの皆は特に騒いだりしない。静かにしている。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

ざわ………！

坂本君の宣言で、Aクラスにざわめきが生まれる

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

これで僕らに可能性が出てくる。勝利の可能性が。

それを理解したからこそ、Aクラスの皆はざわついている。

「わかりました。そうになると問題を用意しなくてはいいけませんね。少しこのまま待っていて下さい。」

ノートパソコンを閉じ、高橋先生が教室を出て行く。

そんな先生の背中を見送りながら坂本君に近づく。

「雄二、あとは任せたよ」

吉井君が坂本君と握手していた。

「ああ。任された」

坂本君が握り返している。

「……………（ピツ）」

土屋君が歩みよりピースサインを坂本君に向ける。

坂本君が返事すると、口の端を軽く持ち上げ、元の位置に戻った。

「坂本。ここまで俺達が試験召喚戦争でこれとは思っていなかった、感謝するぜ」

そう言って恭介が右手を差し出す。

「こちらこそ、おかげで随分と助けられた。こちらこそ感謝している」

そう言って坂本君も手を差し出す。

二人は固い握手をした。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の坂本君と霧島さんは視聴覚室に向かって下さい」

戻ってきた高橋先生がクラス代表二人に声をかける。

「……はい」

「ああ」

二人が返事をして教室を出て行く。

そしてテストが始まった

モニターに次々と問題が表示されていく。

ちなみに作戦については聞いているのでわかっている。大化の改新が出ていれば勝ちだ。

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都
（ ）年 平安京に遷都

ついに年号の問題に入った。

「恭介：出てるかな？」

「さあな、坂本を信じるだけだ」

思わず尋ねたそ僕にう言って前を見る恭介。

僕も覚悟を決めてモニターを見る。

そして……

（ ）年 大化の改新

「あ……！」

出た。

「恭介！」

「ああ！」

「これで僕たちの！」

『勝ち……』

皆の声がそろそろ

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおっ！』

教室を揺るがすような歓喜の音が響いた。

《限定テスト日本史勝負 100点満点》

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

Fクラスの卓伏台がみかん箱に、Sクラスの机が卓伏台になった。

Aクラス戦終結！ (後書き)

ヒヨウガ様、また感想を下された皆様ありがとうございます。

特別短編く文化祭準備（前書き）

とりあえず、軽く書いてみました。二巻はこんな感じで短編三本くらいにまとめようと思うんですけど、どうでしょう？

特別短編／文化祭準備

「よし！ ではこれより我がリトルバスターズによる文月祭の出し物についての話し合いを行う！」

教卓の前で恭介が宣言する

「一体何をしたいのか制限はあるのか？」

謙吾が質問する。

「ない、一応申請してOKが出れば基本的には何をしてもいい。が、もちろん出来る範囲で頼むぜ」

「ふむ、そう言われると選択肢が多くて決めきれないな……」

謙吾が腕を組んで考え込む。

「なら喫茶店はどうか？」

小毬が提案する。

「喫茶店か、お茶を出したりケーキを出したりするようなやつでいいんだな？」

「はい。後はお菓子売りたいです」

「成る程、食べていって貰うだけじゃなく、お菓子の販売も行うと」

「わふ〜！ 私も賛成なのです！」

「小毬ちゃんが言うならあたしもそれでいい」

クドと鈴が賛成する。

「ふむ、なら私に衣装は任せてくれないか？」

「どういうことだ来ヶ谷？」

「うむ、喫茶店をするのだろう？ならばウエイトレスの衣装が必要になるだろうからな。私にそれを任せてくれるというのであれば私も賛成だ」

「別にそれくらいならいいんじゃない？」

理樹が賛成する。

「う〜ん。もう皆喫茶店に傾いてるみたいだしな……別に構わないぞ」

「うむ、感謝するぞ恭介氏」

「なら、真人と謙吾はどうなんだ？」

恭介が男子二人に尋ねる

「まあ、別に俺はそれでいいぜ、特にしたいこともないしよ〜」

「右に同じだ」

どうやら二人共賛成のようだ。

「私も賛成ですね。はるちん一人騒いでもしよーがないですから」

「……私もそれでいいです」

葉留佳と美魚も賛成。

「よし！なら決まりだ」

バンッ

と黒板を叩く恭介。

「我がリトルバスターズは喫茶店を行う！」

こうして、リトルバスターズは喫茶店を開くことになった。

SIDE理樹

「よし。ではまずは、各自に役職を割り振るぞ」

教室にいる全員に向かって、恭介が唐突に告げる………役職って、給仕係とかだろうか。

そう思っていると、恭介は真っ先に僕の方を指さしてきた。

「理樹、とりあえずお前、現場の責任者というか、店長な」

「えええ!？」

いきなりびっくりの人事だった!

「待ってよ恭介! どうして僕が店長なのさ!？」

恭介はクラス代表であり、リトルバスターズのリーダーなのだから、店長は恭介がやるべきだろうし、みんなもそう思ってるはずだ。

「そうだな。確かに、理樹だけに責任を押し付けるわけにはいかな
いからな。俺はオーナーになろう」

そう言って黒板にオーナーと書く恭介」

「いやいやいや、文化祭の出し物なのに、店長とオーナーを分ける
必要があるの!？」

「あるとも!」

恭介……ないはずなのに、またそんな地震満々なさ……

「つまりだ、俺が全体の責任者となるが、現場の指揮は理樹が中心
となって取れってことだ。みんなもそれで構わないな?」

恭介が皆を見渡す。

「おっけーですよー」

「バカ兄貴がやるより、理樹がやった方がマシだ」

「わふー！のーぷろぶれむなのです！」

「はるちんは全然構わないですよー」

「…特に問題はありません」

「うむ、少年が現場で右往左往する姿を見るのもまた一興だ」

「理樹がやるなら、問題ないだろう」

「そうだな。俺もお前を信用している」

「ーというわけで、決定だ」

みんなの言葉の最後を、恭介が締めくくる。

満場一致で可決された。

恭介は黒板に

『オーナー 棗恭介』

『店長 直枝理樹』

と書いた。

「他の役職は各自で自由に決めよう。誰かこの役職に就きたいという奴はいないか？」

皆を見渡す恭介。真っ先に手を挙げたのは真人だった。

「じゃあ、俺は筋肉を担当するぜ」

それ、どんな役職!?

「いいだろう」

いいの恭介!?

けど恭介は黒板に真人の役割を記しながら、少し考えてこう提案した。

「筋肉担当というだけじゃ何をするのかわからないな……何をするんだ?」

それを最初に尋ねようよ!

そう思った理樹だったが声にはださなかった。

「俺のこの逞しい筋肉を客に披露するのさ」

「ふむ……」

だからそれじゃわからないって!

そうツツコンだ理樹だったが恭介は黒板に真人の役職を書いていた。

『筋肉疲労担当 井ノ原真人』

「なんで『披露』じゃなくて『疲労』なんだよ!? いつも疲れ
てるみたいじゃねえか!? それとも何か、お前は無駄に筋肉つけ
てて力がありすぎるから、疲れてるくらいがちょうどいい、とでも
言いてえのか!?」

久々に真人の言い掛かりが炸裂していた。

「ああ、すまん。『披露』という漢字が出てこなくてな」

真人の言葉に、恭介が悪びれずに答える。

「まったく。わけの分からん担当になろうとするからだ、お前は」

そう言って呆れたため息をついたのは謙吾だった。

「そうだな。俺は料理もできないし、俺のような男がウェイターを
しても似合わないだろう。だから俺は裏方をしよう……ただし、た
だの裏方じゃない最高の裏方だ!」

「おう、わかったぜ」

謙吾の言葉に頷き、恭介は黒板に役職を書く。

『採光の裏方さん 宮沢謙吾』

「何をするんだこの裏方さんは!? しかも採光って、光を集めれ
ばいいのか!? 何なんだこの裏方さんは!?」

採光の裏方という謎の役職に、謙吾が頭を抱える。

「すまん、訂正する」

そう言って恭介が書き直す。

『最高の浦方さん 宮沢謙吾』

余計ひどくなっていた。

「今度は何者だ!？」

完全に謙吾は修正を諦めた。

「あたしは料理なんてまったくできない。だから料理を運んだりする」

鈴は無駄に堂々として言った。

いや、そんなに力強く料理ができないと断言しなくても……

「そうだな。鈴はウェイトレス、と。しかしこのままじゃつまらないな。何か特徴を出せればいいんだが……そうだ!」

『猫を統べるウェイトレス 棗鈴』

「何だそれは!？」

鈴が猫のように目を丸くして叫ぶ。

その横で、いつものようにのんびりした口調で小毬さんが発言する。

「それじゃあ、私はクッキー担当がいいな」

ひどく限定的な料理担当だった。

「ふむ、わかった。しかしこれだけじゃインパクトに欠けるからな、ちよつと加えよう」

『マスタークッキー 神北小毬』

なんだ、マスタークッキーって……

そんな感じで次々とそれぞれ役職？が決まっていた。

「……………」

数分後、黒板に書かれた役職担当表を見て恭介は眉間にシワを寄せていた。ちなみにそれぞれの役職は……

筋肉疲労担当 井ノ原真人

採光の裏方さん 宮沢謙吾

猫を統べるウェイトレス

棗鈴

マスタークッキー 神北小毬

この店で1番いいウエイトレスを頼む 来ヶ谷唯湖

女王 西園美魚

ロシアのボルシチ 能美クドリヤフカ

ビー玉使い（球児） 三枝葉留佳

「……………」

黒板を見て、僕も恭介と同じく頭を頭を抱えた。

「これじゃあ、誰が何の役職なのか、さっぱり分からないよ」

「ああ。俺も今それ気付いた」

しみじみと言う恭介

「いや、途中で気付こうよ……」

僕がそう言うのとふっ、と恭介は笑って言った。

「そうだな……これが孔明の罠か…」

「いや、どこにもなかったからね、そんなの」

結局、僕と恭介以外は小毬さんとクドが調理担当、ウェイトレは鈴と葉留佳さん、衣装が来ヶ谷さん、宣伝と企画が西園さん、雑用が真人と謙吾になった。

「よし！これで役職は全員決まったな。もちろん役職に関係なく臨機応変に対応してくれよ」

恭介が教室内を見回す。

「それじゃ、始めるぜーミッションスタートだ！」

僕らの喫茶店が始まった

S I D E E N D

バカテスト第九問（前書き）

なんかネタバレした気が……

バカテスト第九問

保健体育

顔の筋肉の名称を三つ答えなさい。

井ノ原真人の答え

「大頰骨筋、眼輪筋、上耳介筋……顔にも無数の筋肉があるんだぜ」

教師のコメント

これは700点目の問題なのですが……正解です。凄いですね、先生も知りませんでした。

直枝理樹の答え

「真人に聞いて下さい」

教師のコメント

まあ、わかりませんよね　ちなみに井ノ原君は正解でした。

宮沢謙吾の答え

「脳筋、筋肉馬鹿」

真人「こらてめえ！筋肉を馬鹿にしてんのかよ」

教師のコメント

喧嘩はやめて下さい。

特別短編 喫茶店始動! (前書き)

やや展開が強引かと

特別短編 喫茶店始動!

昨日の恭介の宣言から、皆が自分の役職通り動き出す。店が開くまでやることのない鈴と葉留佳は小毬とクドとお菓子作りを、来ヶ谷は何やら衣装のデザインを行い、美魚は何やらノートに熱心に何かの台本を書き込んでいた。

「やはり、実は私お菓子作りは得意なんですよ」

「あたしはよくわからん」

「鈴ちゃん、私が教えてあげるよ」

「れっつ、くっきんぐ!なのです」

「ああ、それを頼みたいのだが……。レンタルのほうがいいかー」

「ここはやはり、宮沢さんを……」

女性メンバーが精力的に働く中、男子メンバーは店の内装作りに追われていた。

「真人、そのテーブルはこっちに運んで!」

「理樹! この棚はどこに運ぶんだ?」

「それは、隅に置いておいて」

忙しく次々と運ばれてくる椅子や机や棚、カーテンや壁紙といった物を、次々と理樹の指揮の元、設置していく。

「お前ら追加だ。理樹、設計図通り頼むぜ」

三人が忙しい理由はこうして次々と材料を運んでくる恭介にあった。

「ちょっと恭介。少しはペースを落とそうよ」

理樹が思わずといった感じで弱音を吐く。

「駄目だ。さあ、まだまだ来るからな」

一言で切り捨てて材料集めに走る恭介。

理由は先程入った情報にあった。

それを見送りながら、コマネズミのように忙しく働く理樹は先程の出来事を思い出していた。

1時間前

「何！？ FクラスとAクラスも喫茶店をやるだ！？」

先程、偶然廊下で出会ったババア、もとい学園長に教えられたのだ。

「ああ、あたしの所に企画書が来たよ。流石はAクラスだけあって、なかなかのものだったけど、あんたらはあれで大丈夫なのかい？」

学園長が恭介に尋ねる。

「大丈夫だ、問題ない」

そう答えた恭介だったが側で見ていた理樹は恭介の顔が引き攣っているのに気付いていた。

「負けられん！」

教室に戻った恭介の第一声がそれだった。

「どうしたんだ恭介？」

事情を知らない謙吾が尋ねる。

理樹は事情を説明した。

しかし、その間に恭介は恐ろしいことをしていたのである。

事情を謙吾と真人に説明し終えた理樹が見たのは

「この店で、1番腕の良いインテリアデザイナーを頼む」

プロに内装を依頼する恭介の姿だった。

そして前の場面に戻る。

「理樹、これでラストだ！」

そう言って恭介が持ってきたのは……

シャンデリア！？

「これを飾り付ければとりあえず完成だ」

満足そうに言う恭介。

真人と謙吾の二人かがりで取り付けした後、周りを見渡すと……どこのお城だと言いたいくらい、完成度の高い喫茶店というより晩餐会を開く広間のような姿が目飛び込んできた。

「ふっ、これなら負けはしないな」

満足そうな声を漏らした恭介だったが、ポケットからはみ出た領収書を理樹は見逃さなかった。

「恭介、これは……？」

そう言って領収書を取った理樹だったが見た瞬間眩暈がした。

内装、依頼料、その他諸々。 853200円 を請求します。

インテリアルコーディネート株式会社 インテリ

ア文月

八十五万三千二百円

信じられない金額だった

ちなみにSクラスにはなんと二十五万の予算があっただが、それを余裕でオーバーしている。

「何をしてるのさー！？」

理樹の悲鳴が学園中に響いた。

こうして、理樹達に借金を抱えた。まさに売れなければ破滅というミッションに対する重責がのしかかった。

バカテスト第十問（前書き）

バカテストです

バカテスト第十問

江戸時代、将軍が江戸城に持っていた。女性ばかり集めたトルコで言うハーレムの事を何と言うか答えなさい。

直枝理樹の答え

「大奥」

教師のコメント

正解です。最近映画も公開されていますね。

棗鈴の答え

「おーおく」

教師のコメント

正解ですが、出来れば漢字で答えて欲しかったです。

来ヶ谷唯湖の答え

「少女しかない空間か……ジュルリッ（以下略）。ふふ、大奥」

教師のコメント

欲望が綺麗に現れていますね。余計なことは書かずに答えのみ書いて下さい。

文月祭始まる！(前書き)

短いなあ……

文月祭始まる！

あれから来ヶ谷が大量の衣装を発注したり、美魚にBL紛いのCM？らしきものを撮らされたりと色々とおハプニングもあったが、本番当日を迎えた。

そして早速大繁盛である

「1番テーブルに、紅茶とタマゴサンド」

「4番テーブルにケーキセットを三つ」

「小毬さん、後八番テーブルに、パフェを二つとチーズケーキを一つお願い」

「リキ、紅茶です」

「ありがとうクド、鈴、1番テーブルに運んで」

「わかった」

Sクラスの、もといリトルバスターズが開いている喫茶店、バスターズカフェSSSの出足は非常に好調だった。

忙しく働きながら、理樹はここ二日間にした苦労を思い出していた。

二日前

恭介への説教を諦めた理樹は善後策を練ることにした。

「何を考えてるんだ、バカきょーすけ！」

事情を説明すると開口1番、鈴から恭介へ非難の声が向けられる。

「どうすんだよ、この借金……」

真人でさえ、非難の声を口にした。

謙吾は無言で頭を抱え、クドや小毬も不安そうな表情をしている。

すると、ドアが相手来ヶ谷が入ってきた。

「遅れてすまないな、それにしても緊急召集とは一体どうしたのかね」

そう言う来ヶ谷の手には一枚の領収書が……

「……………」

理樹の頬に汗が流れた。

「く、来ヶ谷さん？それは一体？」

「ん？ ああ、これか」

そう言って領収書を差し出す来ヶ谷

そこに書かれていたのは……

メイド服 15400円 × 8

その他 12800円

合計 136000円

合計金額は十三万円！？

それを見た瞬間、理樹は気が遠くなったが、何とか持ちこたえた。

「来ヶ谷さん、これキャンセルできる？」

とりあえず何とかできないか尋ねる理樹、しかし……

「悪いが少年、キャンセルはできない、明日には届く予定だしな」

ひそやかな希望は打ち砕かれた。

膝をつく理樹に来ヶ谷が尋ねる。

「一体どうしたのだ少年？」

「事情説明中」

「と、いう訳で今すでに借金が九十万近いんだよ、これから食材を仕入れたりするから実際はもっとかかるだろうし、百万円近くになると思う」

理樹の説明を聞いて、ますます事態の深刻さを認識したのだろう、周りのメンバーは皆暗い顔をしていた。

しかし……

「ふむ、確かにマズイがそれくらいなら何とかなるだろう」

話を聞いても来ヶ谷は平然としていた。

「来ヶ谷さん、何か考えでもあるの？」

藁にも縋る思いで理樹が尋ねる。

「ふっ、私が衣装をプロデュースしたのだ、客など砂糖に群がる蟻のように集まるだろうさ。恭介氏、この人数が訪れて一回これだけ使うとしたらどうなる」

自信満々に答える来ヶ谷

恭介は言われたまま、計算を始めた。

「その人数が訪れるとして……これだけ使えば……余裕で黒字だ、逆にお釣りが返ってくるぞ」

そう言って恭介が示した電卓に現れた数字は……4230000。

四百三十万円

「実際は材料費などが引かれるから半額程度になるだろうが……これなら行けるだろう」

来ヶ谷の説明に希望が湧いてきた理樹。
周りの皆の表情も明るくなってきた。

「いける、いけるよこれなら！」

喜ぶ理樹だったが、タダでピンチを救ってくれる程、神は優しくない。

「だが、これには宣伝が必要となる、やはり他に負けないインパクトのある宣伝をしないと、FクラスやAクラスに客を奪われるぞ」
そう言った来ヶ谷の言葉から嫌な気配を感じとる理樹。

慌てて逃げようとしたが、いつの間にか来ヶ谷に捕縛されていた。

「そして、その為に少年には体を張って貰うぞ……」

そう言う来ヶ谷の視線の先には怪しい笑みを浮かべた美魚の姿があった

「君は…まさか謙吾？」

「お前は……理樹か？」

目の前には僕の姿を信じられないといった表情で見つめる謙吾の姿が……

そして……これ以上は思い出したくない。

↓以下略

「バスターズカフェSSSか、そこにいるんだな……理樹」

そう呟く謙吾をラストにCMは終了した。

ラストにBGMが流れる

目の前に流れた映像をラストに来ヶ谷さんによる宣伝が流れる。

それを聞きながら僕は西園さんに詰め寄っていた

「何なのこのCM！？ 喫茶店とまったく関係がない気がするんだけど！」

このCMの脚本、監督を行ったのは西園さんだ。何故か撮影をAクラスの木下さんや他数人の女子が手伝ってくれた。

「あんなんでCMになってるのかよ……」

同じく、出演させられた真人と謙吾も納得していないように、訝しげな視線を西園さんに向ける。

「それより来ヶ谷さん、映像の方、大丈夫ですか？」

「バッチリだ。最高画質で録画してある」

「一体何に使うの!？」

けれど、僕の問い掛けに対して答えはなかった。

「直枝さん、次は恭介さんと……」

「しないよ!？」

何だか、これでいいのか不安に思った理樹だった

特別短編く助っ人はスパイ（前書き）

短いですが投稿です。そしてタイトルで分かると思いますが、あの人が登場です。あーはっはっはっはっ！

特別短編く助っ人はスパイ

順調だった。

喫茶店バスターズカフェSSSには客が押し寄せ、次々とお金を落として行く。

小毬プロデュースのお菓子は飛ぶように売れ、クドの入れる紅茶も大好評

借金は確実に減っていつている状況だった。

しかし……

「何だかなあ……」

殺人的な忙しさの中、理樹はやり切れない思いを抱えていた。

原因はさっきから聞こえてくる声にあった。

『私は……迷うけど、直枝×井ノ原で』

『えー、それはありえないわよ。私は棗×直枝をお願い』

『そうね……私は宮沢×直枝で』

何故か美魚と来ヶ谷に押し切られて発売されている、CM映像プラ

スだ。

正直どこがいいのか分からないが、かなりの女子が買って行くので、売り上げにかなり貢献している。

しかし、売れば売れるほど、大事な何かを失っていくような気がする理樹であった。

そのため素直に喜べないのだ。

「来ヶ谷さん、あれまだ売ってるの？」

「ああ、既に、二百枚近く売れているぞ、この調子なら借金などすぐに返せそうだな」

そんなに売れてるんだ：

一枚千円もするのに、みんなよく買うなあ……

と、忙しい間は思っていた理樹だったが、終わってから後悔することになる。

しかし、そんなこんなで大好評のバスターズカフェであった。

やはり宣伝が効いているのだろう。

ちなみにリトルバスターズが行った宣伝活動を紹介しておこう。

衣装を来ての校内の練り歩き。（大量の男子が釣れた）

十万円もかけてカラーコピーした立派なチラシを二千枚近くばらま

いた。

CM映像の放送（ネットで公開、アクセス数再生回数百万突破！）
といったものだ。

現在は謙吾が校内を周りながら宣伝を行い、真人は校門で巨大な看板を掲げている。（重さ百キロ大きさはちょっとした小屋くらい）
風船にビラを付けて配ったりしている。

これらの宣伝活動が上手く行き、バスターズカフェSSSはいまや、満員御礼だった。

チラシ代金 100000円

風船千個 50000円

看板 40000円

計 190000円

借金総額 1210000円

現在の売り上げ 420000円

売り上げはかなり好調だった。しかし……好調ゆえの問題も起きた。

昼、忙しさがピークを迎える時間帯だが、バスターズカフェには仕

込み中の為立入禁止。

と書かれた看板が下げられていた。

原因は……目の前にあった。

「ぜえぜえ……」

「やはり、流石に疲れましたよ」

「つ、疲れた」

「あいむ、べりーべりーたいあーど　なのです」

椅子に座りこんだ、女性陣である。

朝から葉留佳、鈴、小毬、クド、理樹の五人で店を回していたのだ。
それは疲れもするだろう。

「猫の手が欲しかった」

「鈴、それを言うなら猫の手も借りたいだよ」

鈴の呟きに理樹がツツコムがあまりキレがない。

「とにかく、真人か謙吾を手伝いに戻さないといけないね……」

へたりこむ、女性陣を眺めながら理樹は呟いた。

「ああ、そうだな。来ヶ谷、　レジは西園に任せてウェイトレスを

してくれないか？」

それを聞いた恭介が、少しでも負担を減らそうと来ヶ谷に尋ねる。

「ふむ、それは構わないが、恭介氏にもウェイターとして出て貰ったほうがいいだろう」

「ああ、それは確かに」

それを聞いた理樹は思わず納得していた。

黙っていれば美形の恭介の事だ。売り上げアップに繋がるだろう。

「ふむ、他には……」

来ヶ谷が考え込む、どうやらウェイトレスの負担をもう少し軽減できないか、考えているようだ。

すると……

「お困りのようね」

ドアが開いて金髪の女子生徒が入って来た。

「なんなら一流のスパ―、ゲフン、ゲフン。あたしが手伝ってあげるわよ」

女子生徒はそう言って胸を張った。

バカテスト第十一問（前書き）

バカテストです、つまらないものですがどうぞ紗耶の朱鷺は後で何とか修正します。

バカテスト第十一問

社会

世界の戦争を変えた人類が近代に発明した武器はなんでしょう。

直枝理樹の答え

「銃」

教師のコメント

正解です。他には大砲や飛行機（戦闘機）なども正解です。

宮沢謙吾の答え

「刀、（日本刀）」

教師のコメント

あながち間違いではないのですが、原型は昔からあるので、残念ながら正解ではありません。

朱鷺紗耶の答え

「ピストル、（スパイには必須よ）」

教師のコメント

正解です。ところでスパイとはどういうことですか？

井ノ原真人の答え

「そりゃ、もちろん筋に r y」

教師のコメント

そうですか。

特別短編く紗耶合流！そして喫茶店は動き出す。（前書き）

更新は二日置きになりますどうぞ

特別短編／紗耶合流！そして喫茶店は動き出す。

「君は？」

いきなり現れた女子生徒から手伝うと言われてア然とした理樹達だったが、流石というか、なんとというか、真っ先に立ち直って質問したのは理樹だった。

「あら、そう言えばまだ言っていなかったわね。なら、自己紹介させて貰うわ、あたしの名前は朱鷺戸紗耶、Sクラスの転入生よ理樹君」
何で僕の名前を知ってるんだろう……

疑問に思った理樹だったが気を取り直して質問した。

「つまり……クラスメイトっていうこと？」

「そういうこと♪」

何故か機嫌の良い紗耶

「そういうことならよろしく頼むぜ」

恭介が渡りに船とばかりに頼み込む。

「うむ、君ならおねーさん文句はないぞ。君にはメイド服をプレゼントしよう」

そう言って紗耶にメイド服を渡す来ヶ谷。

そして……

「僕？」

理樹にも差し出していた

「……着ないのか？」

「着ないよ！」

かくして、新しいクラスメイトを加えて喫茶店は再スタートした。

これで文月祭初日の部を終了します。忘れ物がないようにお帰り下さい。

放送が流れて文化祭初日が終了する。

そしてバスターズカフェSSSには屍が転がっていた。

「つ、疲れた……」

「わふゝ、もう駄目なのです」

「やははゝ、流石に疲れましたね」

「ああ、そうだな」

「おねーさんくたくただよ」

「本当に疲れたよ」

「……凄く疲れたわ。日本の学生ってこんなに忙しいの」

みんなしばらく立ち上がれそうにないくらい疲れている。

「とりあえず、寮に戻って飯にしよう」

「そうだな。あー、腹減った」

恭介の言葉に真人が賛成して皆で寮に戻って夕食にすることにした。

ちなみに紗耶はまだ寮には入っていない、ということで帰っていった。

「本来ならここで朱鷺戸を紹介するはずだったんだが……」

帰ってしまったのではそれもままならない。

「で？ 恭介、その女はどうすんだ？」

真人が尋ねる。

「当然、我がSクラスに入るのならリトルバスターズに入って貰う」

恭介が断言する。

「でもよ、いいのか？」

「ああ、幸い彼女のキャラは天然で空回り体質だ、誰とも被っていない」

確かに……空回りしてたなあ。

紗耶の所業を思い出す。

喫茶店で彼女は銃で林檎や蜜柑といった果物を撃ったりして客を沸かせていたが、代わりに微塵もウエイトレスとして働いていなかった。

……というかあの銃、本物じゃないよね？

疑問に思った理樹だったがこの場に本人がいないのでは確認がとれない。

諦めた理樹は、再び恭介達の会話に耳を傾けた。

「まあ、恭介がそう言うならいいけどよ」

どうやら紗耶のメンバー入りに真人が納得したようだ。

「けど喫茶店はどうすんだよ？」

しかし最大の懸案事項が残っていた。

「ああ、それ何だが……」

恭介が何故か僕をちらりと見た。

「仮に今日の布陣に加えて、理樹がメイド服を来て給仕をしても、忙しさというか疲労度は今日よりきつくなると思う」

「着ないからね!？」

とりあえず、皆聞きたいことはあっただろうけど、僕は真っ先にツコンだ。

「まあ、落ち着け少年、髪 of 短さが気になるならウィッグを用意してやるからあまり気に病むな」

「そこは問題じゃないからね!？」

まず、僕が男だという事実を来ヶ谷さん達には認識させないといけないようだ。

「けど、恭介さん? 忙しさが変わらないってどういうことですか？」

葉留佳が皆を代表して尋ねる。

「ああ、確かに朱鷺戸や理樹、俺が入れば人数は増えるが営業時間がな……」

そう言って恭介は苦い顔をした。

「現在の売り上げは五十万近いが、借金が後六十万近く残っている。やはり昼の稼ぎ時に店を閉めたのがまずかったな。だから借金を返

す為には昼も店を回さないといけない、つまり今日よりさらに労働時間は長いという訳だ」

恭介の言葉を聞いて女性陣が顔をしかめる。

確かに今日、休憩を入れてもくたくたになったのに、今日以上働けと言われれば当然だろう。

「ふむ、つまり何とかしないとマズイと」

「ああ、だがどこも忙しいらしくて人を借りることも出来なかったし、外部の人間を雇うことは禁止されている」

恭介の言葉を聞くとまさに八方塞がりといった感じだ。

皆も表情を暗くしている

と、

「何、それなら皆が今日以上に頑張ればいい話さ」

沈黙を破ったのは来ヶ谷だった。

「くあーっ、気楽に言ってくれるぜっ！　ここまでだって精一杯やってきたんだぜ、そうだろ理樹？」

真人が真っ先に反応して尋ねてくる。

「それはそうだね」

僕も同意した。

「何、確かにそうだろうが全員が実力以上の力を引き出せばいい話だ。それにはご褒美が必要だがな」

「ご褒美？」

「うむ、そうだ少年。借金の為に働くから駄目なんだよ。ご褒美をもらう為ならこれまで以上に頑張れる気がするとは思わないかい？」

「それはそうだけど…」

「うむ、なら決定だ。明日頑張って働いた皆には一日理樹少年を自由にする権利が与えられる」

「ええっ!？」

「ほう……」

「そりゃいいな」

「うむ、それはなかなかやる気が出るな」

戸惑う理樹を尻目に、恭介、真人、謙吾が声を漏らす。

他の面々も期待に満ちた目で理樹を見つめる。

「どうだね、少年。効果的だと思うが？」

「別にいいけど、そんなの貰ったってみんな嬉しくなんか……」

「そうでもないようだぞ、少年見たまえ」

「そんな馬鹿な……えっ!？」

来ヶ谷に言われるまま皆を見ると、小毬やクド、葉留佳に美魚、そして鈴までもがやる気を目に漲らせていた。

「何でも！本当に何でもリキがしてくれるんですね！」

「ああ、デートだろうとなんだろうとしたい放題だ」

来ヶ谷の言葉を聞いて目を輝かす女子メンバー

これだけ期待に満ちた表情をされては理樹も流石にいまさら嫌だとは言えない。

「よし！なら明日頑張れば理樹を一日自由に出来る権利が与えられる！ではミッションスターだ！」

そう言って恭介が閉めた

一方天井裏では……

「成る程……当然あたしにも権利があるわよね」

もう一人の女子もやる気を漲らせていた。

特別短編く文化祭最終日、ミッション借金を完済せよ完結編（前書き）

ちよつと展開に無理がありますが、一応短編なのでこの辺りで終わ
らせます。

どうぞ！

特別短編／文化祭最終日、ミッション借金を完済せよ完結編

「いらっしゃいませ」

「ありがとうございました」

「三番テーブルに紅茶を二つとコーヒーを二つ」

「はい」

「七番テーブルにモンペチを三個頼む！」

「……………」

「おまえら、無視するな！」

……鈴、それは絶対お客さんが頼んだものじゃないでしょう。

とりあえず午前中は順調だった。昨日の宣伝が効いているらしく、客足は早くから凄く良い。

まだそんなに働いている訳ではないし、何より昨日も既に経験しているからか、昨日のように注文を間違えたり、皿を落として割るようなことがないのも大きい。

「恭介！ 売り上げはどう？」

奥で売り上げの計算をしていた恭介に尋ねる。

「ああ、順調だ。CM映像の売り上げはますます伸びてるし、客足も良いからな。この調子なら何とかかなりそうだ」

そう言って恭介はにかつ、と笑った。

そうか……なら、後は僕たちが頑張るだけだ。

「締まっていこー！」

「「「おおーっ！」」」

僕が声を挙げると皆が答えてくれた。

〃〃お昼

1番心配な時間だ。昨日はここでギブアップすることになったけど……

「紅茶とチーズケーキだ」

「はいはい、イチゴタルトとコーヒーですね」

「お会計は1500円になります」

「理樹君、ティラミスできたよ」

「ありがとう小毬さん」

どうやら問題なさそうだ

やっぱり昨日の経験がかなり生きているのだろう

「狙った獲物は逃がさない！」

紗耶が狙った林檎が粉々に碎ける。

周りから「おおー！」という歓声上がる。

「次は何を狙えばいいのかしら？」

そう言ってスカートの下ホルスターに銃をしまう紗耶。

……何だかどこかの女スパイみたいだった。

おそらく歓声が上がっている理由は紗耶の腕前四割、サービスシー
ン六割といった所だろう。

ところで昨日から気になっていた所を尋ねる。

「朱鷺戸さん。大丈夫？いくらモデルガンでも当たったりしたら危
なくない？」

「平気よ、あたしが外す訳ないじゃない。それより約束忘れないで
ね」

そういつてウインクする紗耶。

「約束って……何かしたっけ？」

紗耶が昨日のご褒美について知っているとは思えず、首を傾げる理樹だった。

〽1時過ぎ

忙しさはピークを迎えようとしていた。

もはや理樹だけでなく、恭介や謙吾も手伝っている。その為か、女性客も増えてきた。

しかしそれでも客は途絶えない。さばいて案内しさばいて案内するを繰り返す。

女子メンバーも必死に働いている。

もはや皆、理樹を一日自由にできる権利の為に働いているような物で、気力だけで働いているようなものだ。

するとやっと少し、少しだが客が減った。

どうやらFクラスコンビが召喚大会で優勝したため、そちらに少し客が流れたようだ。

……それでも忙しかったが。

「よし、こうなったら売り上げ一位を目指そう」

僕はみんなを見て宣言した。異論は出ず、みんな協力してくれた。

いつのまにか借金を返す為に必死に働いていた気持ちは消え、純粹に、この喫茶店を、文化祭を楽しむことが出来た。

みんなの顔にも笑顔が溢れている。そんなみんなを眺めながら、僕は喫茶店の成功を確信していた

「これにて、『清涼祭』を終了します。生徒の皆さんは速やかに片付けを開始して下さい。ご来校された皆様は忘れ物がないようお帰り下さい」

6時、終了のアナウンスが流れる中、僕らは厨房で恭介の手によって弾かれる電卓を眺めていた。

「これを足して……出たぞ」

恭介が計算の完了を告げる。

「では、発表する」

皆が唾を飲む。

「我がバスターズカフェSSSの総売り上げは1863000円だ」
百八十万円。

あまりの金額に皆の顔が一瞬フリーズする。

そしてやがて事態を理解したのかじわじわと笑顔が広がっていく。

僕が恭介を見ると恭介は力強く頷いてくれた。

「ミッションコンプリート！借金完済、それどころか大幅な黒字だ。
当然、FクラスとAクラスにも勝ったぞ！」

恭介が力強く宣言すると厨房に僕らの歓声が響いた。

「綺麗だな」

「綺麗だね」

「そうだね、凄く綺麗だ」

あれから、後片付けを終えた理樹達リトルバスターズは、グランドで花火を見ていた。

教頭室が半壊するという事件があったけど、皆のんびりと花火を楽しんでいた。

「やっぱり花火は欠かせねえよな」

恭介が呟くと皆無言で肯定した。

何だか喫茶店をやり遂げた後に見る花火は凄く綺麗だった。

グランドの中央ではキャンプファイヤーが焚かれている。

その周りでは花火をバックに生徒が踊っていた。

「ふむ、では少年。私と少し踊らないかい？」

それを見た来ヶ谷が理樹を誘う。

「あ、姐御。ズルイですよー、私も理樹君と踊りたいですよー」

「そのとおりです、リキ！私と踊りましょう」

クド？

「そうだな、踊ろう理樹」

鈴まで！？

驚きと戸惑いを隠せずにいると恭介が立ち上がって宣言した。

「よし！　なら我がリトルバスターズも後夜祭に参加するか！」

こうして文化祭最終日は賑やかに終わった。

Fin

特別短編く文化祭最終日、ミッション借金を完済せよ完結編（後書き）

さて、何人の人が後書きを見ているかわかりませんが、アンケートです。

紗耶の召喚獣について何かアイディアがあればお願いします。

春と写真と脅迫状（前書き）

短いですが投稿です。

これから更新は不定期になります。

作者がセンター試験の為……あしからず

春と写真と脅迫状

「……………西園さん。それは？」

「先日の販売した映像です。追加注文されていた方や予約分ですが」

「それが何でこんなにあるのさ!？」

理樹が叫ぶのも無理はない何せ、目の前には段ボールに詰められたDVDが山積みになっているのだから。

「はい、大体皆さん、全種類コンプリートされようとされますし。注文された方、予約された方を含めると約二万枚近いかと」

それを聞いて膝をつく理樹。あまりにショックがデカすぎたのだ。

しかしそこに追い撃ちがかかる。

「あれ？ 来ヶ谷さん。写真を落としたよ?」

目の前を通った来ヶ谷が落とした写真を拾う理樹、そこに写っていたのは……

CM撮影シーン（謙吾と見つめあっている）

「……………」

メイド服姿の自分（withウィッグ）

「……………」

メイド服姿（半裸 着替え中バージョン）

「うわあああああああー！？」

理樹の悲鳴が教室に響いた。

同時刻

「最悪じゃあーっ！」

明久も叫んでいた。

ホームルーム、といってもほとんど恭介が仕切る為先生はほとんどいないことの方が多い。

現に今も、強化合宿について恭介が説明していた

「全員いいか？ という訳で、我々Sクラスはバスで目的地に向かうことになる。荷物はしおりに書いてある通りだ。まあ、勉強道具とトランプ、後は遊び心があれば問題ないだろう。」

恭介、余計な物が混ざってる。

どうやら大人しく勉強する気はないらしい。

「しかし、強化合宿か……面倒だな」

来ヶ谷さんが本当にだるそうに呟く。

「ですけど姐御。見て下さい、お風呂は一緒ですよ？」

「何っ!？」

一瞬で覚醒する来ヶ谷。

「ほら、大浴場って書いてあるじゃないですか」

葉留佳の言う通り、栞には確かにそう書かれていた。

「ぐふふっ、なら、可憐な少女達の姿を存分に楽しませて貰おう。
いい目の保養になりそうだ」

「一応勉強に行くんだけど……」

理樹がツツコムが聞こえなかったようだ。

「それで？ 他に必要な物や注意事項は？」

「特にない、お菓子等の持ち込みも多少はOKだそうだ、ただしゲームは禁止だぞ」

「へー、そんなに厳しくないんだね」

「まあ、四日も勉強漬けに堪えられないだろうからな」

「まあ、とりあえず皆準備は怠らないように」

そう恭介が締めて、ホームルームは終了した。

「うう……ムツツリー二に頼んだけど、犯人見つかるかなあ……」

「うーん、結局来ヶ谷さん、あの写真をどこで手に入れたか教えてくれなかったなあ」

明久と理樹、同じ悩みを抱えた者が出会った。

「「あ！」」

「「もしかして……」」

「「君も!？」」

こうした二人の出会いが強化合宿で波乱を呼ぶこととなるが、この時の二人はそのことに気付かず、ただお互いの境遇に深く同情していた。

この後、場所を屋上に移してお互いの悩みを打ち明けた理樹と明久だったが、女装させられた、しかもメイド服、写真を撮られたという同じ境遇にいる者同士、非常に意気投合し、最後には互いに「理樹君」「明久君」

と呼び合う仲になっていた。

バカテスト日誌（前書き）

バカテストです、

バカテスト日誌

強化合宿初日の日誌を書きなさい。

直枝理樹の日誌

『バスから降りると、ふと眩暈のような感覚が訪れました。いつもと違う環境で、何か良いことが起こるような気がしました』

教師のコメント

環境が変わることで良い刺激が得られたようですね。直枝君には高校二年生という今この時にしか作ることのできない思い出が沢山できていることを願っています。

棗恭介の日誌

『バスから降りると、不意に眩暈に襲われると同時に、何か面白いことがおきそうな気がした。あの感覚は何だったのだろうか』

教師のコメント

寝不足です。

君は遠足の前の日などは眠れないタイプのようですね。

井ノ原真人の日誌

『バスから降りると、何故か身体中の筋肉が痙攣し、汗が吹き出してきた。一体何が起きたかわからなかった』

教師のコメント

狭いバスに座っていたため足がつったようですね、とりあえず服を着替えて下さい。

宮沢謙吾の日誌

『バスから降りて大きく息を吸い込むと、何だか慣れ親しんだような不思議な臭いがした。これがこの街の持つ匂いなんだな、と感慨深く思った』

教師のコメント

となりに汗だくになった井ノ原君がいなければ、もっと違った匂いがしたでしょうね。

合宿と疑惑と覗き騒ぎ（前書き）

大急ぎで書きました。どうぞ

合宿と疑惑と覗き騒ぎ

「……………直枝君」

「うわっ！びっくりした、って土屋君？」

突然声をかけられた理樹が驚いて振り向くと、そこには先日試験召喚戦争で共に戦った、Fクラスのムツツリー二こと土屋康太の姿があった。

「……………明久から伝言、犯人についての情報を手に入れたから6時に部屋に来て欲しいと」

「明久君が？ わかったけど何号室？」

とりあえず周りにばれないように小声で話しかける。ちなみにムツツリー二とは昨日既に顔を合わせて理樹も調査をお願いしている。

「……………三階の302号室、多分明久もその頃には起きている」

明久君は寝てるのかな？

そう疑問に思った理樹だったが、明久が今現在生死の境を漂っていることを知らない。

「そう、ありがとう。それじゃあ6時にそっちに行くよ」

「……………（コクリ）」

ムツツリー二は無言で頷くと立ち去ら……ずに。

「……………（パシャ、パシャ）」

無言でリトルバスターズ女子メンバーを撮影し始めた。

「……………えーと、」

何と声をかけるべきか迷った理樹だが、結局恭介達に釣られてそのまま合宿所に入った。

「君、無断で少女達を撮影するのはおねーさんが許さないよ」

「……………（すっ）」

「な、何これは！……………許可しよう」

ちなみに後ろで怪しい会話がなされていたが、理樹は聞こえない振りをした。

……………ていうか来ヶ谷さん買収に弱すぎるよ……………

「おおっ！ 思ったより広いじゃないか！」

「そうだね、八人くらいで眠れそうだ」

「まあ、どこかの馬鹿が居て狭いからちよいどいいだろう」

「それは何か、貴様の筋肉は無断にでかくて邪魔くさいから、部屋が広くてホッとしてるんだから大人しく部屋の隅小さくなって筋トレでもしてろってことか？」

「真人、いいから早く入ろうよ」

思い思い部屋の感想を口にしながら部屋に荷物を置く。

「しかし、思ったより早く着いたな……夕飯まで後3時間はあるぜ」

「だね、何をしようか……」

ちなみに現在時刻は4時、夕食は7時だからまだ時間がある。

「仕方ない、何かやりたいことがあるやつはいるか？」

恭介が尋ねてくる。

「うーん、特にないなあ……」

「右に同じだ」

「何もねーよ」

それを聞いてふるふると震える恭介。

「おまえら！もっとテンション上げていけよ、合宿だぞ！」

そして我慢出来なかったのか怒鳴った。

「そう言ってもね……」

「実際やることねーしょ」

そう言って理樹達が途方にくれていると。

コンコン。

ノックの音と共に、鈴と小毬が入ってきた。

「みんな、私達の部屋で人生ゲームをするんだけど、理樹君達も一緒にしない？」

どうやらゲームのお誘いのようだ。

「どうする恭介？」

一応、理樹が恭介に尋ねる。

「当然やるさ、ドベは罰ゲームありでやるぞ！」

そう言って理樹達は人生ゲームを楽しむ運びとなった。

〽6時

「ごめん、恭介。少し用事があるから行ってくるね」

そう言って理樹は部屋から出て明久達の元に向かった。

「で？ムツツリー二。何かわかったのか？」

5分後、理樹を交えて、明久、雄二、ムツツリー二、秀吉が話していた。

「……昨日校内調べた所、犯人の物と思われる機器を見つけた、手口が似ていることから犯人は三人とも同じ人物だと考えられる」

「やっぱりそうか」

「流石だね、ムツツリー二」

雄二と明久が相槌をうつ、校内に盗撮犯がいるなんて……

「で？土屋君、犯人はわかったの？」

「……………（フルフル）」

土屋君が首を振る。

「あつ、まだ分からないんだ」

明久が声をあげる。

「……………すまない」

「あ、いや、土屋君を責めてるわけじゃ……」

この短時間でここまでわかるなんて凄いなと思う。

「……………犯人は女子生徒で、お尻に火傷の痕があるということしか判らなかった」

「君は一体何を調べたんだ」

明久君がツツコンでるけど僕も同感だった。

「……………校内に網を張った」

そう言って土屋君が再生したプレイヤーに録られていたのは。

「理樹少年の女装写真の新作は出たかね」

『毎度、ああ、入ってるよ』

「ふむ、ついでに西園君に頼まれた分も頼む」

『はいよ、けどそれはこの場にはないから現物は明日……と言いたいけど強化合宿があるから来週で』

「わかった、ではその時に引き取りにこよう、実は小毬君達にも頼まれていてな」

録音を聞いていた理樹の顔はみるみる青くなっていった。

雄二も暗い表情をしている。

「と、とにかく。来週までに何とかしないといけないわけだね？」

明久が場の空気を変えるべく叫ぶ。

「そ、そうじゃな、とりあえず、犯人を見つければ解決じゃからな」

秀吉が元気づけるように言うと、何とか立ち直り犯人を探す方法を考える。すると……

『全員、その場に伏せなさい！』

扉が開け放たれて女子が飛び込んできた。

「木下と受け……じゃなくて直枝君はこっちへ、そっちの馬鹿三人は抵抗をやめなさい！」

木下さんが窓から脱出しようとした明久君達の機先を制する。何だか一瞬変な呼ばれかたをした気がしたけど気のせいだろう。

「仰々しくぞろぞろと……一体何の真似だ？」

坂本君が向き直っていたけど次の瞬間、頭を掴まれていた。

明久君達も縄で縛られている。

この後……言葉では言い尽くせない光景が展開され、僕は目を逸らした。

これからは強く生きると誓いながら。

そして全てが終わると……

「上等じゃねえか……」

坂本君がとんでもない発言をした。

「あっちがそう来るなら本当に覗いてやろうじゃねえか!!」

こうして、覗き騒ぎが始まった。

召喚獣メモ（前書き）

執筆が間に合わなかったので、設定資料をどうぞ、ただし初期設定のためおかしい点があるかもしれません。

召喚獣メモ

美魚の召喚獣

武器 サイバー兵器

ライトセイバー

ビームライフル

サイバーヨーヨー

電磁シールド

メガランチャー

腕輪は美鳥を召喚、自動で動く。

そのため細かい動きが可能で明久の召喚獣以上に強い。

鈴の召喚獣

通常時はは制服であるがたまに耳が生えて猫化することがある。その時はよろいを着ている。（フェルパーやケットシーといった猫人間のようなもの）

主な攻撃は蹴りであるが剣を持っていることも、猫を二、三匹従え

ているためそちらの攻撃が大きい。

腕輪の能力は禁断のマタタビを使用した猫による一斉攻撃。ドルジが召喚されることがある。

小毬の召喚獣

通常時は剣を装備している。ゴスロリを着ているか魔法使いが着ているようなローブ。

腕輪は幸せスパイラルの発動。

相手の召喚獣にお菓子を食べさせると相手は戦意を失い、相手の点数が小毬に加算される。お菓子一つにつき50点程消費する。

クドの召喚獣

ヴェルカ、もしくは ストレルカのどちらかを召喚して攻撃。

装備は制服

腕輪の能力はヴェルカ、ストレルカの巨大化。

また自身も犬化することが可能。

葉留佳の召喚獣

武器は制服中に仕込んでいる玩具。

装備は制服。

主な武器

パチンコ

ビー玉

輪ゴム等。

腕輪による能力は悪戯の王(Trick or Treat)

落とし穴といったトラップを仕掛けることが可能である。

またこれは人間相手にも有効化される。

おおざっぱに言えば明久の召喚獣のように触ることができる。

自動召喚フィールド

リトルバスターズのメンバーのみの力。

自前の召喚フィールドが展開可能。

また恭介に限ってある能力が使える。

恭介の召喚獣

装備は騎士鎧に剣

腕輪の力は……不明

またバトルランキングモードを使い相手の装備をランダムに変更可能。

覗きとバトルと斎藤マスク（前書き）

まったく時間がありません、これから二日に一回になりますのご容赦を、代わりにバカテストを更新しますので、

覗きとバトルと斎藤マスク

「えーと、坂本君？　少し落ち着いたら？」

雄二の発言を聞いた理樹が真っ先に声をかける。

「そうだよ！　雄二、霧島さんの裸が見たかったら、個人的にお願いしたらいいんじゃない？」

こんな警戒されているタイミングで覗きに行くなんて、頭が悪いにも程がある。

「バ、バカを言うな！　翔子の裸なんかに興味があるか！」

何やらおかしな方向に話しが進んでいた。

「ふむ。　もしや、例の尻に火傷のある犯人探しかの？」

木下君？が方向を修正する。

「そうだ。流石に覗きなんて真似はやりすぎだと思って遠慮していたが……向こうがあんな態度で来るなら遠慮は無用だ。思う存分覗いて犯人を見つけてやろうじゃないか」

坂本が極論を展開していた。確かに僕も犯人は捕まえたいけどそこまでは……でも、正直あれだけの尋問という名の拷問を受けている坂本君が言うのと正論に聞こえるから不思議だ。

「……………さっきのカメラとマイクは、脅迫犯の物と同じだった」

「え？　土屋君。それは本当なの？」

「……………間違いない」

「そうか。それは嬉しい事実だな」

「そうじゃな」

「……………（コクリ）」

「そうだね」

三人と頷き合う。

「つまり、どういうこと？」

明久君はよく分かっていなかった。

「流石明久、この程度の会話にもついてこれなかったか。つまり、こういうことだ」

ひどい言い方だったけど坂本君は明久君の為に紙に何かを書いていた。

《明久と直枝の写真を撮影した犯人》

←手口が同じ

《俺（雄二）の声を撮影した犯人》
使用機器が同じ←

《風呂場にカメラを設置した犯人》

←
同一犯によるもの

←
火傷のある女子を見つけたら全て解決!!

「俺と直枝、そしてお前を脅すもしくは写真を撮った犯人は同じで、さっきの覗き犯のカメラとマイクがその犯人と同じだった。そして覗き犯は火傷の痕があるという話しだからー」

「ああ、なるほど! そういうことか!」

どうやら明久君も理解できたらしい

「これでもう迷う余地はないな」

「そうだね! やってやろう!」

坂本君と明久君が異様にやる気を出していた。

明久君も坂本君のやる気には疑問を持ったみたいで……

「それにしても雄二は霧島さんのことになると思う気が凄いよね。どうしてそこまで頑張るのか不思議なくらいだよ」

それを尋ねると坂本君は異様に暗い声で

「……実はこの前、いつものように翔子にクスリをかがされて気を

失ったんだが」

「ごめん。その前置きから既にイロイロ厳しいと思う」

どうやら触れてはいけない話題だったみたいだ。

「あんな台詞を聞かされたら、間違いなく俺は、俺の未来は……！」

「そ、そうとなれば、すぐにでも向かわんと風呂の時間が終わってしまうぞい！」

「……………（コクコク）」

「え？ 秀吉とムツツリー二も協力してくれるの？」

明久君が驚いたように尋ねる。

「うむ。友人の危機なのじゃ。当然じゃろう」

「……………（コクリ）」

当然のように答える二人、まるでリトルバスターズの、恭介達のようだった。

「……入浴時間残り40分」

「なら、早く行かないとね」

「うん、そうだね」

場の勢いに流され、ついに理樹も賛成する。

「よし、ほら雄二！覗きに行くよ！」

「……………はっ！ わかった、しかし直枝はこれを着けてくれ」

そう言って坂本君が取り出したのは……

強盗が被るような覆面だった。

「え？ どうしてこれを？」

意図が分ならず混乱する、というかこんな物をつけて女子風呂に向かったらただの変態だ。

「直枝には失敗した時の伝令を勤めてもらいたいからだ」

「伝令？」

「そうだ、俺達四人が向かえば顔を隠しても向こう、特に鉄人には一撃でばれるだろう。しかし直枝なら面は割れないだろうからな、失敗した場合警戒されない奴が欲しいんだ」

「つまり……保険というわけかの？」

「そうだ、まさかSクラスの直枝が参加するはずがないという相手の油断をつくためだ」

「それならいいけど……他に顔を隠す物はないの？」

「あ、これがあるよ」

そう言って明久君が取り出したのは……

マスク・ザ斎藤の仮面だった。

何で明久君が持つてるんだろう。

疑惑に思ったけど……まあ、覆面よりマシだろう。

という訳で

「よし。時間がない、一気に突っ込むぞ」

僕達は廊下を走っていた。恭介のミッションに付き合っていたおかげか、ついていくことができている。

僕らは階段を降りて女子風呂への廊下を走り始める。

すると……

「君たち、とまりなさい！」

前方から鋭い声が響いてきた。見つかったみたいだ。

「更衣室にカメラが設置されていたと聞いて警戒してみたら……まさか本当に覗き犯が来るとは思いませんでした」

声の主を見ると化学の布施先生だった。

「雄二、どうする！？ 布施先生だよ！」

「構わん！ ぶちのめせ！」

「そこは構いなさい坂本君！ 私は一応教師ですよ！？」

「了解！ 一撃でケリをつける！」

「吉井君も了解じゃないでしょう！？」

目の前ではコントのような会話が交わされていた。

「この前の補習の怨みをくらえええ！」

明久君が布施先生に襲い掛かる。

「ひいひいっ！ さ、試験召喚っ！」

しかしそれは小さな身体に阻まれた。

「し、試験召喚獣！？」

「くっ……！ 教師用の召喚獣は物に触れるのか……！」

坂本君が苦しげに呟く

「さて、それでは大人しくして貰えますか？」

布施先生が召喚獣に構えを取らせる。

「こうなりゃ徹底抗戦だ！ 布施センを召喚獣ごと叩き潰すぞ！」

「その意気だよ雄二！ ここは任せたからね！」

坂本君を置いて吉井君が走りだそうとする。

「待てやコラ」

それを捕まえて坂本君が点数を尋ねる。

「あれは確か……あと一点で二桁だったと思う」

「先に行ってる生ゴミ」

明久君……それは酷いよ

「教師相手に一人は辛からう。ワシも手伝おう」

「なら僕も手伝うよ」

正直覗きより何倍も気が楽だ。

「すまないな、秀吉、斎藤。いくぞ、試験召喚」

「「試験召喚！」」

「じゃ、任せたよ！」

明久君と土屋君が走っていく。

……というか僕の偽名は斎藤で決定なんだ。

「こ、こら！土屋君に吉井君！待ちなさい！」

「布施先生申し訳ないのじゃが、二人を追わせるわけにはいかんのじゃ」

「そういうことだ。しばらく俺達と遊んで貰う」

そう言って召喚獣を構えさせる。遅れて点数が表示された。

Fクラス 坂本雄二&木下秀吉

化学 243点&86点

VS

化学教師 布施文博 683点

「え？」

有り得ない程の点数だった。それにしても何故か僕の点数が表示されない

故障かな？と思っているとやっと表示された。

二代目斎藤

化学 323点

VS

化学教師 布施文博

化学 683点

「何でさ!?!」

おもいっきり偽名が表示されていた。というか二代目って、こっちにも初代がいたの!?!

いろいろと疑問は尽きなかったが召喚獣まで変化していた。

「はりゃほれうまうー」

「「「しゃべった!?!」」」

召喚獣まで斎藤マスクをつけていた。もはや何でもありだった

「と、とにかく行くぞ!」

坂本君に合わせて召喚獣を布施先生に向ける。
すると……

「はりゃほれうまうー」

「うわっ! 何ですかこれは!?!」

勝手に戦っていた。その上強い。

坂本君も呆然と眺めている。

そして……

「はりゃほれうまうー」

二代目斎藤

V S

化学教師 布施文博

化学 323点

V S

化学 0点

布施先生を倒していた。

「うまうー」

そして表示が変わる

斎藤五段 布施文博

化学教師から

←

斎藤五段になっていた。

ちなみに本人は気絶している。

「よ、よし！とにかく先を急ぐぞ！」

坂本君の声ど我に返った僕らは明久君達の後を追った。

そして……

「明久！？」

「て、鉄人じゃと！？」

「くっ、みんな逃げて」

このあと理樹を覗く三人が捕まった。

どうやら斎藤マスクを被ると気配が薄くなるようだ。

余談だが……

「明久君、初代斎藤って誰？」

「さあ？ この間似たマスクを被った人に渡されたんだけど……」

それを聞いてある程度想像がついた理樹だった。

バカテストアンケート（前書き）

昨日更新できなかったのでバカテストです。

バカテストアンケート

強化合宿でマスク・ザ・斎藤と名乗る男が現れて女子風呂を覗こうとしたのですが、何か心当たりがあれば書いて下さい。

一般ピープルの答え

「「「知りません」」」

教師のコメント

まあ、知りませんよね。しかし何者なんでしょうか？

棗鈴の答え

「馬鹿アニキ」

教師のコメント

棗君が知っているとことでしょうか？後で棗君の答えを見ることにします

理樹の答え

「きょうすー……何も知りません」

教師のコメント

何やら葛藤があったようですが、知っているなら教えてくれるとありがたいです。

棗恭介の答え

「こいつは強さの証だいや、うまーう」

教師のコメント

よくわかりませんが、後で特別指導室に来て下さい。

更新ではないアンケートですごめんなさいついでにバカテストも書いてます。

アンケートとバカテストです。

更新ではないアンケートですごめんなさいついでにバカテストも書いてます。

突然ですが、この作品についてのアンケートをとりたいと思います

内容は簡単で一つは二木佳奈多、笹瀬川佐々美の二人をいつ、連れてくるか、もしくは連れてこないか、Aクラスに入れるべきか、Sクラスに入れるべきか。

二つ目はランキングバトルを明久達を交えて行うべきか、以上の二つを答えていただけるとありがたいです、期日は特に設けません、一週間したらこの文は削除します。

バカテスト

覗き騒ぎをどう思いますか？

女子生徒の答え

「迷惑です!!」

教師のコメント

そうですね、先生も困っています。

直枝理樹の答え

「……………本当にすみません」

教師のコメント

そこまで謝られるところが気まずいですね。

棗恭介の答え

「青春さっ!」

教師のコメント

そうですか。清々しい答えをありがとうございます。

作戦と友情と第一夜（前書き）

短いですが投稿です。時間が欲しい……

作戦と友情と第一夜

「作戦失敗か……」

あの後、理樹はその場から抜け出して部屋に戻ると、食事の時間だったので、恭介達と一緒に夕食をとっていた。

「ん？ 理樹。何か言ったか？」

「あ、いや。何でもないよ」

耳聴く恭介に聞き咎められたので、慌てて首を振って否定する理樹。

「そうか……それにしても下で騒ぎがあっていたが何なんだ？」

「ああ、確かに騒がしかったな」

「確かに、なんか悲鳴が聞こえた気がするけどよ」

男性陣が先程の騒ぎについて語り出す。

悲鳴が聞こえたと言っているの、どうやら女子がカメラを持って部屋に来た時のことらしい。

「理樹は何か知ってるか？」

恭介が尋ねてくる。

「あ、うん。確か女子風呂にカメラが仕掛けてあったらしくて、

女子が犯人捜しをしていたみたいだよ」

一応、当時者だったのだが、そこは臥せておく。

「何！風呂にカメラだと！？」

鈴が驚いた声を上げる。

そりゃ、普通はないからショックだろうね。

そう思っていると鈴が来ヶ谷に向き直っていた。

「来ヶ谷、今ならまだ許すぞ」

……どうやら来ヶ谷さんが犯人だと思っただけ

「ふえええ！？唯ちゃんが犯人だったの！？」

小毬さんまで勘違いしていた。

「だから唯ちゃんは辞めて欲しいのだが……鈴君、おねーさんも流石にそんなことはしないよ、せいぜい背中を流して感触を楽しむくらいだ」

来ヶ谷さんが一応反論していたが……こちらはこちらで怪しかった。

「……無論、カメラも用意しているが」

何やらボソツと呟いていたが見逃すことにする。

一応来ヶ谷さんは犯人じゃないとわかっているからだ。

「へえ、盗撮か、カメラなんてよくあるもんだな」

恭介が感心したように声をあげる。

「何、今はインターネットがあるからな、カメラ程度すぐに手に入るさ」

来ヶ谷が答える。

……段々来ヶ谷さんが犯人に見えてきた。

「やっぱりおまえか！」

鈴が声をあげていた。

「それで？　どうしたのこんな夜中に？」

深夜1時

皆が完全に寝静まった時間、反省文を書き終えた明久達に呼ばれて、理樹は明久達の部屋に来ていた。

「ああ、もちろん直枝に話しがあるから呼んだんだ。明日の作戦についてだからよく聞いてくれ」

雄二がそう言って話し始めようとした時。

「その話、俺達も混ぜてもらおうか」

誰かが声をかけてきた。

慌てて入口を見ると……

「恭介？」

恭介の姿があった。

「ど、どうしてこんな所に!？」

理樹が驚いて尋ねると恭介はふっ、と笑っていった。

「理樹が部屋を抜け出すのを見ておもしろそうだと思ってな」

どうやら恭介にはお見通しだったようだ。

「さて、その話、我がリトルバスターズも乗らせてもらおうか！」

こうして、リトルバスターズ男性メンバーの参戦が決まった。

こうして覗き騒ぎが本格的に始まることとなった

バカテスト日誌（前書き）

バカテストです、あまり良くない出来です。

バカテスト日誌

強化合宿二日目の日誌を書きなさい。

一般生徒の日誌

「今日はいろいろな騒ぎがあつて（精神的にも）疲れました。まだ未遂ですが、騒ぎが大きくなつてると思いました」 ま

教師のコメント

そうですね、先生も困っています。ところで何故精神的にも疲れているのですか？

棗恭介の答え

「今日のミッションは失敗だった……しかし、それを乗り越えてこそその先が価値ある物となるのだと思うので諦めずに頑張りたい」

教師のコメント

その頑張りを覗きではなく勉強に向けて下さい。

棗鈴の答え

「馬鹿兄貴達がうるさかった」

教師のコメント

そうですね。

井ノ原真人の答え

「今日は完敗したが次こそこの筋肉で扉を突破してやるぜ」

教師のコメント

扉を壊すのは辞めてください。

来ヶ谷唯湖の答え

「覗きへの恐怖に怯える少女達……ああ、たまらん！」

教師のコメント

まったく合宿に関係ないですね。

直枝理樹の答え

「本日もいつも通り」

教師のコメント

完全に慣れたようですね、出来ればそうでないといいのですが……

根回しとゲームと古今東西（前書き）

やっぱり短いです。代わりに明日は長くしたいです。

根回しとゲームと古今東西

結局、あの後理樹は事情を全て恭介達に説明する嵌めになった。

ちなみに、理樹のメイド服写真（着替えバージョン）を見た恭介が

「不覚にもどきっ！としたぜ」

と美魚が喜びそうな感想を漏らした。

「成る程、それで理樹がそんな事をした訳か」

「水臭せーな理樹、理樹の頼みならいくらでも協力したのによ」

謙吾と真人が納得したように頷く。

「という訳だ、ちなみに俺と明久も似た境遇で互いに協力しあっている」

雄二が説明する。

「成る程、ところでさっき言いかけてた作戦ってのは何なんだ？」

恭介が尋ねる。

「ああ、それについてだが、あんたらが協力してくれるなら非常に助かるからな作戦を変更しようと思う、実はなー」

この後雄二の説明を聞いた恭介が雄二に二、三質問をした後で解散となった。

翌朝、リトルバスターズの男性陣は朝食を食べ終わると明久達と合流した、ちなみに自習室はS、A、Fの三クラス合同である。

「いいか、わかってるな？」

「ああ、坂本達が交渉で俺達が仕込みだろ？」

恭介が答える。

自習が始まって一時間程たつと恭介達が席を立つ

「ん？何だ？きょーすけ達はどこかに行くのか？」

「ああ、まだ真人と謙吾の昨日のバトルの決着がついてなかったからな、勉強に集中できるよう決着をつけさせてくる」

恭介がもつともらしい言い訳を言う。

……半端な嘘じゃ来ヶ谷さん辺りにばれそうだからだ。

「ふーん、相変わらずアホな事をしてるな」

鈴はそれ以上ツツコンでは来なかった。

「よし、なら外にでも行くか」

そう言って部屋を出る理樹達。

ちなみに雄二達は既に部屋を出ている。

「（よし、それじゃあ行くぞ！ミッションスタートだ）」

恭介の声を受けて僕らはとある場所に向かった。

「まずいな……先生がいるぞ」

恭介が壁にへばりつきながら報告してくる。

「ええ！？ それはまずいよ、どうにかならないかな？」

雄二の指示でとある場所にやってきた理樹達四人だったが、昨日の

覗き騒ぎの影響か、見張りのように先生が立っていた。

「しかしどうやら動く気はないようだ。ここはどうやら誰かが囿になって先生を引き付けている間にミッションを達成するしかないよ
うだな」

恭介がそう言うのと僕らは互いにアイコンタクトを交わしていた。

（行けよ謙吾）

（断る！貴様が行けばいいだろう）

（僕、そんなに引き付けておく自信がないよ）

（なら真人でいいな）

（それは何か？貴様は日頃から無駄に筋肉を鍛えててでかいから目立ってて囿に最適だと言いたいのか？）

（二人とも喧嘩は止めてよ！）

三人がアイコンタクトを交わしていると恭介が提案した。

「ふっ、ならゲームで決めようじゃないか？」

「ゲームって、何？」

理樹が尋ねる。

「古今東西だ」

古今東西か……まあ妥当かな。

「よし。それなら行くぞ」

恭介の音頭取りでゲームが始まる。

「棗恭介から始まるっ」

「「「イエーッ！」」」

「古今東西っ」

「「「イエーッ！」」」

「Mから始まる英単語」

……ん？

（パンパン）恭介の番 ↓ 『M i n d』

（パンパン）理樹の番 ↓
『M a d e』

（パンパン）真人の番 ↓
『M u s l e』

………！？

（パンパン）謙吾の番 ↓

『M i r c l e!』

「ちょっと待てこら」

「何だ？」

真人がストップをかける

「どうして俺が答えたらM i r c l e（奇跡）なんだよ!？」

「だって……」

「なあ？」

「貴様が阿保だからだ」

「何だとしてめえ！」

理樹と恭介は言いよどんだが、謙吾がぱつさりと切り捨てた。

「落ち着け二人共、先生に見つかるぞ、真人。不満があるならしりとりになろう、二人もそれでいいな？」

恭介が尋ねてくる。

「ああ」

「わかったよ」

謙吾と理樹が承諾する。

「では行くぞ、リトルバスターズの『リ』！」

理樹の番

「えーと、『リンゴ』」

謙吾の番

「ふむ、『ゴリラ』」

恭介の番

「ふっ、なら『ラップ』」

真人の番

「おう、それなら……」

真人は自信満々に叫んだ

「『プロテイン』」

「待ちなさい、井ノ原君！君はどうして授業中に出歩いているのですか！」

「悪い先生、筋肉が俺を呼んでるんだ！」

真人は走っていた。

おまけ

「ちなみにもう一度真人には困をして貰うぞ」

「待ってくれ恭介。やはりここは初心に帰って古今東西で決めようぜ」

「ふつ、別に構わんが、時間の無駄だと思うぞ？」

「謙吾、今の内にはざいてな、行くぞ井ノ原真人から始まるっ」

「「イエーツ！」」

「古今東西っ」

「「「イエーッ!」」」

「人間の身体にある筋肉の名前っ!」

「「「っっ!」」」

真人の逆襲が始まっていた。

仕掛けと覗きと筋肉祭（前書き）

なんかグダグダです。どうぞ

仕掛けと覗きと筋肉祭

自習室にて

「よし、作戦通りやってくれたか？」

「ああ、」

「けど……いいの？」

理樹が不安げな声を漏らす。

「大丈夫だ。問題ない」

雄二が即答する。

「そうだぜ理樹、古今東西を問わず戦いとは非常なものさ」

「いや……あれはそんなものじゃ……」

理樹が言い淀む。

「だが、あれが効かない連中もいるからな、そいつらは任せたぞ」

「ああ、任せな。俺達リトルバスターズは必ずミッションを達成してみせるぜ！」

恭介が力強く断言する。

「ああ、任せた。正直お前達がいなかったらまずかった」

「ふっ、理樹の為だからな、当然さ」

「よし、じゃあ作戦開始は8時だ」

「「了解！」」

こうして、覗きを巡る戦いの第二ラウンドが幕を開けた。

「西村先生、流石に今日ぐらいは彼らも現れないのでは？」

「斎藤五段……じゃなかった布施先生、彼らを甘く見てはいけません。それに奴らの他にも犯人が居るようですし」

「その名前は……とにかくそうですかね？いくら何でもそこまで馬

「に、西村先生！大変です、変態が筋肉の塊になってやってきました！」

「まさか懲りるところか数を増やしてくるとは………！布施先生、警備部隊全員に連絡を！私は定位置につきます」

「わ、わかりました」

「盛り上がっていくぞおらあああ！」

「「「うおおっ！」「お」」」

「筋肉！ 筋肉！」

「「「筋肉、筋肉」「」」」

「神聖なる筋肉の神様、どうかこの筋肉祭がお気に召したならば、女子風呂への道を開いて下さい！」

真人が祈りを捧げる。

ちなみに今、Fクラスの男子は筋肉体操第五十二番を踊っている。

「わははっ、どうだ、やっぱ筋肉はすげーぜ。見ろよ謙吾、女子が皆避けていくぜ！」

真人が上機嫌で隣にいる謙吾に言う。

確かに女子は筋肉祭を行う男子を見ると召喚獣を出すことなく避けるか気絶をしていた。

ちなみにこの部隊はF男子＋真人＆謙吾で構成されている。

真人に出された指示はとにかく人の目を集めろといった物だったがそれは最良のある意味最悪な形で実行されていた。

「そこまでだ、真人少年と謙吾少年」

「その声は……来ヶ谷か！」

真人達、チーム筋肉馬鹿（今命名）に声をかけた人物を謙吾が一発で見破った。

「流石にここまでそんな物を見せられるとおねーさん不快なのでな、怯える少女達もいいが、ここで止まって貰うぞ」

「そんなもの言うんじゃねー！」

真人が切れる。

「ふむ、いいだろうかかってきたまえ、試験召喚！」

「へっ、そんなまだるっこしいことをしてられるかよ！筋肉の力を見な」

来ヶ谷が召喚獣を呼び出すが真人はそれを無視して来ヶ谷に踊りかかった

しかし……

「きもいわぼけえっ！」

「がはあっ！」

横から現れた鈴に蹴飛ばされていた。

「いかなる理由があろうとも、覗きはめっ！だ」

そう言われて多少目が覚めたFクラス男子。

筋肉祭の統率役である真人がやられたことにより正氣に戻ったようだ。

しかし……

「ここで諦めるわけには……！」

「鈴様には悪いが木下（姉）が俺を待っているんだ！」

「島田のぺったんこを拝むまでは……！」

やはりFクラスだった。

「ふっ、謙吾少年。かかって来るといい」

「いいだろう。いかせて貰うぞ！」

「「試験召喚！」」

二人の声が揃う。

「ちよっぴりお茶目な姐御肌 来ヶ谷唯湖

VS

最強の男児にして真人のライバル 宮沢謙吾」

「……………また恭介の仕業だな……………」

「ふむ、そうなるとランキングバトル形式か？」

来ヶ谷の疑問に答えるように召喚獣の武器が変化する。

「む、雑誌か」

「私はモップか」

空中に文字が表示された

『バトルスタート!』

「せいっ!」

謙吾は丸めた雑誌で来ヶ谷を叩いた。

来ヶ谷に34のダメージ

「ふっ」

来ヶ谷はモップで謙吾の足元を払った。

謙吾に63のダメージ

と、始めは互いにダメージを与えあっていたが、流石は謙吾と来ヶ谷段々相手の動きを見切るようになり互いにダメージを与えられな
いでいた。

「ふっ、流石は謙吾少年、しぶといではないか。しかし回りの少年
達は全滅したからな、君も諦めたらどうだ?」

いつのまにかFクラスの男子は他の女子に全滅させられていた。

「そうだな、そうさせて貰おう」

そう言って武器を置く謙吾。

「いいのか？」

と来ヶ谷が尋ねると

「俺の役目は陽動だからな、もう十分役目は果たしただろう」

と答えた。

しかし……

「甘いな謙吾少年、ちゃんと対策は打ってあるのだよ」

そう言って来ヶ谷は不敵な笑みを浮かべた。

恭介の場合

「恭介お兄さん」

「待って下さい恭介お兄さん！」

「……何だって？」

「恭介お兄さん！」

「も、もう一度頼む」

Dクラスの一分隊を率いて別ルートから向かっていた（事前に潜んでいた）恭介だったがいきなり現れた小毬とクドにそう呼ばれるとあえなく撃沈した。

「くっ、違う！俺はロリコンでもシスコンでもねえ！」

「ですが……今の反応はどう見ても」

「やははー、鈴ちゃんはと思う？」

「鈴！お前は俺を信じてくれるよな！？」

恭介が鈴に詰め寄る

「寄るな」

「……兄だぞ？」

「ド変態」

「うわあああああー！ー！ー！」

ついでに妹から変態扱いされた。

そして明久達は……

「待て、翔子！落ちつーぎゃあああ！」

「ひ、姫路さんはそんなことー」

「つつ！（ポタポタ）」

いつも通りだった。

そして理樹は……

「みんなどうなったかな……」

とある場所で作業を続けていた。

仕掛けと覗きと筋肉祭（後書き）

理樹「結局、作戦は意味がなかったね」

恭介「ああ、本命を使う前に終わっちゃった」

雄二「だが、向こうの戦力は確認できた」

明久「だよね、次は」

雄二「ああ次こそは」

恭介「覗いてみせる！」

理樹「ねえ、犯人探しから趣旨がずれてない！？」

恭介「何を言ってるんだ理樹、俺には鈴の成長を確認する義務がある」

理樹「入ってるのは鈴だけじゃないからね！？」

真人「まあ、恭介はロリコンだからな」

謙吾「ああ、問題ないだろう」

恭介「俺はロリじゃねえ！」

理樹「はいはい、みなさん、P V八万アクセス八千突破です。これからもよろしくお願いします」

恭介「最後にリクエスト話を募集する、何でも書くぜ、コラボもありだ」

一同「それじゃあこれからもどうぞよろしくお願いします」

反省と疑惑と最後の審判

「……………という訳で作戦は失敗だ」

「恭介……………」

「……………正直悪かったと思っている」

またまた深夜2時

雄二の説明を聞いた理樹が恭介にじと目を向ける

小毬やクドにお兄ちゃんと呼ばれただけで撃沈した恭介への非難と
憐れみがあった。

「そんなに…………お兄ちゃんって呼ばれたかったの？」

理樹が軽く引きながら尋ねる。

「ああ…………鈴の奴はちっとも呼んでくれないからな……………」

恭介がどこか遠い目をしながら言う。

「恭介てめえやっぱりロリじゃねえか！」

真人が非難する。

以前恭介にはロリコン疑惑が掛かっていたのだが、本人が否定したため流れていた。

「そうだ恭介、せめて作戦中くらい自重しろ」

謙吾も攻める。

「ああ、反省はしている。しかし後悔はしていない」

恭介はそう返事したが皆はまだじと目で見ていた

「まあ、棗のことはこの際置いておこう。それより解せないのは何故こちらの動きがここまで読まれたかだ」

「何でって霧島さんが読んでたんじゃないの？」

雄二の疑問に明久が答える。

「確かに俺の動きは読めたかもしれないが棗達Sクラスの連中の動きは読めない筈だ。しかし連中はちゃんと人員を配備していた。しかもピンポイントにだ。棗の弱点はSクラスの連中が教えたにしても、どこに誰が来るか正確に予測するのは幼なじみの俺にだって無理だ」

「確かに言われてみればそうだね」

「来ヶ谷の仕業かと思っていたが……確かに鈴を真人に当てた後、恭介の元に向かわせるなど完全にこちらを把握していないと無理だな」

「ということとは……」

「ああ、誰かがこちらの動きを監視して情報を翔子達にリークいる奴がいる。」

「スパイってこと？」

「そういうことだ。ムツツリー二、調査を頼む」

「……………（こくり）」

「よし、とりあえず今日は解散だ。明日は直枝には作業から離れて貰う。進捗状況は？」

「あ、うん。七割がた出来てるから最終日には間に合うよ」

「そうか、なら解散だ」

そうして爽やかに別れた6時間後……

「諸君！　ここはどこだ？」

『最後審判を下す法廷だ！』

「異端者には？」

『死の鉄槌を!』

「男とは?」

『愛を捨て哀に生きる者!』

「よろしい、これより緊急異端審問会を行う!」

皆ロープで縛られて床に転がっていた。

「あれ? どうしてこうなってるの?」

「さあ、分からん」

「一体どうしたんだ?」

ちなみに縛られているのは雄二と恭介で理樹達は参考人として連れてこられていた。

「吉井一級審問官、説明したまえ」

「はっ! 被告坂本雄二は明け方、木下秀吉の布団に侵入して一緒に寝るという痴漢行為を犯しております」

『何だと!?!』

「現在は、木下秀吉本人の証言のみですので今後は――」

「御託はいい、要点だけを纏めて述べたまえ」

「同じ布団で寝ていたので羨ましいであります！」

「うむ、実に分かりやすい報告だ」

「続いてそこに居る棗恭介氏だが……坂本被告彼の罪状を述べたまえ」

「ああ、俺だけ犠牲になるのは納得いかないんで巻き込んだんだが……こいつは昨日、Sクラスの神北と能美にお兄ちゃんと呼ばれていた」

『なに！？』

異端審問会の会員が叫ぶ

「それは……事実かね？」

須川会長が理樹達に尋ねる。

「え、まあ」

「よろしい、では最後の審判を下す。坂本雄二、及び棗恭介。汝言
い残すことはあるか？」

「てめえら！覗きはどうすんだ！」

「後悔はしていない」

そうか棗恭介には特別バンジーを、坂本雄二には一言言おう。

『『てめえをやらなきゃ覗きどころじゃねえんだよ！！』』

「須川会長。坂本には特別コースがよろしいかと」

「うむ、では殺れ」

『『『はっ！』』』

雄二と恭介が連れて逝かれる。

「…………結局何だったんだ？」

「さあ？」

謙吾の呟きに理樹はまともに返事をできなかった

バカテスト特別問題

貴方が好きな名言を答えなさい。

直枝理樹の答え

「青年よ大志を抱け」

教師のコメント

ウィリアムクラーク博士の言葉ですね。直枝君にも大きな夢を持ってもらいたいですね。

土屋康太の答え

「……性年よ女子風呂を覗け」

教師のコメント

クラーク博士に謝って下さい。

久保利通の答え

「世間のルールなんて関係ない！」

教師のコメント

ルールは守って下さい。

Fクラス男子の答え

「ただ純粹に欲望の為女子風呂を覗きたい！」

教師のコメント

共感しないで下さい。

井ノ原真人の答え

「筋肉あれば憂いなし」

教師のコメント

そうですか。

棗鈴の答え

「こいつ馬鹿だ！」

教師のコメント

そうですね。

坂本雄二の答え

「全ての人間は自由に生きる権利を有する」フランス人権宣言より
要約」

教師のコメント

せめて社会のルールは守って下さい。

テストと勉強と名言前編

「あれ？ 恭介、生きてたの？」

一時間後、戻って来た恭介を見た理樹の第一声がそれだった。

「理樹……お前Fクラスの雰囲気慣れすぎだ」

恭介が何故か嘆いていた

「そうか……理樹もついにバカになったか……」

鈴が残念な目で理樹を見る。

「ちょっと！ちがー」「それで？今夜はどうするんだ？」

否定しようとした理樹の声を遮って恭介が尋ねる

「ああ、それについてだが……ここじゃあまずいからな、昼飯の時にでも話すからとりあえずは、補充テストを受けるなりなんなりしといってくれ」

「わかった、なら午前中は自由に過ごしていいんだな？」

「ああ、」

「そうか……よし！」

雄二の返事を聞いた恭介がこちらを向く。

「お前ら何してあさー」「さあ、勉強しようか」

何か言いかけた恭介だったが、今度は理樹に遮られてその声は続かなかった。

「お前ら……」

恭介が↓orzこんな感じに落ち込んでいた。

「さて、何からしようかな」

「理樹、筋肉と物理どっちがいい？」

「リキ、英語をしませんか？」

「理樹君、一緒に勉強しよう」

「少年、おねーさんと保健体育の勉強をしないかい？」

「……………っっ！（ポタポタ）」

「理樹、ここを教えろ」

あっという間に囲まれる理樹。

一方、恭介は独りでいじけていた。

「この辺り、日頃の行いが現れるよな」

「だね」

そんな理樹達を見て、雄二と明久がそんな会話をしていた。

そんなこんなで2時間後

「ふーっ、大分進んだね」

「ああ、思ったより集中できたな」

「理樹、俺はもう駄目だ。後は任せたぜ」

「いや、真人は筋トレしてただけじゃない」

「きょーすけが静かだったから当然だ」

勉強が一段落して理樹達が話していると、復活した恭介がやって来た。

「おい、お前ら。暇ならちょっと助けてくれないか？」

そう言って恭介が差し出してきたのは……

「……世界の名言（迷言？）百選？」と書かれた本だった。

中をめくると

名言 「女たるものジム通いとプロテインを欠かしてはいけないぜ
え」 b y サマー

名言 「結局最後は筋肉が物をいうのさ」 b y 赤いバンダナ

名言 「青春さっ！」 b y ロリ疑惑

名言 「ふわぁっ、寝不足だ、寝よう」 b y 昼寝王国

名言 「まーんっ！」 b y 剣道少年

名言 「貴様にひとつ、重大な任務を託したい」 b y とある飛
行士

名言 「その幻想をぶち殺す！」 b y フラグメーカー

名言 「ググレカス」byとあるネット住人

……………どこからツツコメばいいんだろう。

「で？これを俺達にどうしろと？」

「ほら、最後のページに問題があるだろ？それを答えてくれ」

そう言って恭介が指指したページには名言が虫食い、もしくは意味だけが書いてあった。

「あ、確かに難しいのもあるね」

よく見ると難しい問題がいくつかあった。

「理樹、よく見せてみる」

そう言って本を受けとった真人は早速間違えていた。

「何？どんなに達者な者でも失敗することがあること？」

ああ、多分猿も木から落ちる、もしくは弘法も筆の誤りかな。
そう思っていると……

「猫も棒から落ちる」

真人が奇跡的に間違えていた。

「こいつ馬鹿だ！」

鈴が叫ぶ。

「ありがとよ」

何故か真人は礼を言っていた。

「ならば……理樹、答えてみる」

そう言って真人が見せてきたのは……

「言いたいこともあるだろう、泣きたいこともあるだろう、悔しいこともあるだろうが、これをぐっと堪えていくのが○修業である。」

うーん、確か『男の』だったかな？

そう言って答えようとする恭介が答えた。

「何々、ああ」

すらすらと書き込む恭介

「言いたいこともあるだろう、泣きたいこともあるだろう、悔しいこともあるだろうが、これをぐっと堪えるのが（真人の）修業である」

「何でだよ!？」

真人が叫んでいた

「どんなに言われようと筋肉を頼りに堪え、最後には自虐に走る真人にピッタリだと思ったんだが」

「ありがとよ」

納得していた。

「貴様に任せていては埒があかん。見せてみろ」

そう言って謙吾が奪って読む。

「ふむ、確かに難しいものもあるな、まともなものもあるし、学力には関係ないだろうが、いい勉強になりそうだな」

と、感心したように声を漏らす。

「そうか……よし!」

それを聞いて恭介は何やら考えていたが、おもむろに立ち上がると宣言した。

「これより第一回リトルバスターズ名言大会を行う!」

名言大会開始！（前書き）

グダグダです、週末に編集するかと……

名言大会開始!

「名言大会だど?」

「ああ、ルールは簡単でしりとりのように順番に名言を言っていくだけだ、皆が認めるならマイナーな名言でも構わないぜ、最後まで残った奴が名言王だ!」

恭介が当然のように宣言する。

「おもしろそうだな、俺達も混ぜてくれよ」

雄二達が声を掛けてくる

「ならうちも」

「私もいいですか?」

島田さんと姫路さんも声を掛けてくる。

「別に構わないが……人数が多すぎるな」

「恭介氏、ならば男女で分けないかい?」

「成る程、なら名言の判定は女子にやって貰おうか」

「いいんじゃない?」

「よし!ならまずは男子から名言大会を行う!」

こうして、男子による名言大会がスタートした。

恭介「野球はツーアウトから！」

女子「オッケー！」

理樹「ミッションスタート！」

女子「オッケー！」

謙吾「武士に二言なし」

女子「オッケー！」

真人「戦場では最後は鍛え上げた肉体がものを言う」

鈴「きしよい！」

雄二「世界は人の数だけ存在する」

女子「オッケー！」

秀吉「雨が降ったなら雨を浴びて遊べbyアルチュールランボー」

女子「オッケー！」

と、始めはそれなりにまともな名言が飛び出していたのだが……

30分後

恭介「つまりお前のほうが、逆にウナギパイに喰われたということ
さby宮沢謙吾」

女子「……………」

もはや場はカオスとなっていた。ちなみに女性陣はとっくの昔に判定を辞めている。

ここから先はご自由にご覧下さい。

理樹「はっ、俺一人でロリロリハンターズを旗揚げしてみせるぜ！
by恭介」

謙吾「んまつ、つぁ、ちよぎ（マヨネーズをお持ちしました）」b
井ノ原真人

真人「筋肉革命だ〜」

雄二「バカは死んでも直らない」

秀吉「いいい、いやじゃ！わしは男じゃ、胸を隠す必要はないのじゃ！」

明久「殺したい程妬ましいという嫉妬心は不可能を可能にする」

ムツツリー二「……そもそもエロがなくては日本の情報化は始まらなかった」

と、ぐだぐだになりながらも続いたが、ムツツリー二の一言で終わりを迎えた。

ムツツリー二「……エロなどに興味はない」

「「「なにい！？」「」」

思わず全員が叫ぶ。

「ムツツリー二、確かにそれは名言になるだろうけど、嘘の名言は駄目だよ」

「そうだぞ、ムツツリー二。嘘は人を騙せる範囲でつくものだ」

「つつ！（ブンブン）」

白々しくムツツリー二が否定する。

「まあいい、次は女子だな」

恭介の一言で自然と男子による名言大会は終了した。

バカテスト家庭科（前書き）

バカテストです

バカテスト家庭科

人間が生きるのに必要とするライフラインを答えなさい。

直枝理樹の答え

「電気、水道、ガス」

教師のコメント

正解です。

井ノ原真人の答え

「ダンベル、プロテイン、その他筋トレグッズ」

教師のコメント

君は筋肉だけで生きていけるのですか？

棗恭介の答え

「マンガ、遊び道具、遊び心」

教師のコメント

遊ぶことしか考えていませんね。

棗鈴の答え

「モンペチ、トリミング用のブラシ、ねこじゃらし」

教師のコメント

それは猫が生きるためのライフラインです。

宮沢謙吾の答え

「リトルバスターズの仲間達」

教師のコメント

間違いですが、先生この解答を好ましく思います

文月学園陣の答え

坂本雄二の答え

「針金、逃走資金、常識的な母親」

教師のコメント

君は誰から逃げているのですか――

霧島翔子の答え

「ロープ、手錠、坂本雄二」

教師のコメント

と、思ったのですが、辞めておきます。

吉井明久の答え

「塩、砂糖、水」

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

「カメラ、プリンター、その他機材」

教師のコメント

何をして生きていくつもりですか。

木下秀吉の答え

「常識」

教師のコメント

そうですね、先生もそう思います。

姫路瑞希&島田美波の答え

「電気、ガス、水道、抱き枕」

教師のコメント

最後の一つは何でしょうか？

特別短編！クリスマスイブの夜は誰と？（前書き）

遅れてすいません……時間が足りずこんなことに……年内には終わらせて本編に戻ります。

特別短編！クリスマスイブの夜は誰と？

「諸君！ 明日は何の日だ？」

恭介がどこかの独裁者のような口調でみんなに尋ねた。

「明日は……クリスマスイブだよな」

真人が答える。

「そうだ！ そこで我がリトルバスターズはクリスマスパーティーを開こうと思う」

恭介が宣言する。

「別に構わないが……急過ぎないか？ せめて昨日ならまだやりようはあっただろうに」

「謙吾の言う通りだよ、いくら何でも急過ぎない？」

そう宣言した恭介に謙吾と理樹がツツコム

「ふっ、安心しろ理樹」

そんな二人に恭介が自信満々に答える。

「ケーキの注文は済ましてある。」

そう言って、ケーキの予約券らしき物をひらひらと示す恭介。

「こいつ馬鹿だ！」

鈴が思わずといった感じで叫ぶ。

「恭介……」

理樹が軽く頭を抱えていた。

「おい恭介、お前に一つ言っておくことがある」

真人が一步前に出て恭介に問いかける。

「何だ？ ケーキの準備は万端だぞ」

「そうか……分からないなら教えてやる」

そう言って真人がまくし立てる。

「そりやお前、準備する時間とパーティーをやる場所と準備する時間だよお！」

「こいつ準備する時間って二回言ったぞ」

「真人なりに意味があるんだよ」

「きつと、大事だから二回言ったんですよ」

「意味なんかねーよ！ ごめんなさいでしたー！」

真人が大声で謝る。

「しかし恭介氏、確かに真人少年の言う通り、現状ではクリスマスパーティーなどを開くことなど出来ないと思うのだが」

来ヶ谷が尋ねる。

「ああ、それなら問題ない。明日はクリスマスイブであってクリスマスではないからな」

「つまり……明後日に開くということか？」

「そういうことだ、という訳でみんな準備しといてくれ、プレゼント交換をするからプレゼントも忘れないで準備してくれよ」

「しかし場所はどうするんだ？」

「場所も俺が準備しよう、追って連絡するからとりあえずは準備だけしといてくれ、では解散！」

そう言う恭介の言葉でその場は解散となった。



「うーん、どうしようかな……」

あの後部屋に戻った理樹は考え込んでいた。

「どうした理樹。悩み事なら筋肉に話してみな」

そんな様子の理樹を見て真人が話しかけてくる。

「いや、筋肉に話しても仕方ないと思うんだけど……」

理樹が言い淀んでいると

コンコン

部屋の扉がノックされた

「あん、誰だよ？」

「俺だ、入るぞ」

真人が聞くと謙吾が返事をして入って来た。

「んだよ、てめえかよ」

「悪かったな俺で」

「ノックなんて紛らわしい真似すんじゃないよ」

「まあまあ、親しき仲にも礼儀ありって言うしき、それより謙吾、何か用なの？」

真人を宥めながら理樹が謙吾に尋ねる。

「ああ、それなんだが……」

謙吾が言い難そうに言葉を切る。

「んだよ、言いたいことがあるならはっきり言えよ」

しかしそんな空気を無視するのが真人である。

「……わかった、なら正直に聞こう。理樹、お前達はプレゼントをどうするか決めたか？」

謙吾が険しい顔で尋ねてくる。

「もしかして……謙吾も？」

「理樹もか？」

そんな理樹の返事を聞いて謙吾も理解したらしく互いに苦笑していた。

「ああプレゼント？ そんなもんとつくに決まってるぜ、初心者専用筋トレグッズにDVDが着いた超レア筋肉セットだ！どーだ、すげーだろ？」

しかしそんな真人を無視して二人は会話を続けていた。

「今までは女の子は鈴だけだったからね……」

「ああ、それほど気にせずともよかったのだが……」

「今年は小毬さん達もいるからね……」

プレゼントをどうするかで悩む二人。

「なんだよ、そんなもんいつもと一緒にいいだろ？」

そんな二人を見て真人がそんな事を言ってきた。

「何を言ってるんだお前は、いいか？今回は恭介と鈴の他に女子がいるんだぞ、貴様の言う筋肉セットとやらを受けとって喜ぶやつらなど皆無だろうが」

とまっとうな意見を述べたのだが

「へっ、甘いな謙吾。このスペシャル筋肉セットは女子にも対応してるんだぜ」

自信満々にそう返す真人

「本気でそう言っているのなら尊敬に値するな」

「いや、多分真人は本気だと思うよ……」

「そうか、まあ馬鹿のことはほっといて、理樹はどうするんだ？」

「んー、無難にハンカチとかマフラーにしようと思ってるんだけど……」

「確かにそれが無難だな、よし、理樹。今から買いに行かないか？」

「いいけど……どこに行くか当てはあるの？」

「ああ、この前剣道部の女子が話していた店を覚えているからな、そこに行こう」

「わかった、急がないと売切れちゃいそうだしね、どこに集合にする？」

「10分後に校門でいいだろう、俺は外出届けを出してこよう」

「わかった、それじゃあ」

後で、と言おうとした所で真人が叫んだ。

「待て！勝ってに話を進めるな、俺も行く！」

謙吾が迷惑そうな顔で

「貴様はもう決まっているのだろうか」

と言うが……

「へっ、理樹が行くなら俺もいかねーとな」

という謎の理由により真人もついてくる事になった。

ちなみに

「よっ！」

校門には恭介もいて、結局男性メンバー全員でプレゼントを買いに行くことになった。

ミッション、スタンプラリーを制覇せよ！（前書き）

時間がありません。

ミッション、スタンプラリーを制覇せよ！

「なんか、こうして街に出るのも久しぶりだね」

学校を出て街に向かって歩きながら、理樹がぽつりともらした。

「そうかあ？」

「うん、だって謙吾は部活で忙しかったし、恭介は就職活動をしてたでしょ？一年ぶりなんじゃないかな」

「むう、確かに言われてみればそうだな」

「だけどよ、最近も遊んでるじゃねえか」

「だけどやっぱりそれとは違うよ」

「確かにな、こうして歩くのは懐かしいな」

と、他愛もない会話をしながら街の中心の広場に着くと、何やらイベントがあっていた。

「あれ？何かやってるみたいだね」

「クリスマス特別スタンプラリー大会、七人のサンタを捜せ？」

謙吾が看板を読むと恭介が食いついた。

「そのイベント、我がリトルバスターズに相応しいじゃないか……」

「きよ、恭介まさか……」

理樹が恐る恐る尋ねると案の上、恭介は宣言した

「ああ、我がリトルバスターズもこのスタンプラリーに参加する！」

目を輝かせながら恭介が言うと、謙吾が反対した

「恭介、俺達はクリスマスプレゼントを買いに来たんだぞ？そんな事をしている暇はないだろう」

「謙吾の言う通りだよ、それに恭介は会場の確保もしないといけないでしょう？」

理樹も恭介を説得にかかったが、あっさりと恭介は言い放った。

「何、会場はもう目星がついてるし、スタンプラリーをしながらでもプレゼントは買えるだろ？ 大体プレゼント交換をするんだから、何を買うのか見せる訳にはいかないから別れる予定だったしな」

そう言われると反論できない理樹と謙吾。

「よし、異論はないな？ 理樹、参加申し込みをして来てくれ」

「あ、うん。わかったよ」

受け付けに走る理樹。

「よし、ではゲームをするか」

「ゲームだと？」

「ああ、サンタは七人、そして俺達は四人だ。一人で二人見つけるとすると、一人だけ余るだろ？そいつが負けだ。」

「ふん、くだらん。大体プレゼントを買うのが目的で来たのに、そちらに走っては意味がないではないか」

「何だてめえ、逃げんのかよ」

謙吾がそう言うのと真人が挑発していた。

「別に、ただ趣旨がずれていると言いたいだけだ」

「へっ！ようするに勝てないって訳だな？」

「何？貴様……もう一回言ってみろ」

「何度でも言ってるよ、つまりお前は俺や恭介に勝てないからやりたくないんだろう」

「何だと……恭介はともかく貴様にこの俺が負けるだど？」

謙吾と真人がヒートアップする中、理樹が戻って来た。

「お待たせ、申し込んで来たよ。四人一組だったからちようどよかったよ……って、真人と謙吾。何をしてるのさ？」

今にも掴みかからんばかりの表情を浮かべる謙吾と、何故か得意げな真人を見て理樹が言う。

「聞いてくれ理樹、実はこいつが（事情説明中）という訳だ」

「はあっ、つまりまた恭介の仕業って訳？」

「おいおい、人聞きの悪い事を言うなよ理樹。俺はただ、ゲームをしようと提案しただけだぜ？」

心外だという風に恭介が言う。

「わかったよ、やろう。ただし罰ゲームは無しでね」

「おお！流石理樹は話しが分かるぜ！」

「それで、スタンプラリーの賞品なんだけど…」

そう言って受け付けで受け取ったらしいチラシを見せる理樹。

「おお、」

「これは……！」

「クリスマスと言えばこれでしょ？」

「確かに……よし！これよりリトルバスターズに緊急ミッションだ！プレゼントを買いつつ誰よりも速くスタンプラリーを制覇せよ！」

ひと呼吸置いて宣言する

「ミッションスタートだ！」

サンタとスタンプとプレゼント探し（前書き）

まだ終わりません。本当に時間が欲しい

サンタとスタンプとプレゼント探し

「うーん、どうしようかなあ……」

スタンプラリーが始まり、恭介達と別れた理樹は考え込んでいた。

急いでサンタを見つけてスタンプを手に入れてから探すか、それとも先にプレゼントを買ってから探すか……

この二択の間で、理樹は迷っていた。すると……

ピピッ！

「あれ？メールだ」

メールが来た。

件名 サンタ発見！

本文 西でサンタNO. 3を発見！スタンプをゲットした。

「うわっ！もう見つけたんだ……」

恭介からのサンタ発見の報せだった。

ちなみに見つけるとサンタから腕に特別な（紫外線を当てると光る）スタンプを押して貰える。

サンタにはN.O.がついている為、ゲットするスタンプが被らないよう、事前に恭介達にメールで報告する事になっている。

ちなみにN.O.は1に近い程見つけ難くなる。

いきなりN.O. 3なんて凄いなあ。

そう思いながら歩いていると……

「あれ？」

見知った顔を見つけた。

「鈴に小毬さん？」

「あっ、理樹君」

「なんだ理樹か」

鈴と小毬さんに会った。

「二人もプレゼントを買いに来たの？」

「うん、鈴ちゃんとクーちゃんと一緒に買いに来たんだよ」

「あれ？ でもクドは？」

「クドは美魚と会って一緒に周ってる」

「そうなんだ」

「ところで、理樹君もプレゼントを買いに来たの？」

「うん、けど今スタンプラリーをしてるから大変だよ」

「ほえ？ スタンプラリーって？」

「あ、うん。実は」

（事情説明中）

「という訳で」

「ふーん。またアホな事をしているな」

「あはは、いつものことだから」

「あっ！でもさっきサンタさんならこの先で見たよ」

「え？本当？」

「うん。確かNO. 8って背中に書いてあったから気になってたんだ」

「それだよ！ありがとう鈴、小毬さんそれじゃ！」

「気をつけてね」

小毬の声に押されて理樹はサンタを探しに向かった。

☆

「送信っ」と

あの後、首尾よくNO. 8のサンタを見つけた理樹は、無事スタン
プを手に入れていた。

「よし、それじゃあサンタも見つけたし。プレゼントを貰おうかな」
そう思い店に入った。

☆

30分後

「よし、プレゼントゲット」

無事にプレゼントを買った理樹は携帯を開いた。

メールが五件入っている。

「全員見つけたのかな？」

そう思ってメールを開くと最後に恭介からメールが来ていた。

「こちらは既に探しつくしたが、No. 1が見つからない。どうやら理樹のいるエリアに居るようなので、何とか見つけてくれ……って！ ええ！？」

冷静にメールを読んだ理樹は驚きの声を上げた。

「ということは……ここに残りの一人が居るって事？」

慌てて残りの文面を読むと

（ああ、援護に真人と謙吾をそちらにやった。俺はこっちを探し直してみる）

「真人と謙吾は……」

周りを見ると赤いバンダナが見えた。

正直真人と謙吾は目立つので助かる。

「真人！ 謙吾！」

「理樹！」

「ようやく見つけたぞ」

二人が駆け寄ってくる。

「ごめん。今メールを見たんだ、それじゃあ手分けして探そう、僕は店の中を捜すから謙吾は通りを、真人は路地をお願い」

「うむ、わかった」

「へっ、筋肉に任せときな！」

そう言って真人と謙吾が走り去って行く。

理樹もサンタを捜すべく走りだした。

☆

（2時間後）

「だ、駄目だ。みつかんねえ……」

「もうここにはいないんじゃないか？」

「そうだね、僕もそう思うよ」

路地裏、店内、通り、看板の裏から奥の奥まで探し周ったが、No.1サンタは見つからなかった。

「理樹、恭介の方はどうだ？」

「うーん、駄目みたいだね……」

状況は八方塞がりだった

サンタは見つからず。残り時間は後30分。今から探し直す時間も無い。

「どこにいるんだろう？」

「さあなあ……」

「壁にでも擬態しているんじゃないか？」

真人と謙吾も流石に疲れたようだ。

諦めかけたその時。

ピピッ！

理樹の携帯が鳴った。

「メール？ 誰からだろう……」

そう思って開くと……クドからだった。

件名 サンタについて

本文　リキ達はスタンプラリーでサンタさんを探していると小毬さん達に聞いたのですが、これは役に立ちますか？

そう書かれたメールにはN O. 1サンタの写真が！

「え！？どこに居たの！？」

慌ててクドに尋ねると

「中央市場です」

という返事が返ってきた。

それを二人に話すと。

「スタート地点か、迂闊だったな」

「そこまでは俺の筋肉も読めなかったようだな」

それぞれ感想を漏らした

「よし、恭介には連絡してあるし。僕らも急ごう！」

慌てて広場に向かうと、既に恭介がスタンプを貰っていた。

「よう、よくやった理樹。お手柄だぜ」

そう言って左手を掲げる恭介。

「鈴や小毬さんやクドに助けられたからね。リトルバスターズ皆の勝利だよ」

「そうだな」

恭介はそう言う

「さあ、受け付けに行くぞ！」

と言った。

そして……………

「ミッションコンプリートだ！」

見事に理樹達は賞品を手に入っていた。

ちなみに賞品は今、真人が担いでいる。

「悪いね真人」

「何、筋肉が必要なら俺の出番さ」

真人はそう言って、軽々と持っているが明らかに一人で持てる重さではなかった。

「恭介、これからどうする？」

「そうだな、とりあえずこれは女子にばれないように設置するか」

「そうだね」

「そういえば……お前達はちゃんとプレゼントを買ったのか？」

そのまま歩いていると、謙吾がふと、思いついたのか そんなことを言ってきた。

「うん、ほら」

「ああ」

そう返事をしてプレゼントを掲げる理樹と恭介。

一方……

「うおおお！？忘れてたああああ！」

真人は叫んでいた。

「やっぱり貴様、忘れてたいたか」

呆れたように呟く謙吾。

「待ってよ、真人はもう準備してるんじゃないの？」

「理樹！？ お前はこいつが用意する筋トレセットで構わないというのか！？」

戦慄した声を出す謙吾。

「まあ、明日の午前中にでも買ってこい。それと男子は4時に部室に集合な」

「わかったよ」

「了解だ」

こうしてスタンプリーは幕を閉じた。

クリスマスパーティーとサプライズプレゼント（前書き）

不完全ですが、投稿です。皆さん、よいお年を！

クリスマスパーティーとサプライズプレゼント

「理樹、その飾りを取ってくれないか？」

「わかった、これ？」

「おう、それだ。と、真人 テーブルはそっちに運んでくれ」

「恭介、こいつはどうするんだ？」

「ああ、そいつはそこに置いといてくれ」

翌日、食堂ではリトルバスターズの男子がテーブルを動かしたり、飾り付けをしたりと会場設営に働いていた。

「小毬ちゃん、これはいつ入れればいいんだ？」

「まだ、入れたら駄目だよ」

「わふーっ、美味しそうなんですっ！」

「ねーねー姐御、こいつはどうするんですか？」

「葉留佳君。さっきも言ったがそれはまだだ」

「……騒がしいですね」

一方厨房では女子が料理をしているようだ。

「それにしても……よく食堂を使う許可が出たね」

「まあ、そこは人脈があるからな」

「どんな人脈だよ……」

「ま、外よりましだからいいじゃない、広いし」

「確かに……恭介ならやりかねんな……」

そんな会話をしながら準備を進める理樹達。

「さて、準備は出来たか？」

「ああ、バッチリだぜ」

「よし、部室に行くぞ、理樹は鈴達の気を逸らしといてくれ」

「了解、気をつけてね」

こっそりと出て行く恭介達。

どうやら何か準備があるようだ。

☆

「諸君！　よく準備をしてくれた。　それではこれよりリトルバス
ターズ、もうすぐ年明け☆クリスマスパーティーを始める」

「「メリークリスマス！！」」

恭介の音頭に合わせて全員がグラスをぶつける。

「さあさあ食べ！今夜は無礼講だ！」

「それは本当か恭介氏？」

「いや、勿論常識の範囲でだぞ？」

「ちっ！」

「来ヶ谷さん……何をする気だったのさ……」

とにもかくにもパーティーが始まった。

「うめえ！ 七面鳥なんて始めて食べたぜ！」

「本当、美味しいね」

「わふー、褒めて貰えると作ったかいがあるのです」

「うむ、本当に美味しいな」

「少女達の手料理がマズイ筈がない。おねーさんは全ての料理を食べ尽くす所存だよ」

「本当に美味しいな」

「うん、美味しいー！」

と和気あいあいと食べていたが……

「貴様真人！ それは俺が取り分けていた料理だぞ！」

「食ってないんだからいいだろ、俺が食べて筋肉の足しにしてやるぜ！」

やはりというか何と言うか、やはり真人と謙吾のバトルが始まっていた。

「まあ、落ち着け二人とも。それよりプレゼント交換にいくぞ！」

「待ってました!」

という訳で、輪になって座りプレゼントを回すことにした。

「いいかー? 今から暗くするから音楽が終わるまで回してくれ、ではスタート!」

「暗くて見えないから誰のかわからないね」

「この重さ……真人のじゃない?」

「何だ理樹、俺のプレゼントが欲しいのか?」

「いやいやいや、……」

と話しながら回していると……

そこまで! という恭介の合図で終了した。

「では、各自プレゼントを開けてくれ」

その結果。

「わふー! 素敵です。ありがとうございます小毬さん」

「大事にしてね?」

クドには小毬から星の髪留め。

「……ありがとうございます。能美さん」

「わふー！ 気に入って貰えたら幸いです」

美魚にはクドから詩集が

「唯ちゃんありがとう！」

「いや、だから唯ちゃんは辞めてほしいと……」

小毬には来ヶ谷から服が

「うむ、素晴らしい。礼を言うぞ西園女史」

「読んだら感想をいただけるとありがたいです」

来ヶ谷には美魚から…本が。

「やー、ありがとうございます恭介さん。いやー、これは使えそうですね」

「ふっ、礼には及ばないさ」

葉留佳には恭輔からパチンコが。

「真人……何だこれは？」

「へっ、筋トレセットが当たるとは……運がいいじゃねえか」

謙吾には真人から筋トレセットが。

「……………鈴。これは何だ？」

「寄越せ、あたしが使う」

恭介には鈴から猫のトリミング用のブラシが

「謙吾、何だこれは？」

「見てわからんのか？ マフラーだ」

「これが？ ……………手ぬぐいかと思ったぜ」

真人には謙吾からマフラーが。

「あはは……葉留佳さん、これは？」

「おー、はるちんのが当たりましたか！」

理樹には葉留佳からビー玉等の玩具が。

「あたしのは写真立てか……………」

「うん、好きな写真を入れて飾ってよ」

鈴には理樹から写真立てが当たった。

「よし、皆プレゼントを受け取ったな？ それじゃあこいつは俺達四人からのプレゼントだ！」

恭介がそう言うと、真人と謙吾がカーテンを開け、理樹が電気を消した。

すると……

「「わあああっ！！」」

女子メンバーから歓声が上がった。何故なら……

「クリスマスツリーか」

そとには高さ20メートルはあろうかという、巨大なクリスマスツリーが立っていたからだ。

「綺麗……」

「わふー！ ベリー、ビューティフルなのです」

「綺麗だね」

「何だか少年達がこそそと何かをしているかと思えば……これだったのか」

「あはは、やっぱり来ヶ谷さんにはばれてたみたいだね」

「けどよく買えたな」

「昨日のスタンプラリーの景品なんだ」

そう……昨日のスタンプラリーで理樹達が手に入れたのはクリスマスツリーだったのだ。

「さあ、最後にケーキを食べてお開きにしようぜ！」

恭介の声で理樹達はテーブルに視線を戻すと……これまた巨大なケーキがあった。

「こいつは俺から全員へのクリスマスプレゼントだ」

「恭介！全部食っていいのか？」

それを見て盛り上がる皆

「来年もこんなクリスマスがくれればいいな」

そう漏らした理樹の声は誰にも届かなかったが、

「来年は正月パーティーだな」

「まだやんのかよ？」

「当然さ！」

早速正月の予定を立てるメンバーを見てみると、願わずともそうなる気がした理樹だった。

）END（

来ヶ谷おねーさんの相談室（前書き）

あけましておめでとうございます。

来ヶ谷おねーさんの相談室

ふふ、全国の少年、少女の皆、あなたのおねーさん。来ヶ谷唯湖です。

今日はおねーさんが少年、少女達からの相談を受けようと思う。

最初の相談はPEN マッスルメイト NAMEさんからだ。

「最近、ルームメイトが女子とばかり遊んでいてなかなか俺と遊んでくれねえんだ。俺はどうしたら理樹と遊べるんだ？」

ふーむ、成る程……とりあえず君は少年を誘う時、「筋肉と物理どっちがいい？」と尋ねるといい。では、これにて解決だ

「うおおお！ 理樹が女子の方にいつちまったじゃねえか！」

それでは次の相談だ。PEN NAME（めーん！めーん！まーん！）さんからの相談だ。

「せっかくバスターズジャンパーを作ったのに誰も着てくれないんだ。どうすれば皆ジャンパーを着てくれると思う？」

ふむ、君はとりあえず、病院に行くべきだな、腕の骨折より頭を調べて貰うといい。

「病院に行ってみたが、誰もバスターズジャンパーを着てくれないぞ？」

続いての相談はこちらPEN NAME（学園革命スクレボ命！）さんからの相談だ。

「最近、ある出来事があって周りからロリ容疑をかけられたうえに、妹までもが、俺から離れようとするんだ。一体この誤解を解くにはどうすればいいんだ？」

ふむ、成る程。しかしそれは事実だから誤解も何もないな。クドリヤフカ君や小毬君には十分気をつけてもらわないとな

「もう、いいよ。ロリでも真性でも好きに呼んでくれ！」

続いての相談はこちらPEN NAME（ツツコミ封印宣言）さんからだ。

「最近、僕のルームメイトに勉強を教えているのですが、掛け算すらまともにも出来なくて困っています。どうしたらまともにもせめて人並みに勉強ができるようにすることが出来るでしょうか？」

成る程。ならば教える方法を変えるべきだな。こんなのはどうだ？

「真人18×30は？」

「うおおーっ！頭があああ！」

「じゃあ真人。十八個の腹筋をつけた少年が三十人いたら筋肉はいくつになる？」

「五百四十個」

「す、凄い！真人が二桁の暗算を………！」

おねーさんの相談室、集え迷える少年少女はこれにて終了です。次は棗恭介の頼れる兄貴相談室が始まります。

久々にバトルスタート! (前書き)

更新が遅くてすみません。久々の本編です。どうぞ

久々にバトルスタート!

「よし、休憩はこれくらいにして、勉強しようぜ」

あれから結局女子にスルーされたため、名言大会も終わり、適当に楽しんだ理樹達は再び勉強に励んでいた。

「……………坂本、次は何をするんだ?」

「まあ、待て。その話しはここでしたらまずい」

坂本君と恭介がひそひそと話していた。やはりこの二人、尋常じゃないくらい気合いが入っている

「だからよ、男らしさといえは筋肉しかねえんだよ!」

「むう、言われてみれば、一理あるのう……………」

「その擦り足……………剣道でもしていたのか?」

「……………この程度、一般技能」

……………あまり真面目じゃなかった。

「で？　今夜はどうするの？」

三日目の夜。　僕は恭介達と一緒に坂本君達の部屋にいた。

「いいか？　これが俺が予想した教師の配置だ。　おそらくほぼこの通りに教師は配置されているだろう」

そう言ってしおりに載せられていた地図を指す坂本君。

地図には教師とおぼしき印がいれられ、横に名前が書かれていた。

「あ、高橋先生もいるんだね」

それを見た理樹は思わず声をあげた。

「ああ……流石にそろそろ相手も本気で来るだろうから……」

坂本君はそこで言葉を切ると、僕と恭介の方を向いた。

「根回しはしたが、参加するのはD、E、Fクラスだけだ。それで

も随分とましになったが……」

「やっぱり厳しいの？」

「ああ、相手の戦力が昨日と同じなら勝てるんだがな……」

「それで？ 鈴達と高橋先生はどうするんだ？」

恭介が尋ねる。

「ああ、Sクラスの連中はこちらで抑える。つまりお前ら二人に高橋先生を頼むことになるな」

「わかった。まあ足止めなら可能だろう」

「そうだね。それなら今日も作業は中止なの？」

「ああ、もうほぼ出来てるんだろう？」

「う、うん。一応は」

「なら問題ない。今日と明日しかないが。逆に言えば明日があるかな。今日慌ててやるより正攻法で行くべきだ」

「そうだな。よし、作戦は8時からだったな？」

「ああ、手筈通り頼むぜ？」

「ああ、任せとけ！」

そう言って別れた雄二と恭介だったが……

午後8時、作戦は開始と同時に破綻していたのだった。

「大変だ！ 作戦がばれてたんだ。集合場所が襲われて半分近くがやられた！」

近くでFクラス男子が叫んでいる。

「失敗か………！」

「どうするの！？」

その様子を見ながら理樹は雄二にトランシーバーを使って指示を仰いだ。

「とにかく！ 手筈通り高橋先生とSクラスの女子二人を頼む」

「わかった。そっちは？」

「なんとか戦力をまとめ直す！」

「了解！」

そう言って動き出した理樹達だったが……

「そ、そんな……」

理樹は目の前の光景が信じられなかった。

「り、鈴に止められるなんて……」

高橋先生の元に向かおうとした僕らの前に立ち塞がったのは鈴だった。

しかし真人と謙吾が向かったので大丈夫だと思っていたのだが……

「ま、まさか俺が鈴に」

「……………」

目の前では真人は倒れ、謙吾が膝をついていた。

「あたしは確かにそんなに強くはない。しかしあたしには仲間がいる」

そう言う鈴の周りには大量の猫達がいた。

鈴の召喚獣の能力らしい

猫達がどや顔でこちらを見ているのが妙に印象に残った。

ちなみに真人は鈴のハイキックで沈んだ。

「くっ、理樹。行けるか？」

「無理だよ、鈴はともかく、あの猫達は無理だよ」

謙吾を倒すなんて信じられない強さだ。

「ぎゃあああ！」

二階からは悲鳴が聞こえてくる。

「ミッションオーバー（任務失敗）……」

恭介がつぶやいた一言が心に響いた。

作戦と決意とハルマゲドン（最終決戦）（前書き）

遅くなりました！しかし受験があるのでまだ不定期ですどうぞ！

作戦と決意とハルマゲドン（最終決戦）

「失敗か……」

「ああ、どうやらあいづらを甘く見ていたようだな」

覗き騒ぎから一夜明けた朝。

恭介と坂本君が朝食をとりながら話していた。

……昨日、凄い折檻にあっていたのに、ぴんぴんしているなんて
……正直凄いと思う。

「災難じゃったのう……」

隣でそう同情の言葉をかけたのは木下君？、ちなみに僕と木下君は
何故か無罪放免だった。

……元の世界でも女子寮に出入りできたけど、なんか男扱いされて
いない気がする。

「それで？ 今日はどうするんだよ？」

「ああ、それについては作戦を準備してある。ムツツリー二」

真人が尋ねると坂本君が答えた。どうやら既に準備していたようだ。

「今回の作戦で、相手の戦力を完璧に把握できた。これはでかいぞ、

なんせ向こうの戦力はもう頭打ち。つまり増えることはない」

「理樹、頭打ちってどういう意味だ？」

「坂本君が言った通りだよ、簡単に言えば限界ってとこかな？」

「成る程。つまり筋トレを極めて、これ以上腹筋が割れなくなったってとこか？」

「凄く遠回しだけど、大体それで合ってるよ」

「だが、相手の戦力がわかってても、こちらの戦力が変わらないままでは意味がなからう」

「確かに、謙吾の言う通りだ。坂本、その辺はどうするつもりだ？」

「ああ、それについてだが、こちらで策は用意してあるが……万全を期して直枝にも協力して貰いたい」

「僕に？」

「ああ、とりあえず今から写真撮影だ」

そして10分後

「どうしてこうなるのさ!？」

女装させられた理樹は秀吉によりメイクを施され、完全な女子とさ

れたままムツツリー二に撮影させられていた。

「作戦の為だ、諦めろ」

そう言う雄二だが、理樹を直視できないでいる。

何せ本気を出した秀吉にメイクを施された理樹の女装姿はすさまじく、頭では男だとわかっていてもどうしても女にしか見えないのだ。そんな理樹が女子の制服を、ぎりぎりまではだけた格好でいるのだから、見ていてなぜかいけない気分になるのだ。

また、羞恥心からか頬を赤く染めているのがまた女らしさに拍車をかけていた。

「…………ツツ！」

ブシャアアアアッ

それを撮っていたムツツリー二がとうとう血の海に沈んだ。

それを横目で見ながら雄二がカメラを回収する。

「よし、この写真があれば覗きに走らない奴はいないだろう。直枝、よくやったぞ」

「全然嬉しくないよ…」

理樹は疲れきった顔でそう呟いた。

午後8時

「明久。今更じたばたするな。 補充テストも全て受けたし、写真もまわした。やるべきことは全てやったんだ」

夜、明久がそわそわとしていると雄二が窺っていた。

その横にはいつものメンバーの他にリトルバスターズ男子の姿もあった。

「いいか、手筈通り頼むぞ」

「わかってる役目は果たすさ」

雄二と恭介が作戦の再確認を行い、隣では、謙吾と秀吉が座禅を組んで精神統一を行っていた、部屋の隅では真人が筋トレをしており、各々が本番に向けて緊張感を高めていた。

そして――

ーピッピッ

どこかで電子音が鳴った。午後8時を告げる時報、戦闘開始の法螺貝だ。

「……よし。てめえら、気合は入っているか！」

「「おうっ！」「」」

「女子も教室もAクラスもFクラスも関係ねえ！
男の底力、とくと見せてやろうじゃねえか！」

「「おうっ！」「」」

「これがラストチャンスだ！俺達四人から始まったこの騒ぎ、勝利で幕を閉じる以外の結果はありえねえ！」

「「当然だっ！」「」」

「強化合宿第四夜、最終決戦、出陣るぞっ！」

「「「よっしゃあーっ！っ！」「」」」

強化合宿第四夜二〇〇〇時。今、覗きを巡る最後の勝負が始まろうとしていた。

サイド理樹

「いたわっ！　主犯格八人組よ！」

『長谷川先生！　向こうの八人をやります！』

部屋を出てすぐに長谷川先生率いる女子部隊が展開されていた。

どうやら僕らは徹底的にマークされてるみたいだ

「ふん、雑兵どもが。この俺に敵うと思うなよ。　――試験

召喚！」

先行してきた女子二人に大して坂本君が召喚獣を展開する。

『Eクラス　古河あゆみ&源　涼香　VS　Fクラス　坂本　雄二

数学　　83点&77点VS　　224点』

「勉強してから出直しやがれっ！」

『『きゃあああーっ！』』

坂本君の召喚獣が素早い動きで接近し、それぞれに拳を叩き込む。
ただの一撃で勝負はついた。

「坂本君！　待ちなさい！」

倒された女子に遅れてグループの頭の長谷川先生が縋ってきた。
でも、その動き一瞬遅い！

「長谷川先生。残念ながらここは通しませんよ」

長谷川先生と僕達の間にはFクラスの男子が割って入る。

「ここは任せて先に行け！ 試獣召喚っ！」

『『『試獣召喚！』『』』

壁を作るように召喚獣が展開される。

「女子風呂でまた会おう！」

吉井君がそう告げると僕らは先に進んだ。

まわりからは戦いの声が響いてくる。

『翔子たん！ 翔子たん！ はあはあはあああっ！！』

『島田のぺったんこおーっ！』

『姫路さん結婚しましょおーっ！』

『理香ちゃんっ！』

最後のは聞こえなかったことにしよう。

「凄い士気じゃな。これならば三階の制圧は問題なさそうじゃ」

「皆の気持ちが一つになってるからね」

この階にいる女子と教師のだけれもがEクラスとFクラスの男子に圧されていた。もう三階は安全地帯だろう。

「でも、ここから先が勝負だよね……」

「ああ、Cクラスが参戦しているかが勝負の鍵だな」

「何、あの写真を見て動かない奴なんざいないさ」

階下では戦闘の気配がする。

「……躊躇っている時間はない」

「うん。行こう！」

広めの階段を駆け降りる。

そして踊り場を曲がって見えた先には、

『俺たちの覗きの邪魔はさせない！ 試獣召喚！』

『先生、覚悟してもらいます！』

『き、君達まで参加していようとは……！』

『斎藤五段 布施文博

化学663点

VS

Cクラス 黒崎トオル144点&野口一心132点』

「Cクラス！ 来てくれたんだ！」

明久君が快哉を叫ぶ。

そこには待ち望んだ援軍の姿があった。

「Cクラス・Dクラスの野郎ども、協力に感謝するっ！
――俺たちの背中はお前らに任せるぞ！」
二階は

坂本君がC、Dクラスを鼓舞するように叫んだ。

『協力なんざ、ったりめえだ！』

『女子風呂覗かなくて何の為の男でえっ！』

『てめえらこそしくじるんじゃないぞ！』

凄い。士気が高すぎてべらんめえ口調になっている。CクラスとDクラスは意外とノリが良いのかもしれない。

「あのさ、こういうのって凄く嬉しいよね」

「そうじゃな。仲間が増えてゆく喜びとでも言うべきじゃろうかの」

仲間が増えてゆく喜びか……リトルバスターズの仲間も増えていく
たびに楽しくなってきたなあ。

「理樹準備しろ、そろそろ来るぞ」

そんなことを思いながら階段を降りていくと、恭介が耳元でそう注
意を促してきた。そうか、たしか一階には……

『Aクラス 霧島翔子&Fクラス姫路瑞希
VS Bクラス 加西真一

総合科目 4762点&4422点VS 1692点』

学年トップと学年次席、そして高橋先生に加え、クドと小毬さんに
葉留佳さんの姿があった。

「……雄二。悪戯はそこまで」

「明久君。ここは通しませんよ」

「リキ！目を覚まして下さい！」

「翔子かっ！」

「姫路さん……っ！」

「クド！小毬さんに葉留佳さんもっ！」

地下へと続く階段の前。坂本君の予想通り、そこには最強の戦力が

揃っていた。

「オマケに随分と用心深い布陣だな、クソッ！」

階段前の向こうの配置を見て坂本君が吐き捨てる。

階段の真ん前に高橋先生がいて、先生はそこを動く気配を見せない。その回りにはAクラスの女子やクド達の姿があった。

（坂本、例の隙を作る作戦はどうなっている？）

（それは問題ないが、通過したあとで地下で挟まれる。最低でもこの連中を引き付けておく戦力がないと話にならない）

恭介と坂本君が話し込んでいるけど、どうしようもないみたいだ。

……………どうする？

周りではBクラス男子が弱音を吐いている。

ここまでか……

諦めかけたその時、明久が叫んだ。

「正直に言おう。今、僕は――純粋に欲望の為に女子風呂を覗きたいっ！」

「何を言ってるの！？」

思わず叫んでしまう。しかし、その声に応えがあった。

『よく言った、吉井明久君っ!』

この声は――

「久保君っ! 来てくれたんだねっ!」

「ああ。今この時よりAクラス男子総勢24名が吉井明久の視きに力を貸そう! Aクラスの皆、聞こえているな? 全員召喚を開始して吉井明久を援護するんだ!」

『『『おおおーっ!』』』

全男子が揃った。今だ!

「坂本っ!」

「わかっている、作戦通り行け!」

その言葉を受け、僕、真人、謙吾、恭介、明久君、土屋君が走り出す。

「まさかAクラスの皆まで協力するとは思いませんでしたが、問題はありません。ここは誰であろうと通しませんから――試獣召喚!」

そうやって高橋先生が召喚獣を呼び出すが……

「高橋女史! 悪いがここは通らせてもらうぜ! 行くぞー! 起動っ!」

坂本君の声に合わせて腕輪が光る。

「干渉ですか……！ やってくれましたね坂本君……！」

「行けっ！ 鉄人を倒して、俺達を理想郷に導いてくれ！」

「任せとけっ！」

「うん！」

「任せな！」

次々と返事をしながら飛び込んでゆく、

「く……！ 貴方達はいかせません！」

吉井君と土屋君が走り抜けたところで高橋先生が召喚獣を呼び直していた

これじゃあ進めない！

そう思ったその時

「試獣召喚っ！」

恭介が召喚した。

『学年主任 高橋洋子VS Sクラス 棗 恭介』

総合科目 7742点VS5768点』

「お前ら！ここは俺に任せて先に行け！」

恭介が道を開いてくれた

「でも……」

僕も助けたほうがいいんじゃない……

「もう迷うな！とっとと行けえー！……！！！」

恭介に怒鳴られてしまった。

「わかった！」

僕は皆を追って走りだした。

激突！（前書き）

すいません、点数表示をを後で訂正します。

激突！

「よし！行くぞ！」

「うん！」

恭介のおかげで無事に高橋先生の元を通過した僕らは女子風呂へ続く廊下をかけると……

「ムツツリー二君、待ってたよ。もしかしたらこないんじゃないかと思ったよ」

「流石だな少年達、しかしここまでだよ」

「く、工藤さん……」

「来ケ谷さん！？」

油断した！ まさか来ケ谷さんがここにいるなんて……

計算違いの事態に固まっていると土屋君と真人が前に出た。

「……………作戦に変更はない。ここは引き受ける」

「ふっ、ここはこの筋肉に任せな」

「え？」

思わず耳を疑う。そんな馬鹿な！　この三人を相手に二人で戦うなんて！

「……………奴らには借りがある」

「来ヶ谷にはさんざんからかわれてるしな」

「いけるの真人？」

「当然だぜ」

「ムツツリー二はいけるの？」

「……………当然だ」

明久君の問いに土屋君が小粋な笑みを返す。

二人とも自分の力を信じている。なら僕も信じよう！

「わかった、ここは任せるよ、行こう謙吾、明久君」

「わかった」

「うん！」

僕らは二人を残して廊下を走った。

「二人に免じてここは通してあげる」

すれ違いざま、工藤さんのそんな台詞が聞こえてきた。

二人とも……………！

「土屋。お前には失望した。まさか教師を相手に勝てるなんて幻想を抱くとはな」

「大島先生が出るまでもないですよ。僕と来ヶ谷さんでやりますから」

「そうか。それなら二人に任せる」

「はい。任せちゃってください」

「……………が、決めた？」

「うん？　なあに、ムツツリー二君？」

「……………生徒が教師に勝てないなんて、誰が決めた？」

「ああ、その通りだぜ」

「……ほう？　土屋、井ノ原、随分と威勢の良いことを言うじゃないか？　――試獣召喚」

「あははっ。相変わらずムツツリー二君は面白いなあ。でも、先生の前にまずは僕に勝たないとね？　――試獣召喚っ」と

「……………試獣召喚」

「試獣召喚！」

『体育教師　大島武　　&　Aクラス　工藤愛子　VS
Fクラス　土屋康太

保健体育　501点　&　383点
VS774点』

『Sクラス　来ヶ谷唯湖　　VS　Sクラス　井ノ原真人
保健体育　786点　VS　762点』

「……………え？　ムツツリー二君……、その点数、なに？」

「……………信念は、不可能を可能にする」

「やるじゃねえか、らいらいだに……！」

「来ヶ谷だ。しかし意外だな、真人少年がここまでの点数を取るとは……」

「へっ、筋肉にわからねえことはねえのさ」

「成る程、体育のほうか……」

「（ギリッ）土屋、貴様いつのまにここまでの力を………！」

「「……………時間がない（ねえ）纏めてかかってこい」」

「そこで止まれ、理樹」

「直枝さん、ストップです」

「鈴！ 西園さんまで！」

一方、理樹達も最後の難関にぶつかっていた。

「そうかSクラス、俺達ならここに二人も配置できる訳か」

考えたな、と隣で謙吾が呟く、しかし幸い相手は二人、そして誰か一人が脱衣所、女子風呂に辿り着けばいい。

「明久君、先に行って！ここは僕と謙吾が引き受けるから！」

「了解！」

明久が走り出す。

鈴と美魚は追わなかった

代わりに言葉のナイフを理樹達に向けてくる。

「スケベ」

「変態」

「色欲魔」

「むっつり」

「セクハラ」

「人として恥ずかしくないのですか？」

言葉のナイフは理樹と謙吾の心をずたずたに引き裂く。

「お前は、軟弱だけど女の子には優しい奴だと思っていたのに……見損なったぞ！」

この明らかに理樹に向けられた言葉に理樹は怯むが必死に言葉を紡いだ。

「ぼ、僕だってこんなことはしたくないよ！ でも男には、悲しみしか後に残らないとわかっていても、やらないといけないことがあるんだ！」

「もう、何を言っても無駄みたいだな。なら、あたしがおまえを止めてやる」

漫画のような台詞を交わした二人は召喚を開始した。

「」「」「試獣召喚」「」

『Sクラス 棗鈴&西園美魚 VS Sクラス

直枝理樹 &宮沢謙吾

総合科目 2845点& 2986点 VS 3842

点& 2765点』

「にゃ、にゃにゃい！」

表示された点数差に鈴が驚きの声を上げる。

いける！

そう、考えた理樹だったが……

「棗さん、あれを」

「わかった、これだな」

美魚に促されて鈴が取り出したものを見て思わず叫んだ。

「マタタビ!?!」

「これを使ってみよう」

鈴は禁断のマタタビを使った。ネコが召喚される……にゃー、にゃー、ぬおー、

「なんだおまえら、全員集合だな」

ネコ12匹とドルジが現れた。

「バトルランキングルールが適応されているのか!?!」

謙吾が驚くのも無理はない、鈴の点数が上がっているのだ。

『棗鈴 総合科目 3685点』

「いくぞおまえら！」

にゃー！にゃー！にゃー

ネコの声を合図に四人の戦いがスタートした。

突破口（前書き）

何とか書けました

突破口

「行け！」

『『『にゃー！』『』』』

「ぐっ！」

「くっ！」

鈴の号令で猫が飛び掛ってくる。

理樹と謙吾はそれを必死に交わす。

「行きます……」

と、そこに美魚の召喚獣が攻撃を繰り返す。

「つつ！？」

慌てて身を屈める二人の頭上をヨーヨーが掠めていった。

「西園まで！ あれは化学部のサイバー兵器じゃないのか！？」

「やっぱり、恭介の仕業みたいだね」

鈴がマタタビを持っていた事といい、どうやら恭介の手回しで女子には僕らを相手するに限り、バトルランキング制度がかかっているようだ。

ハンデとして扱われている為か、女子のパワーアップが著しい。

「謙吾！ どうする！？」

「どうするも何も、こうなったら点数的に俺が西園とやるしかあるまい、鈴を頼む！」

「わかった！」

とりあえず、方針が決まったので鈴と猫達の相手に集中する。

どうやら上手く謙吾が西園さんと引き離してくれたようで攻撃はない

「お前ら、理樹を倒したらモンペチをやろう」

鈴が猫に話しかけている、どうやら戦闘意欲を煽っているようだ。

猫達の戦闘力が上がった

Sクラス 棗鈴

総合科目 3924点

「上がり過ぎでしょ！？」

理樹が驚愕の叫びと共にツツコム。

「こんな状況でもツツコミを入れて来るなんて……流石は理樹だな」

「全然嬉しくないからね!？」

鈴が感心したように声を漏らす、それすら理樹にとってはそれすらツツコミの対象である。

「それより……どうしよう」

先程までは理樹が点数で鈴を上回っていたが、今は逆転されている。理樹が考え込んでいると、いるはずのない恭介の声が頭に響いてきた。

(あれを使う時が来たな……)

恭介!？ あれって？

(お前に渡したあれだよ)

ええ!？ というかやっぱり恭介の仕業だったんだね!？

(恭介? 誰の事だ?)

いや、今更惚けても遅いから!？

(まあいい、とにかくあれを使うんだ。あれは最強の証。強い者しか扱えない物だ)

で、でも!

（逃げるのか？ 逃げ続けるのか？ そして誰かが助けてくれるのを待つのか？ お前の人生そんなにいいのかよ理樹！ いや、うまーう！）

少しカチン！と来た。

いいよ！僕だってそこまで弱虫じゃない！

（ならば自分を越えろ！ 楔を解き放て！）

「もう、終わらせるぞ」

はっ！ と気付くと鈴が猫に攻撃の合図をだそうとしていた。

その前にあれを使う！

「これを使ってみよう」

理樹は斎藤マスクを使った。

Sクラス マスク・ザ・斎藤

総合科目 4578点

理樹の点数がアップした

「行けっ！」

鈴の攻撃！ 猫達が一斉に飛び掛かる。

「うまうー」

しかし斎藤は全ての攻撃をひらりと交わした。

「ぬおー」

ドルジの攻撃！

「はりゃほれ うまうー」

しかし斎藤は受け止めて見せた。

Sクラス マスク・ザ・斎藤

総合科目 4238点

僅かに減少しただけだ。

マスク・ザ・斎藤の攻撃

「うまうー」

「うまうー」

「うまうー」

「うまうー」

「はーりゃほーれ、うまうー！」

「うわああああ！」

鈴は倒れた。

猫達は餌を貰った。

ドルジは転がった。

マスク・ザ・斎藤の勝利！

「よし！ 僕の勝ちだ！」

理樹の声が廊下に響いた。

成功と伏兵とラストバトル（前書き）

非常に短いですが投稿です。

成功と伏兵とラストバトル

「ふっ、俺の勝ちだな」

理樹が勝利を収めると同時に隣では謙吾が勝利を納めていた。

「召喚獣バトルだったのが幸いしたな」

運動が得意でない美魚だ、それを補うのがサイバー兵器だが、本人ではなく召喚獣が扱う為に動きが鈍かったのだろう。

「勝ったのか、流石理樹だぜ」

「……よくやった」

声をかけられて振り向くと、真人とムツツリーニの姿があった。

「二人とも！ 無事だったんだね！」

「へっ、まあな」

「……………当然」

突入した全員は無事のようだ。

「よし、明久君の所に行こう！」

「ああ」

「承知！」

「……（コクリ）」

三者三様の返事を聞くと、理樹達は女子風呂に向かった。

一方、一階階段前でも決着がついていた。

「行け！」

「とどめだ！」

「くっ！」

学年主任 高橋洋子 VS

Sクラス 棗恭介 & Fクラス 坂本雄二

総合科目 0点 VS 18点 & 2864点

高橋先生撃破！

『『『よつつつしゃあああああ!』』』

男子の歓声が響き渡る。

「勝ったな」

「ああ、俺達の勝ちだ」

「まだですよ坂本君に棗君」

雄二と恭介が互いに健闘を讃えていると、高橋先生が水を注して来た。

「どういうことだ？」

「西村先生も召喚獣を使われるのですよ」

「「何!?!」」

鉄人は召喚獣を使わない

そう思っていた二人にとっては凶報だった。

「明久君!？」

「「吉井!？」」

「……………明久!」

風呂場にたどり着いた理樹達は信じられない光景を目の当たりにしていた

「これで終りだ吉井!」

そこには自ら拳を振るう鉄人と、鉄人の召喚獣がいた。

「ぐっ!」

明久が吹き飛ばされる。

「一体どうしたの!？」

慌てて駆け寄り尋ねる。

「鉄人が召喚獣を出してきたんだ」

見れば明久の召喚獣が二体いた。

どうやらそれに対抗するため召喚獣を出したようだ。

「さて、お前ら覚悟はいいな？」

鉄人がボキボキと拳を鳴らしながら迫ってくる。

もはや理樹達の運命は風前の灯だった。

「くっ、鉄人はテストを受けていないんじゃないのか！」

「いつの間にか受けていたってことだろ、プラフ（嘘）だといんだけど……」

「高橋女史は嘘を言うような人じゃない」

「だな、それより急いで合流しないと！」

「おう！ 行くぞ野郎ども！！」

『『『おーっ！』『』』』

雄二達は女子風呂に向かった。

一方理樹達は何とか対抗しようとしていた。

「「試獣召喚!」」

『補習教師 西村宗一 VS Sクラス 直枝理樹 & 井ノ原真人
& 宮沢謙吾

総合科目 6852点 VS 2141点 & 894点 &
1124点』

召喚獣を呼び出すが理樹を含め、全員点数を消費していた。

「くっ、やっぱり厳しいか!」

「理樹、どうする?」

「恭介達が来るまで時間を稼ごう、二人は西村先生をお願い、僕は召喚獣を抑えるから」

「おう!」

「わかった」

二人の召喚獣が鉄人に突っ込む。

「来い！」

理樹は刀を構え直した。

決着！（前書き）

何かおかしく……こんな筈じゃなかったんだけどな、おかしい……
：

決着！

「くっ！」

鉄人の攻撃を受けて召喚獣が吹き飛ぶ。

理樹達は苦戦していた。

『補習教師西村宗一VSクラス直枝理樹&井ノ原真人&宮沢謙吾
総合科目 6478点VS1547点&241点&546点』

僅かにしか鉄人の点数が減っていないのに対し、理樹達はもはや一撃で倒されてもおかしくないくらい点数を減らしていた

「どわっ！」

「ぐっ！」

二人の召喚獣が吹き飛ばされる。

「真人！謙吾！」

それを見た理樹は集中力を切らしてしまった。

「よそ見とは余裕だな！直枝！」

「しまっ！」

そこに鉄人の拳が叩き込まれる。

理樹が思わず目を閉じたその時！

「突撃！！」

「三番隊は右から四番隊は左から突っ込め！」

「ここがラストだ！気を引き締めやがれ！」

『『『うおおお！』『』』』

関の声が上がり、廊下から男子がなだれ込んできた。

「恭介！」

「雄二！」

理樹と明久が叫ぶ。

「待たせたな」

「ちっ！最悪の予想が当たっちゃったようだな」

こちらに来ながら二人がそれぞれ声をかける。

雄二のはただの愚痴だったが……

「二人ともこの状況がわかってたの？」

疑問に思った理樹が尋ねた。

「ああ、高橋女史が教えてくれたんでな」

恭介が答える。

「それにしても……鉄人が召喚獣なんて、鬼に金棒どころの騒ぎじゃねーぞ」

雄二が戦っている男子を見ながらぼやく。

そこには二十人以上を同時に相手しながらかすり傷一つ負わない鉄人の召喚獣の姿があった。

「第一部隊壊滅！」

それどころかこちらを全滅させん勢いである。

「駄目だ、今やったんじゃ作戦が無意味になる」

頭をかきながら雄二が作戦を立て始める。

「予備プランは使えないな？」

「ああ、これじゃ意味がない、せめて鉄人を倒せれば……」

「鉄人をおびき出したらいいんじゃないか？」

「無理だ、女子には翔子達も居る。戻ったら力技の餌食だ」

「じゃあ、戦力を集めて……」

二人が話している間に次々と仲間がやられていくのを理樹達は呆然と見ていた。

百人以上いた男子ももはや七十人程しかない。

恭介と雄二が必死に考えてはいるが有効な作戦など思いつかない。

その時、

「せめて力を一つに出来ればいいのに」

呟いた明久の一言を恭介は聞き逃さなかった。

「吉井、今なんて言った？」

「え？ ドラゴ○ボー○の元氣玉みたいに力を一つに集められたらいいのって……」

「それだ！」

皆まで聞かず恭介が叫んでいた。

「理樹！腕輪だ」

「え？」

「お前の腕輪を使う時が来たんだ」

「ええ!？」

いきなり恭介にお前の出番だと言われて戸惑う理樹。

「でも、僕の腕輪の力は誰かと組んだ攻撃を増加させる力じゃ……」

「それは違う」

「理樹、お前の腕輪の能力は皆から点数を分けて貰い、自分の物にする力だ」

「ええ!？ 初耳だよ!」

「当たり前だ、学園長に黙っておくよう言われている」

「何で!」

「いくらなんでも強力過ぎるからだ、黙っておくつもりだったが、今このピンチをしのげるのはお前しかない、頼んだぞ理樹」

「そんな……」

余りに突然な事態に呆然とする理樹、しかし周りの声が理樹に決断させた。

「理樹お前ならやれるぜ!」

「理樹、頼んだぞ」

「直枝君、頑張って!」

「……………及ばずながら力を貸す」

「皆！ わかったよ試獣召喚！」

理樹の召喚獣が現れる。

「よっしゃお前ら、全員直枝に点数を与えろ！」

「手を繋げ、そうすれば点数が伝わる」

『『『おうっ！！』』』

全員が円陣を組み、中心の理樹に手を伸ばす。

理樹の腕輪が光り、全員から点数を受け取る。

Sクラス 直枝理樹

総合科目 78964点

「何!？」

表示された点数を見て驚愕する鉄人。

「「「いけええええ!!」」」

全員の叫びと共に理樹の召喚獣が突っ込む。

「いかせん！」

それを何と！鉄人は召喚獣との二人がかりで止めにかかる。

「させませんよ！」

しかしそこに飛び込む影があった。

「なっ！吉井貴様！？」

「もらったあ！」

明久の召喚獣の攻撃が鉄人の首筋に叩きつけられる。

「しまっ！」

理樹の召喚獣との衝突に備えていた鉄人はガード出来なかった。

コントロールするものがなくなった召喚獣を吹き飛ばすなど、理樹にとって朝飯前であった。

「よくやった理樹！」

「吉井もナイスだったな」

周りには理樹と明久を讃える声が満ちた。

「それじゃ、そろそろ行くか」

雄二が珍しく顔を綻ばせている。

「全員、心して見ろ！　これが俺達の勝ち取った栄光だ！」

雄二が女子風呂の扉を開けた。

張りのある肌。

しなやかな肢体。

腰まで伸びる長い白髪。

見知った顔でありながら、衣服に包まれて一度も見ることの出来なかった姿。

この機を逃せば二度と目にすることもないと言える、そんな――

「な、なんだいアンタたちは！？　雁首揃えて老人の裸見に来たのかい！？」

そんな学園長の艶姿。

『『『割にあわねえーっっ！！』』』

男子全員が、そのありえない光景に涙した。

「結局、犯人は誰だったのかなあ？」

「さあな、カメラもいつのまにか回収されてたし、真相は闇の中ってことになりそうだな」

「あれだけ苦労したのに……」

「そういや、なんか今朝女子が騒いでたけどありやなんだ？」

「さあ？　けど確かに騒いでたね」

「大方、カメラでも見つけたのだろう」

「ああ……」

「何となくノリでやった。今は心の底から後悔している」

とある斎藤の反省文より抜粋

「理樹の為にやった。今は筋肉ともども反省している」

とある筋肉の反省文より抜粋

「友情の為やった。今は静かに反省している」

とある素振りがまーん！反省文より抜粋

「何でこうなっただろう……」

とあるツツコミ役の反省文より抜粋

退屈な日常（前書き）

久しぶりの投稿です。

遅くなってすみませんでした。

退屈な日常

「平和だね……………」

ある日の午後、唐突に理樹が呟いた。 強化合宿も終わり、二週間が過ぎていた。

「こうやることがないとウズウズするぜ」

隣で筋トレしていた真人が答える。

「そうだな、少しは何か刺激が欲しいところだな」

それに謙吾も同意する。

強化合宿後、一週間の謹慎を命じられたためずっと寮にいたリトルバスターズ男子だが、当然大人しく寮で勉強などしているはずもなく、授業がないならばと思う存分遊んでいた。

一週間という時間を与えられた彼らはまさしく魚を得た魚の如く、思い付く限り、あらゆる遊びをしていた。 その結果、遊びのレパートリーが減り、最近少し遊びに物足りなさを感じ始めていた。

「あー、今日は何をする？」

「缶けりはどうだ？」

「それは一昨日やっただろ」

「じゃあ野球はどうだ？」

「ここは野球部が活動してるからむりだよ」

「だ〜！ やることねえじゃねえか！！」

真人が叫ぶ。

こうして、彼らの退屈な日常は過ぎていくのであった。

FIN

「って！ 終わらせるかあああああ！」

「よく言った真人」

真人が唐突に叫ぶと窓から恭介が入ってきた。

「今日この時よりバトルランキングの復活を宣言する」

そして唐突に宣言した。

「「えええええ！？」（なにいいい！？）」「」」

理樹たちの驚愕の叫びが教室に響いた。

「で？　何故今なんだよ？」

あの後、鈴達女子メンバーも交えて恭介のバトルランキング復活宣言について訪ねていた。

「ああ、この間Aクラスと試験召喚戦争をしただろ？　その時坂本に条件を出していたんだ」

「それと今回の話に関係があるの？」

「ああ、大有りだ。　少し前に野球は相手を見つけてから、バトルランキングは新しくメンバーを加えると言っただろ？」

「ああ、そういえばそんなことも言っていたな」

「だろ？　それで坂本に出した条件というのが野球の相手をする。というものだったんだが、それは人数的に難しいと言われてな、代わりにバトルランキングへの参加を条件に出したんだ」

「それで今日に？」

「文化祭やら強化合宿やらで話が延び延びになっていたがな」

「ふむ、ということは新しくランキングバトルに参加するのはFクラスの生徒だということか？」

「ああ、坂本入ってくれ」

恭介が声をかけると扉の外で待機していたのか雄二と明久、ムツツリーニに秀吉の四人が入ってきた。

「ん？　坂本、女子二人はどうした？」

入ってきた面子を見て恭介が疑問の声をあげる。

「ああ、姫路と島田なら今日は用事があるとかでこれないそうだ」

「そうか、それなら後でルールを説明しておいてくれ」

「わかった」

と、恭介と雄二が話していると、明久が口を挟んだ。

「ねえ雄二、一体これから何をするの？　何も聞いてないんだけど」

どうやら雄二は全く明久達に説明していなかったようだ。

「あー、まあ棗の話を聞いていれば分かるからおとなしく聞け」

そう言うとき雄二は近くの椅子に座り込む。

戸惑いながらも明久達もそれに習った。

「よし、じゃあ始めてくれ」

雄二に促されて恭介の説明が始まった。

「じゃあまずバトルランキングについて坂本達に説明しよう」

そう言ってまずはバトルランキング未経験者であるFクラスの四人に説明を始めた。

「バトルランキングってのは、俺たちが始めた遊びでな、初めは喧嘩の決着を着けるための方法だったんだが、面白いんで我がリトルバスターズ最強を決めるために変わったんだ」

明久達がそれを聞いて驚いていた。多分女子も参加するような遊びがもともと喧嘩の決着を着ける為の方法だったからだろう。

「それでルールを説明するとだな、……」

恭介はおおまかなルールを説明していった。

闘いは一対一で行う。

直接的な暴力は禁止。

武器は野次馬が投げ込んだ物をランダムに使用。

武器は本来の用途で使用。

女子はハンデとして床に落ちている武器も使用可能。

ランキング上位の者は下位の者から勝負を申し込まれたら必ず受けなくてはならない。

下位の者が勝負を申し込めるのはランクが2つ上の者まで。

「といったところか」

「成る程、大体は理解したが……」

そう言って雄二がチラリと見ると明久が頭から湯気を出していた。

「明久には高度過ぎたようだな」

「こいつ馬鹿だ！」

鈴が真人ですら把握できたルールを理解できない明久を見て叫んだ。

しかし、明久のことを知っている男子はその言葉に頷くしかなかった

「まあ、実際にやってみせたほうが早いだろう」

そういつて恭介が真人と謙吾に指示を出す。

二人は頷いて位置に着く。

「よし、それじゃあ、バトルスタートだ！」

最強の男児にして真人のライバル VS 憎めない筋肉馬鹿一直線

野次馬から武器が投げ込まれる。

「俺の武器はこれだ」

謙吾はモップを手に入れた。

「俺の武器はこいつだ」

真人は飴玉を手に入れた。

「つて！ なんだこりゃあああああ！？」

「バトルスタート！」

「せいっ！」

謙吾は真人の足元を払った。

真人の45のダメージ

真人は飴玉を包みから取り出した。

謙吾にNOダメージ

「ふっ！」

謙吾はモップで真人の足元を払った

真人の56ダメージ

謙吾はモップで払うコツを掴んだ

真人は飴玉を舐め続けている。

謙吾の攻撃

真人に 56、62、58ダメージ

真人は倒れた。

「とまあ、こんなもんだ」

恭介が雄二達に話しかける。

「ああ、大体理解したが……」

雄二は倒れている真人を見て尋ねた。

「本当に本来の用途でしか使ったらいけないのか？」

「ああ、本来の使用方法で戦うこと」

「成る程……」

雄二はそれを聞いて何か考えていたが、どこかへ電話をかけると明久と戦うことを告げた。

「よし！こい雄二！日頃の恨みを晴らしてやる」

「ふん、そのセリフのしつけて返してやる」

「よし、バトルスタート！」

坂本雄二（元神童であり悪鬼羅刹） VS 吉井明久（人類を超越した馬鹿）

野次馬とF F F団から武器が投げ込まれる。

「って！ なんでみんながここに！？」

「俺が呼んだのさ」

「き、貴様計ったな雄二いいいい！」

「俺の武器はこいつだ」

雄二はメリケンサックを手にいれた。

「僕の武器はこれだ」

明久はうなぎパイを手にいれた。

バトルスタート！

「くらええええ！」

明久はうなぎパイで雄二を叩いた。

「うるせえ」

雄二の反撃明久に1000のダメージ。

明久は倒れた。

「ああ、いい汗かいたぜ」

勝者坂本雄二！

「いい忘れていたが、勝者は敗者に称号をつけられるんだ」

爽快そうに汗を拭う雄二に恭介が教える。

「そうなのか？ なら……」

明久は（馬鹿宇宙代表）の称号を得た。

「うわ……容赦ないね……」

その称号を聞いて理樹が呟く。

「よし、じゃあ坂本達もルールを理解できたようだし、早速明日からさすらってくれ」

「ちょっと待って恭介、順位はどうするの？」

今にも解散を宣言しそうな恭介に慌てて理樹が尋ねる。

「ああ、そうだな。それは各自の携帯に俺が決めてメールするから皆チェックしといてくれ、では解散！」

教室に倒れる真人と明久を置いて出ていく皆

こうして、明久達を加えた新バトルランキングがスタートした。

バトルランキングランキング表

バトルランキング暫定王者 異様に賑やかな青春を送る普通の少年（直枝理樹）

2位 あらゆる日常をミッションにするリーダー（棗恭介）

3位 なかなか人に懐かない気高き仔猫（棗鈴）

4位 憎めない筋肉馬鹿一直線（井ノ原真人）

5位 最強の男児にして真人のライバル（宮沢謙吾）

6位 ちよっぴりお茶目な姉御肌（来ヶ谷唯湖）

7位 お気楽 極楽 騒がし乙女 （三枝葉留佳）

8位 ほんわりキュートなメルヘン少女 （神北小毬）

9位 えきぞちつく（自称）なマスコット （能美クドリャフカ）

10位 日傘を差した物静かな天然素材 （西園美魚）

11位 悪鬼羅刹元神童 （坂本雄二）

12位 馬鹿宇宙代表 （吉井明久）

13位 戸籍上は男 （木下秀吉）

14位 ムツツリ商会会長（土屋康太）

15位 ドイツ製胸部軽量型サイボーグ（島田美波）

16位 意外と大胆元学年次席 （姫路瑞希）

退屈な日常（後書き）

明久達の称号についてご意見おまちしています。美波と瑞希の専用武器もお願いします。

ご意見ご感想お待ちしています。

バトルランキングスタート！(前書き)

短いですけど

バトルランキングスタート！

翌日、昨日恭介からお達しがあったように、理樹達はさすらっていた。

「おい、なんか中庭で吉井達が面白いことしてるぜ」

すると野次馬らしき生徒達が走っていったので、理樹も観戦するこ
とにした。

「やるしかないみたいだね、ムッツリーニ」

「……………相手に不足なし」

馬鹿宇宙代表 吉井明久 VS ムッツリ商會會長 土屋康太

野次馬から次々と武器が投げ込まれる。

「僕の武器はこれだ！」

明久は爪切りを手に入れた。

「……………これだ」

ムツツリーニはスタンガンを手にいれた。

「え！？なにそれ！？」

「バトルスタート！」

「くそ、こうなったらやってやる」

明久はムツツリーニの爪を切った。 深爪

ムツツリーニに45ダメージ。

「……いく」

ムツツリーニはスタンガンを明久に押し付けようとした。

しかし明久は必死に交わした。

明久の攻撃

爪切りでムツツリーニの爪を切ろうとした。

しかしムツツリーニはひらりと交わした。

ムツツリーニの攻撃

スタンガンを押し付けた。

明久に200ダメージ。

明久は麻痺して、連続して攻撃できなくなった。

「……………コツをつかんだ」

ムツツリーニはスタンガンの使い方をマスターした。

明久の攻撃

ムツツリーニの爪を切った。

ムツツリーニに48ダメージ

「よし、コツを掴んだぞ」

明久は爪切りの使い方をマスターした。

ムツツリーニの攻撃

明久にスタンガンを押し付けた。

明久に200!999ダメージ!

「うわあああああ!」

明久は倒れた。

ムツツリーニの勝利！

明久は 本当はアキちゃん の称号を得た。

「今度はFクラス前の廊下だー！」

今度はFクラスで戦闘が始まるようだ。

自分から挑むことが出来ない理樹はこれも見ることにした。

悪鬼羅刹にして元神童 坂本雄二 VS 戸籍上は男 木

下秀吉

野次馬から武器が投げ込まれる。

「俺の武器はこいつだ」

雄二は箒を手にいれた。

「わしの武器はこれじゃ」

秀吉はチャイナ服を手にいれた。

「な、なんじゃこれは！」

「バトルスタート！」

雄二の攻撃

箒で掃いた。

秀吉に35ダメージ。

秀吉の攻撃

秀吉はチャイナ服に着替えようとしている。

男子が総立ちになった。

雄二の攻撃

秀吉に34ダメージ。

秀吉はチャイナ服に着替えようとしている。

雄二の攻撃

秀吉に35ダメージ。

「コツを掴んだぜ」

雄二は箒で掃くコツを掴んだ。

秀吉はきわどいところまで服を脱いだ。

ムツツリーニが現れた。

理樹が鈴達に体をつねられた。

翔子が雄二にアイアンクローをかました。

雄二に9999ダメージ。

雄二は倒れた。

ムツツリーニは血の海に沈んだ。

秀吉の勝利！

「こんなのはどうか？」

雄二は いつかは婿入り の称号を得た。

もう昼休みも終わりなので、続きは放課後にすることにした。

放課後、さすらっていると島田さん達がバトルしていた。

「美波ちゃん勝負です！」

「いくわよ瑞希！」

意外と大胆元学年次席 姫路瑞希VS ドイツ製胸部軽量型サ
イボーグ 島田美波

野次馬から武器が投げ込まれる。

「私の武器はこれです！」

瑞希は自作クツキーを手にいれた。

「あれ？　今朝明久君に渡したはずなのに……」

「うちの武器はこれね」

美波はメジャーを手にいれた。

「バトルスタート！」

「えい！」

瑞希はクッキーで美波を叩いた。

ミス！　ダメージを与えられない。

「よくわからないけど」

美波は瑞希のウエストを測った。

瑞希に56ダメージ！

「えいっ！」

瑞希はクッキーで美波を叩いた。

クッキーが砕けた。

「いくわよ！」

美波は瑞希の胸囲を測った。

瑞希に67ダメージ！

美波の精神に999ダメージ！

美波は倒れた。

勝者姫路瑞希！

「えっと、こんなのはどうでしょう？」

美波は スレンダー美人の称号を手にいれた。

「……瑞希、悪意のない善意って時に残酷なものよ」

美波に追加攻撃！

999ダメージを受けた。

御愁傷様としか思えない理樹だった。

こうして、バトルランキング初日はFクラス同士のバトルで幕をおろした。

「……………理樹、俺たちの影が薄くないか？」

「多分次は濃くなるよ」

「……………だといいな」

バトルランキングスタート！ (後書き)

ご意見感想お待ちしております。

試験召喚戦争開始!?(前書き)

短いですが投稿です。

次は長くなるのでご容赦ください。

試験召喚戦争開始!?

side 理樹

バトルランキングがスタートして一週間が過ぎた。

初めは戸惑っていた一般生徒も今は娯楽として受け入れているようだ。

「しかし、この学校もだけど随分とノリがいいよね」

普通ならドン引きされるか、教師に捕まると思う。

「まあ、教師に関してはこれまでの騒ぎを見てきた限りじゃこの程度ならって黙認してるみたいだぜ」

隣にいた恭介が答える。

「そうなの?」

意外だったので尋ねかえす。

「ああ、特に鉄人なんかあの吉井や坂本をよくおとなしくしてくれただなんて感謝されたくらいだぜ」

「え!?

どうしてそうなるの?

むしろ騒がしてるほうじゃ」

「いや、ここだけの話だが坂本達が1学期の今までに書いた反省文

は百枚を越えるらしい」

「ええ!？」

それってすごくない!？」

単純計算すると……1日一枚ペースだ。

「ま、まあ感謝されたなら良かったじゃない、もとの世界じゃ二木さんに怒られてばかりだったんだから」

「そうだな、よし! 理樹飯にしようぜ!」

と、恭介に言われて時計を見ると昼休みはすでに半分が過ぎようとしている。

「待ってよ恭介!」

昼食を食べそこねないように理樹は急いで恭介を追った。

「やははー、はるちんニュースですヨ!」

昼休みが終わり、掃除をしていると、三枝さんが教室に飛び込んできくるなり叫んだ。

「んだよ三枝、そんなニュースはどうでもいいから早く掃除をしがれ」

「ふむ、真人少年の言う通りだな、葉留佳君、早く掃除をしたまえ」

「いや、そう言う来ヶ谷さんも掃除しようよ」

理樹のツツコミ意外はすべて葉留佳を非難するものだった。

「うわっ！ 開口一番鬼ヒド！」

「まあまあ、三枝のニュースとやらを聞こうじゃないか。どうせもう掃除は終わりだ」

「おー、流石ミスターキョースケ！ 話が分かりますね！」

「いいから早く話せ」

話を聞いていたのか鈴が先を促した。

「いやー、それがFクラスとDクラスが試験召喚戦争をするみたいなんですヨ！」

「なに！？ それは本当か三枝！？」

「イエス！ 近くにいたDクラスの女子に聞いたから間違いないデスよ！」

「なるほど……それが本当なら妙だな」

「妙？　どういうことだ？」

呟いた恭介に謙語が尋ねる。

「ああ、Fクラスは俺達と同様Aクラス戦で敗北しているから自分たちから仕掛けることは出来ないんだ」

「成る程、つまり攻めてこないうえ勝っても何も手に入らないFクラスにDクラスが宣戦布告したということか」

成る程と来ヶ谷が頷く。

今の説明で大体皆理解出来たようだ。

「よし、それなら」

その先恭介が何と言おうとしたのかは分からない。

ガラッ！

突然扉が開いて入ってきた生徒がこう宣言したからだ。

「我々BクラスはSクラスに対し試召戦争を申し込む！」

「ハアアアア（なにいいいい）！！」

理樹達の驚愕の叫びが響き渡った。

試験召喚戦争開始!?(後書き)

ご意見ご感想お待ちしております。

Bクラス戦スタート!! (前書き)

すいません本当にすいません長くするとかほざきながら短いですが、
本当は最後まで書くつもりだったんですが、途中で自分でもわからなくなつて、途中でカットしてあります。

Bクラス戦スタート!!

Bクラスの使者が宣戦布告を行って去っていくと、全員が一斉に恭介を見た。

「恭介、どうする?」

「どうもこうも相手するしかないだろう、お前ら点数を消耗している奴はいるか?」

全員が首をふる。

「そうか、なら理樹、坂本と連絡を取ってくれ」

「いいけど、どうして坂本君なの?」

「なにやら今回のBクラスとDクラスの宣戦布告はなにやら関係がある気がするな」

「ふむ、勘か」

「なるほど、恭介の勘は当たるからな、それで?俺達はどうするんだ?」

謙語が尋ねる

「基本的に専守防衛だ、だから多人数を相手するのに向いている、来ヶ谷と鈴、長期戦に有利な神北に前線に出て貰う」

「分かった」

「オッケーですよ」

「了解した」

「とにかく三人は時間を稼いでくれ、謙語と理樹は遊撃隊だ、鈴達のフォローをしてくれ、真人は俺と来い」

「わかったよ」

「承知」

「おうっ」

「残りの三枝、能美、西園の三人は教室で待機しておいてくれ、追って指示をだす」

「……わかりました」

「わふー、了解なのです」

「了解ですよ」

「よし、試験召喚戦争とはいえ、これも立派なミッションだ全員遅れるな!!」

「ミッションスタート!!」

こうして試験召喚戦争の幕が切って落とされた。

「いたわ！ Sクラスよ！」

「長谷川先生！召喚許可を！」

「「試験召喚！」」

Bクラス岩下律子 & 菊入真由美 VS Sクラス 来
ケ谷唯湖

数学 183点 & 169点 VS
683点

「おねーさんに膝まずけ！！」

「「きゃあああーっ！」」

来ケ谷の召喚獣が消えたと錯覚するほどのスピードで接近、刀で一

撃で切り捨てた。

かと思いきや

「ああ……そういえばそうだったね」

二体はチアガールの衣装を着ていた。

「り、律子！　これって！」

「あの時の！？」

あつ、そういえば前回もあの二人が犠牲者だったけ。

「思い出せない者はBクラス戦！を読みなおしてくれたまえ」

「来ヶ谷さん、そういう発言はやめてよ」

フォローが大変だから

「さあ来たまえ、今回は少女達によるチア軍団を作らせてもらおう」

「来ヶ谷さん、よだれよだれ」

「おっと」

よだれを拭う来ヶ谷さん。　　なんて言うか……煩惱全開だ。

「くっ、数学は男子が当たれ、女子は英語に向かえ！」

相手の指揮官らしき男の声が聞こえる、前回一度戦った相手だけあって対応が早い。

「謙語！ 来ヶ谷さんの援護に行つて！」

「承知！」

自分に向かって来るのが野郎ばかりになったら来ヶ谷さんがやる気を失うのは目に見えている。

「小毬さん、鈴、行くよ！」

「「試獣召喚！」」

Sクラス 直枝理樹 & 神北小毬 & 棗鈴
VS Bクラス 女子×8

英語 283点 & 423点 & 243点
VS 平均160×8

「やっぱり英語はちょっと厳しいな」

いくら二回目の二年生とはいえ、英語は単純に語学力が問われるだ

けあって点数はあまり高くなかった。

「けど……やるしかないんだ！」

小毬が腕輪を発動、幸せスパイラルの効果に相手が戸惑っている隙に理樹は相手の点数を削る。

「鈴、なるべく小毬さんをサポートするようにうごいて！」

「（こくり）」

鈴は承諾の返事をする、横から小毬を攻撃しようとしていた相手に召喚獣を向かわせた。

慌てて相手が鈴のほうに向き直る。

小毬の腕輪は強力で、相手の得点を吸収することで腕輪の発動にかかる点数の消耗を押さえているが、腕輪発動中は無防備で攻撃も防御もできないという欠点があった。

ともかくこの場を凌げるのは小毬の腕輪だけなので、理樹達は最大限サポートに徹していた。

side 恭介

「それで？ 一体今回の宣戦布告は何が目的なんだ？」

「ああ、どうやら試召戦争での敗北や覗き騒ぎのせいで発言力が落ちた根元が、発言力を戻す為に覗きの主犯であるFクラスを成敗するという名目で俺達に宣戦布告するつもりだったんだが…」

「わしらはそれを避けるためにDクラスから宣戦布告されるよう仕向けての」

「それで、宣戦布告先をなくしたBクラスがうちに宣戦布告してきたというわけか」

「そういうことだ」

「成る程、これは和平交渉じゃ終わらないな、終わらせるには相手を倒すしかないか」

「こいつは面倒なことになりそうだぜ……」

恭介のぼやきが響いた。

教室に戻ると恭介は待機していた三人に指示を出した。

「短期決戦でいく、真人、理樹に伝えろ。 次の攻撃を退けたら
こちらに合流すべし、とな」

「おうっ！」

返事をして真人が真人が走っていく。

「三枝、今から指示する場所に罠を仕掛けてくれ」

「アイアイサー」

「西園、お前は囿役を頼む、」

「……了解です」

「能美、お前は俺についてこい」

「ラジャーなのです！」

「よし……見ているBクラス、我がリトルバスターズの力を見せて
やるぜ」

Bクラス戦スタート!! (後書き)

ご意見感想お待ちしております

決着（前書き）

遅くなりました

決着

「伝令！ 恭介さんからの指示ですヨ！」

前線で戦う理樹達の元に葉留佳が伝言を持ってきた。

「なんだった？」

「敵部隊を一旦退けたのち後退せよ。だそうです」

「わかった、了解したと伝えて」

「アイアイサー」

そう返事をして葉留佳は立ち去る。

「皆、今の指示聞こえた？」

葉留佳が立ち去ると、理樹は矢継ぎ早に指示を出し始めた。

「聞こえた」

「うん」

「ああ」

「聞こえたぞ理樹」

全員が返事をする。

「よし、なら謙語と来ヶ谷さんはそのまま戦線を維持しながら後退して」

「うむ、わかった」

「承知」

「鈴！ 科目を切り替えるよ！ 小毬さんは下がって！」

「うん、OKですよ」

「わかった、いいぞ理樹」

「よし！ 山川先生、お願いします」

理樹に頼まれて、遠藤先生がフィールドを消し、代わりに山川先生がフィールドを展開する。

敵味方双方が召喚獣を呼び直す。

「」「」「試獣召喚！」「」「」

科目は……………

Sクラス 棗鈴 & 直枝理樹 VS
Bクラス生徒×5

生物 456点 & 387点 VS
160点×5

生物は教科書に載っていた西表山猫の写真を見て以来、鈴の得意科目の1つだ。

「こいつ！ お前ら！」

鈴の声で腕輪が発動、どこからともなく猫達が現れる。

「行けっ！」

そして鈴の号令とともに猫達は相手に襲い掛かった。

「うわっ！」

「くそっ！ ただの猫なのに」

相手は猫達相手に非常に苦戦していた、しかしそれは当然だろう、何せその猫達は強化合宿の時、真人と謙語を押さえているのだから。

「そろそろ終わりだ！」

「「「にゃー！！」」」

鈴の声で猫達は止めを刺しにかかる。

Sクラス

棗鈴

&

直枝理樹

V S

Bクラス×5

生物

412点

&

386点

V

S

0点

「戦死者は補習ー！！！」

戦死したBクラスの生徒達を鉄人が連れて行く。

「鈴、小毬さん、今のうちに謙語達に合流するよ」

「わかった」

「うん」

二人から承諾の返事を聞くと、理樹は謙語達と合流すべく走り出した

☆

「やはー、恭介さんちゃんと理樹君達には伝えてきましたヨ」

「そうか、頼んでいた罫はどうだ？」

「そっちも仕掛け終わりましたヨ」

「よし、真人、能美、西園、理樹達が戻ってきたら作戦開始だ、頼むぞ」

「……はい」

「わふー！」

二人が返事をする。

恭介の作戦が始まろうとしていた。

「おい！ 前線部隊がないぞ！」

「Sクラスはどこだ？」

「Sクラスが退いたぞ！」

「よし！ 一気に押し込め！」

理樹達が教室まで戻ってくると廊下の奥からそんな声が聞こえてきた。

「僕たちがいないことに気がついたみたいだね」

Bクラスの前線部隊は全滅させたため、悠々と引き揚げた理樹達だったが、どうやら敵が理樹達がいらないことに気がついたようだ。

「よう理樹、ご苦労さん」

教室の戻ると恭介が手をあげて迎えてくれた。

「うん、ただいま。 ところで今からどうするの？」

前線部隊がいらないから敵が押し寄せてくるのに多少時間がかかるだろうけど、それでもすぐに押し寄せてくるだろう。

「ああ、それを今から説明する、時間がないから全員よく聞け」

そういつて恭介が作戦を明かす。

「……という作戦だ。 理樹、頼んだぜ」

「わかった、やってみるよ」

「よし！ よく言った。 皆もいいな？」

「」「おう！（ああ）承知！わふー！」「」「」

全員が一斉に返事をする。

「よし、全員気合いをいれろ！」

ミッションスタート!!

☆

side 恭介

「いたぞ! Sクラスだ!」

「代表の棗も教室にいるはずだ!」

「一気に攻め落とせ!」

理達が出ていった後、俺は真人と謙語と共にSクラスの教室にいた。

「よし! 予想通り敵の主力はこちらにきたな」

思惑通りBクラスは主力をもってこちらの本丸であるSクラスに攻めこんで来た。

まあ、クラス代表である俺を倒せば勝ちなのだから当然の判断だな

だが、それはあだとなる。

「真人、謙語、頼むぞ！」

「おう！ 試獣召喚！！」

二人が押し寄せるBクラス相手に召喚を開始する。

Sクラス 井ノ原真人 & 宮沢謙語 VS

Bクラス×10

保健体育 623点 & 245点 VS

160点×10

流石に厳しい、この人数差では五分持てばいいだろう、しかも敵は後ろには無傷の十人が控えている。 どうあがいても俺たちに勝ち目はない、だが、これだけの戦力を放出した今、Bクラス本陣は手薄となっているはずだ！

☆

Bクラス戦途中経過

Bクラス	戦死	13名	補給中7名	主隊20名
近衛部隊	10名			

side 恭介

戦闘開始から二分、流石に押されはじめたところに待望の知らせが来た。

「伝令！ 本陣がSクラスの主隊に攻められている！」

どうやら遠回りさせた理樹達がBクラスに攻めこんだらしい

「くっ！ 本隊から十人が援護の戻れ！」

それを聞いて相手が本陣に援軍を出そうとする。

しかしそれはできない！

「西園！ 能美！」

「……ここから先へは行かせません。 試獣召喚」

「わふー！ 了解なのです！ 試獣召喚！」

Bクラスへの道を西園と能美が塞ぐ。

「くっ敵か！ならば遠回りでもいい反対から行け！」

それならばと相手の指揮官らしき生徒が指示をだすがそれは無理だ！

「うわっ!?!」

どこからともなく転がってきたビー玉に足をとられ転倒する生徒達、
またあるものはトリモチに引っ掛かたりしていた。

「なっ、何!?!」

驚愕する相手

「やははー、ここははるちんが通さないのですヨ」

そこには事前に仕掛けた罠と共に待機させた三枝がいる。

「くっ、くそ！」

八方塞がりの相手は当然俺を討ち取ろうとするが動揺した敵は動き

に精彩を欠いていた。

それに万が一の時は俺が窓から脱出する寸法だ。

しかしそろそろ限界だ。早くか頼むぜ理樹！

☆

side 理樹

「よし！ みんな行くよ！」

僕は鈴、小毬さん、来ヶ谷さんをつれてBクラスに向かっていった。

恭介達が教室で敵を引き付け、退路を塞ぎ教室に戻れないようにする試験召喚戦争中は代表の居場所は常に明らかにしないといけないというルールがある。

だから必ず相手は引っ掛かるはずだった。

「よし！ みんな行くよ！」

理樹達はBクラスに乗り込んだ。

「Sクラス直枝理樹です！ Bクラス代表に召喚勝負を……」

「Bクラス山本が受けます！ 試験召喚！」

「くっ！ 近衛部隊！」

Bクラスに入ると近衛部隊に囲まれてしまった。 しかしこれも計算通り！

「今だよ！ 鈴！ 来ヶ谷さん！」

「りょーかいだ理樹」

「おねーさんに任せておけ！」

理樹がいるのは教室の前の入口、そこに後ろから鈴と来ヶ谷が入る

「Sクラス来ヶ谷唯湖だ、Bクラス根本恭二に試験召喚勝負をー」

「Bクラス芳野が受けます！ 試験召喚！」

「むっ！」

しかし相手が立ち塞がった、何故！？

「補給中の連中か……」

来ヶ谷さんが忌々しそうに吐き捨てる。

そうか、補給中だった人達が立ち塞がったのか、

「ふははっ！ お前らの作戦は失敗だな！おい！ 誰か行って
本隊の連中を呼び戻してこい！」

相手の確か根本君が勝ち誇るが、まだ甘い！

相手の伝令が去った後、廊下で待機していた小毬さん呼び込む！

「はい！ Sクラス神北小毬でず、Sクラス根本君に試験召喚
勝負を申込みます 試験召喚！」

隠し球として待機させておいた小毬さんを投入する、さらにだめ押しがきた。

最初に教室に入った時に鈴にあけておくよう指示した窓から恭介が飛び込んでくる。

「なっ、何故！？」

相手も驚愕している、それは当然だろう、なにせ教室にいたはずの恭介がここにいるのだから、しかもロープのたぐいは見当たらないのだから

しかしこうなったらもう逃げられない、

「Sクラス代表 棗恭介、Bクラス代表根本恭二に試験召喚勝を申し込む！ 試験召喚！」

Sクラス 棗恭介

VS

Bクラス 根本恭二

総合科目 5463点

VS

1998点

恭介の召喚獣が根本君の召喚獣を吹き飛ばす！

ここにBクラス戦は終了した。

さて、さいご恭介がどのように飛び込んできたか、気付いている人も多いだろうが種明かしをしよう

side 恭介

「ちっ、そろそろ真人も謙語も厳しいな！　三枝！」

「アイアイサー！」

はるちんが二人に替わって召喚勝負を

申込みますよ！

試験召喚！」

全く試験召喚勝負に参加していなかった三枝に真人と謙語の代わりに勝負を申し込ませる、一分ともたないだろうが……それで充分だ！

「こい！　真人、謙語！」

そういつて窓から飛び降りる。

当然この二人だ、易々とついてくる。

したに降りた俺はBクラス教室したまで移動する。

「よし！　真人、謙語、頼むぞ！」

「承知！」

「へっ！　筋肉に任せな！」

二人が組んだ腕に乗る、いつか鈴にやらせた人間ロケットだ

「いくぞおおお！」

「うおおおおお!!」

二人が一気に腕をはねあげる、それにあわせて俺も飛んだ!

決着（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

戦後処理と明らかになる黒幕（前書き）

遅くなりました。 しかしやっと復活です。

これから週一で更新するのでよろしくお願いします。

戦後処理と明らかになる黒幕

「では、戦後処理といこうかBクラス諸君？」

あのあと、根本君を倒した僕たちは施設の交換を行わないといけないのでそのまま残っていたのだけど……

「根本ふざけんなよてめえ！」

「なにが今回はSクラスに勝てるだ！」

「ぜんぜん、勝てないじゃねえか！」

「今回設備が落ちた責任どうとるつもりだよ！」

相手の代表である根本くんには非難が集中していた。

それもそうか、もともと相当嫌われてたうえに今回発言力を取り戻すためだけに自らSクラスに宣戦布告した結果が施設のランクダウンとくれば黙って要られないだろう。

「こりゃ話にならないな、とにかく明日設備交換を行う、それだけだ！　よし、帰るぞ理樹」

「あ、うん……」

話すことを諦めた恭介とともに僕らは教室に引き返した。

けど、どうして根本くんは僕らに宣戦布告したんだろう？

去り際にふと疑問が湧いたが特に考えることもなく理樹はBクラスを去った。

「……………まったく、使えないわね……」

それを影で見ながら舌打ちしている影には気づかず。

「よし、みんな、ご苦労だった。とりあえず、今日の勝利を祝って、簡単だがパーティーを開こうと思う。場所は寮の食堂！ 全員準備にかかれ！」

「おおーっ！！」「」「」

「」「」

教室に戻ると恭介は全員の労をねぎらう言葉もそこにパーティーの開始を宣言した。

前と違って現在の寮はリトルバスターズ貸し切りと言ってよい状況なので騒ぎやすい環境であるから理樹も反対はしない。

これは自分達らしいかな？ と思いながら頭に浮かんでいた疑問を無理に吹き消した。

……それが重要な情報であることも忘れて

「おう、理樹。飾りつけを創るから手伝ってくれ」

「うん、わかった。いいよ」

「さて、真人、理樹。男子は買い出しだ」

「なんだ、何を買いにいくんだ？」

「まあ、それはジュースとかお菓子とかだ。 女子でなにかリクエストがあるなら言ってくれ」

「うーん、じゃあクッキーがいいかな」

「わふー！ ジャパニーズスイーツ！ 羊羹がいいです！」

「うーん、なら葉留ちゃんはポッキーかな？」

「モンペチだ」

「ふむ、ならもずくとキムチを頼む」

「……特にないです」

「よしわかった。後半以外はちゃんと買ってこよう」

恭介がそう返事したあと、僕たちは寮を出た。

鈴……せめて人間が食べられるものにしようよ……

寮を出てしばらく歩いていると、Fクラスの人達の姿が見えた。

「お？ 坂本達じゃねえか？ おーい！」

気づいた恭介が声をかける、こちらに気づいたのだろう、四人が立ち止まった。

「おお、棗達じゃねえか、聞いたぜ、そっちも勝ったそうじゃねえか」

「おう、そういうお前達も勝ったのか？」

確かまだFクラスとDクラスは試召戦争の途中だったはずだ。

「ああ、明久の尊い犠牲で和平交渉に持ち込んだ」

……明久君になにがあったんだろう

「そうか、よかったな、おっとそうだ、俺たちは今から今日の勝利を祝してパーティーを開くんだがお前達もどうだ？」

「へ？ いいの」

「ああ、人数が多いほうが楽しいしな」

「迷惑にならない？」

「大丈夫、寮でやるから門限も気にしないでいいし、周りに迷惑もかからないから」

「遅くなるのが心配なら泊まっちゃえばいい、部屋はいくつかあいてるぜ」

「ふむ、そういうことなら行かせてもらおうかの」

「………撮影のチャンス」

「俺も行くか」

「なら僕もいくよ」

「よし、全員参加だな。 ならこれから買い出しをするから手伝ってくれないか？」

「いいよ、招待される身だからそれくらい手伝うよ」

「ああ」

「雄二がね（明久がな）」

「……………っつ！（ゲシゲシ!）」

坂本君と明久君が無言で互いを蹴りあつてた。

「まったくお主らは……すまんの、ほれ行くぞ、雄二に明久よ」

「しょうがない、秀吉に免じて許してやるよ」

「そりゃ、こっちの台詞だ」

……とりあえず、人数も集まった。

そして、途中坂本君がアイアンクローをうけて沈んだり、明久君の関節が外されたり、土屋君が血の海に沈んだり、覆面の集団においかけられながらも、無事？ 買い出しを終えた僕らは、寮の食堂でグラスを掲げていた。

「さあ、リトルバスターズ、及びFクラスの勝利を祝って」

「「「「カンパーイ！」

！
「」「」

「さあ、今日は無礼講だ。 食べ食べ！」

「おっ！ このフライドチキン美味しいな！」

「このパエリアも行けるのう」

「このアメリカンクラブサンド、かなりいけるぜ！」

「このゴマ団子、熱々で美味しいよ、表面はカリカリ、で中はもち
っとしてて」

「へえ、確かに」

「ふむ、確かに美味しいな」

「へえ、どれどれ？」

全員でワイワイと食べてみる。

「あ、ホントだ美味しい」

「わふゝ、べりゝべりゝデリシヤスなのです！」

「おお、はるちんこのパエリア気に入った！」

「ふむ、これは誰が作ったんだ」

「フライドチキンは俺と理樹が」 恭介& a m p; 理樹

「パエリアは僕だよ」 明久

「アメリカンクラブサンドは俺だ」 雄二

「…………ゴマ団子は俺」 ムツツリーニ

「俺はそれを試食したぜ！」 真人

「お前は関係ないだろボケー！」

「がはっ！」

なぜか意味なく宣言した真人に鈴が蹴りをいれるが……

「ふむ、謙吾少年と真人少年を除く男子全員とは…………」

「ふええ…………私自信なくしちゃったよ」

「ショックです！ わふー！！」

「…………直枝さんや、吉井さん、それに土屋さんもありなのですが恭介さんと、坂本さんは…………美しくないです」

「やはは、これは流石にねえ…………」

「お前ら女みたいだな」

全員がそれぞれ呟くが鈴が的確にそれらの総意を言っただけだ。

っ！」「」「」

「」「」「ぐ

全員がダメージを受ける。

「明久はまだしもどうして俺まで……」

「理樹はともかく俺までそういわれるとは……」

「秀吉を差し置いて女みたいだなんて……」

「……屈辱的」

「「ちょっとまって！（待つじゃ！）どうして僕らは（わしらは）肯定されてるの！？（おるのじゃ！？）」」

「まあ、理樹だからな」

「秀吉だからね」

その発言を聞いて全員が一斉に頷く。

「「理不尽だ！？（じゃ！？）」」

理樹と秀吉の叫びが空しく響いた。

そんなハプニングを挟みながらも夜は更けていった。

翌日

「……雄二、妻への隠し事は浮気の始まり」

「待て、翔子！　落ちつ……ギャアアアア！」

「明久くん？　覚悟は出来てますか？」

「アキ！　ちよ……と話しましょう？」

「誰か助け……イヤアアアア！」

Fクラスメンバーがいつも通りの展開を迎えていると……

を申し込む!』

『我々CクラスはFクラスに試召戦争

「「「「「……は?」」」」」

凶報が飛び込んだ。

一方Sクラス

「FクラスがCクラスに宣戦布告された?」

「うん、さっきムツツリーニ、じゃなくて土屋君がやって来て教えてくれたよ」

「そうか、そいつは大変だな……」

「なんだ? 助けねーのか恭介?」

「いや、助けたいのは山々なんだが、あの2クラス合同作戦っていうのは俺たちより上位クラス相手にしか使えないんだ」

「はっ? どういうことだ?」

「つまり真人、いままでの序列だと上からA B C D & S E
Fの順番だったから僕らはA B Cクラス相手なら合同作
戦ができたけど、昨日Bクラスに勝って設備交換を行うことにした
から今の序列はA S C B & D E Fクラスの順番なんだよ」

「えーと、つまりどういうことだ？」

「この筋肉馬鹿が、つまり今俺たちがFクラスと合同作戦を張れる
のはAクラス戦だけだということだ」

「そういうことか、 って！ ならFクラスの奴等助けてやれ
ないじゃねえか！」

「だからおとなしくみてるしかないんだよ！」

「しかし妙だな、このタイミングでCクラスがFクラスに攻めこむ
なんて……」

「そうか？ さっき言ったとおり俺たちが助けられなくなったか
ら攻めたんじゃないの？」

「それはそうだが、勝っても得られるものはない、なにがしたいの
か……」

「あっ!？」

恭介の呟きを聞いて理樹は思い出した。

不自然なBクラスの宣戦布告、そして今日のFクラスとCクラス

の試験召喚戦争。

全てが繋がった。

「恭介！」

「ん？ どうした理樹？」

「今回の戦争の黒幕はCクラスだよ！」

「なに？」

「昨日のBクラスの試験召喚戦争もCクラスの隠謀だったんだ！」

「どういうことだ？ 説明しろ理樹？」

「うん、確証はないけど今日の状況はあまりにCクラスに有利過ぎる都合が良すぎるんだよ」

そういつて理樹は説明を始めた。

「いい？ まずおそらくだけどCクラスがFクラスに攻めこんだ理由は後顧の憂いを断つためだと思う」

「ん？ なんでだ？」

「一学期、FクラスはDクラスやBクラスを利用してAクラスに挑んだでしょ？」

「ああ」

「つまりもうすぐ三ヶ月たってFクラスの準備期間が解除されるから自分達が攻められるのを恐れたんだと思う」

「なるほど、筋は通るな」

「そしてBクラスが僕たちに試験召喚戦争を挑んできたときに違和感を覚えたんだ」

「む？」

「だってそうでしょ？ 覗き騒ぎですっかり点数を失ってたFクラスならともかく全員回復して準備万端だった僕たちに宣戦布告するなんて、主導権を戻したいなら、別に僕らじゃなくてもいいですよ？」

「むっ、確かにそうだが……」

「それだけでたぶんCクラスから僕たちを攻めるよう要請が入ったんだよ」

「けどよ理樹どうして俺らなんだ？」

「考えてもみてよ、Bクラスを倒せる力をもつ僕らを放置しておいたら前々回のBクラス戦みたいにFクラスと組んで自分達を攻めてくるかもしれないじゃない」

「なるほど、だからとにかくBクラスに俺らを攻めさせた訳か」

「うん、そうすれば僕らが負ければ三ヶ月は試験召喚戦争ができな

いし、もし僕らが勝ってもその場合Cクラスよりランクは上になるからどちらにせよFクラスと共同作戦はとれない」

「つまり、どちらに転ぼうとCクラスには都合がよかったというわけか……」

「そうだね、でもたぶんBクラスが僕らに負けるのは予測してなかったみたいだよ」

「なに？」

「Cクラスの狙いは恐らくBクラスだからね」

「？ それとBクラスの敗北がどう関係するんだ？」

「だって、CクラスはBクラスの設備を狙ってたんだよ？」

「つまりDクラス並の設備になったBクラスを倒す意味はなくなっただと？ つまり狙われるのは俺たちというわけか」

「うん、でもそうするとCクラスは動きにくいんだ」

「動きにくい？ なぜだ？」

「だって負けたBクラスは設備を回復しようといまままだ以上に成績を上げて挑んでくるでしょう？ 今仮に僕らを倒しても、三ヶ月後にはまたBクラスに取り戻される可能性が高いでしょ？」

「なーる、だから……」

「うん、状況を見極めるためにとりあえずFクラスを封じに動いたんだよ」

「ということはしばらくはこれが終われば平和になるということか」

「そういうことかな」

「まあ、とりあえず気は抜くなってことだ、それより修学旅行だ！テンション上がるぜ！」

「一件落着かな？」

そう思った理樹だが翌日思わぬ知らせが入った、FクラスがBクラスを破ったのである。

試験召喚戦争の前に……（前書き）

早めの投稿です

試験召喚戦争の前に……

CクラスがFクラスに敗れる！

この知らせはその日のうちに風のように広がった。

ただ今回の試験召喚戦争でCクラス代表の小山さんが3ーAの代表の高城さんや、小暮という先輩達の知恵を借りていたことが判明、作戦を流石に他学年、しかも先輩に立ててもらうのはテストを用いた戦争では流石にカンニングに近いということで今後一切禁止になった。（戦争前ならそうならなかっただろうが戦争中もアドバイスを受けていたから）

それで安心したのかFクラスが早速打倒Aクラスのために動いたようにEクラスと試験召喚戦争を行い設備を交換したところで……一端戦争は中止となった。

連絡事項

一週間後の修学旅行までの間、試験召喚戦争およびそれに類する行動の一切を禁ずる。

藤堂カヲル

文月学園学園長

サイドFクラス

「「ババアーっっ!!」」

学園長室の扉を開け放ち、雄二と明久は同時に叫んだ。

「なんだいクソジャリども。朝っぱらからうるさいねえ」

「うるさいねえ、じゃないですよババア長!」

耳を押さえて顔をしかめる学園長に、明久と雄二はつかみかからんばかりの勢いで詰め寄った。

折角昨日一昨日とCクラス、Eクラスと連勝、いよいよAクラスと意気込んでいたのに……今日学校に来たらこの通知、怒鳴りこみたくなる気持ちもわかる。

「どうしてこのタイミングで中止なんですか、別に試験召喚戦争をしようが修学旅行と関係ないじゃないですか!」

「そうだ! 大方調整に失敗したんだろう、とつとと直せババア

「！」

「そうは言ってもこれは決まったことだからねえ、それに試験召喚システムは至って正常だよ、残念だったねクソジャリ」

「ならどうして!?!」

「それはあんたらが立て続けに試験召喚戦争なんてするからだよ」

「なに?」

「設備交換を頻繁に行うせいでこっちも調整が大変なのさ」

「ちっ!　　そういうことか」

「え?　　なにどういうこと?」

「わからないジャリだねえ、うちはクラス毎に設備に差を設けている、当然のように修学旅行も例外じゃないのさ」

「えっと、つまり修学旅行前に設備交換がしょっちゅう行われるからその調整が大変になったってこと?」

「そういうとき、一応行き先は同じだけど、細かい調整は必要なのさ」

「それでこれ以上設備交換が発生しないように修学旅行終了まで試験召喚戦争を禁止したわけか」

「そういうとき、とはいえこちらの都合で試験召喚戦争をやめさ

せたんだ、修学旅行については少し色をつけてやるさね」

「ふん、そういうことならよしとするか、明久、帰るぞ」

「え？ あ、うん。失礼しますババア長」

そうして明久達は教室を後にした。

「でも雄二、どうしてあんな簡単に引いたのさ」

「ふん、そりゃあ、事情を考慮すりゃあ今回の件も覆らないだろうというのがわかったからな、下手にババアの機嫌を損ねるより、素直に引いたほうがいいと思ったただけだ」

「ふーん、そういえば色をつけるってどういうこと？」

「ん？ ああ、たぶん修学旅行のグレードのことだろう、おそらくCクラス相当の待遇を受けれるはずだぞ」

「へ？ どうしてそんなことがわかるのさ？」

「はあ、少しは頭を使え、俺たちの設備はF↓C↓Dになってるだろ、それで今おそらくD相当のグレードに変えなきゃいかんから慌てるんだろうな」

「どうして慌てるのさ？」

「おまえ、一昨日にCに替えるようにいった矢先に次はDに変えなきゃいけないんだぞ、流石に大変だろ」

「ああ、なるほど」

「やっとわかったか、つまりFからCにした矢先にDにするのは大変だからCのままにするんだよそれがババアの言っていた色をつけるって意味だ」

「だから大人しく引き下がったんだ」

「ああ、ババアがへそを曲げて無理矢理Dにされるよりいいだろ？」

「へえ、意外とこういうことに関しては雄二も頭が回るね」

「抜かせ」

そういうながら二人はFクラスに戻った。

サイドリトルバスターズ

「諸君！ ついに待ちに待った修学旅行だ！
」

壇上では恭介が演説していた。

「まさしく、この時のために俺たちは高校生活を送っていると言っても過言ではない！」

「いや、過言じゃない!？」

「何を言っているんだ少年、可愛らしい少女たちと夜中までキャッキャウフフができるこのイベント、言いすぎということはないだろう」

「言いすぎだと思うよ……」

「まあいいじゃないか理樹。それで今回の行き先だが、京都だ！」

「まさしく定番ですね」

「ああ、だがそれだけに燃えるじゃないか、徹夜の語らい、枕投げ、ついでに寺や八ツ橋」

「いやいやいや、清水寺とかのほうが本命だからね!？」 さもついでみたいな言い方はやめようよ!？」

「木刀を買うのが楽しみだな」

「謙吾まで!？」 いやまあそれは否定しないけどいつも竹刀を持ってるだとか木刀も持ってるでしょというツツコミは押さえないと!」

「おお、忙しいな少年」

「京都か、モンペチがいっぱい買えるな」

「待って！　　鈴、せめて修学旅行くらい別のものを買おうよ！？」

「筋肉神社にいかねえとな」

「なにそれ！？そんな神社あるの！？」

「おいおい、落ち着け理樹」

さっきからつつこんでばかりの理樹を落ち着かせる恭介。

「とまあ、話がそれたがわがリトルバスターズは修学旅行を最高に楽しむための準備を開始する、ミッションスタートだ！！」

恭介の宣言と共に授業の始まりを告げる鐘がなった。

修学旅行前／Fクラスの場合

side 明久

『さて、一週間後に迫った修学旅行だが、行き先は京都になる』

ババアに直談判した放課後HRで鉄人が教壇で話していた。

「へえ、まあ妥当な場所だね」

「ああ、定番だがそれだけにいいな」

「うむ、そうじゃのう今から楽しみじゃ」

「ウチは初めてだからかなり楽しみね」

「ですね、小さいころ行っただけですからね」

「……舞妓に芸子 なんでもない」

みんなでワイワイと話し合う、修学旅行ということでテンションが上がっているのか珍しく女子二人も会話に加わってきた。ムッツリーニはいつも通りだったけど

『喜べお前ら、今回も現地集合だったが、設備ランクが上がったおかげで新幹線で行くことができるぞ』

「」「」「またそうだったのかよ!？」」「」

全員が一斉にツツコム　よかった、設備をあげといて本当によかった……！！

『それでだ、それに伴って三泊四日になったから着替えなどもしっかり準備するように』

あれ？　ていうことは……

「おい、鉄人。ということは元のままだったら何泊だったんだ？」

たぶんCで三泊四日だから一泊二日とかかな？

『日帰りだ』

「「「「「「日帰りい！？」「」「」「」」

ちよつ、ちよつとまって現地集合な上に日帰りってどういうスケジュールなの！？

「鉄人、もとのFクラスの時の栞を見せろ！」

『まあいいが坂本、少しは敬語を使え』

そういつて雄二に貧相なチラシの裏紙の束を渡す鉄人。

……あれが栞だったのか。

「なんだこりゃ！？」

雄二が驚いてる。　どれどれどんな感じなんだろう？

AM 10 .. 00

京都駅集合

自由時間

PM 13 .. 00

昼食

金閣寺、清水寺見学後自由

PM 18 .. 00

京都駅集合

PM 20 .. 00

文月学園到着

PM 20 .. 10

解散

「「……………」」

これを見た僕と雄二は無言、なんと言えはいいかわからないけど滅茶苦茶すぎる。

『宿泊先は普通のホテルだが、騒ぎを起こさないように。 起こしたら外にテントを用意してあるのでそこで寝てもらおう』

……どうやら僕らはかなり警戒されているらしい

『だがまあ、大半は自由行動になるので楽しめるようにスケジュールを組むように、では6く7人の班を組んだら俺に報告、大まかなスケジュールも報告するように、ではこれにてHRを終了する』

そう言って鉄人は出ていった。

「ああ、なんだかなり疲れたよ」

「俺もだ、初めて設備を上げて良かったと思ったぜ」

「じゃな……」

「…………ギリギリセーフ」

「そうね、日帰りは流石にね」

「あははは、きついですね」

「それより班のリーダーは雄二で報告するとしてどこ回る？」

「そうじゃのう、映画村に行ってみらんか？ 役者の端くれとして一度は行ってみたいのじゃ」

「……………舞妓に芸子と……………なんでもない」

「うん、それは僕も行きたいけど……………両腕に激しい痛みがああーっ！？」

「はは、バカだな明久気持ちは分からんでも……………浮気は許さないしょ、翔子！？ いつの間になっておちつギアアアアアア！？」

「やれやれじゃのう」

「……………（パシャッ！パシャッ！）」

～30分後

「ぐう、でだ、他に行きたいところは？」

「……………雄二と一緒にならどこでもいい」

「翔子！ お前はAクラスだろうが！？」

「……………夫の側にいるのは妻として当たり前」

「だから妻じゃねえつつってんだろ！！」

雄二と霧島さんがいつも通りのやりとりを始めたので僕が仕切ることにする。

「じゃあ、秀吉と一応ムツツリーニの意見は聞いたから次は美波と姫路さんの意見を聞こうか」

「うーん、そうねウチはどこでもいいんだけど、やっぱりメジャーなところには行きたいわね、金閣寺とか銀閣寺とか有名じゃない？」

「ああ、たしかにお寺としてはかなり有名だよね」

「……………代表格」

「そうですね、私は清水寺と龍安寺に行きたいと思います」

「龍安寺、ああ石庭が有名じゃのう」

「…………紅葉スポットとしても有名」

「そうなんだ、そういえば僕も行ったことないや」

「ふーん、でも瑞希、清水寺には行ったことがあるんでしょ？
うしてもう一回なんて、ウチは行ったことないからいいけど」

「あ、はい。実は清水寺には有名な縁結びの神様が祀ってあるんです」

「あつ、そうなの？」

「はい、そうです」

「なら決まりね、そういえアキはどこか行きたいところはないの？」

「そうだね、三十三間堂とか京都タワーもいいかな？」

「ほう、行ったことはないのかのう？」

「いや、行ったことはあるらしいけど小さかったし姉さんのせいでよく見れなくて…………」

「お主も苦労しておるの」

「それじゃあ、これでいいわね？
後は坂本の行きたいところを
いれたら終わりよね」

「うん、じゃあ僕から雄二には伝えておくよ」

「うむ、ではワシは部活があるからこれでの」

「……………今日までに納品しないといけないものがある」

「ウチも帰って葉月を見ないと」

「私も今日は帰りますね」

「うん、じゃあまた明日」

何だかんだで楽しみになってきたな修学旅行

修学旅行前〱Sクラスの場合

「さてと、我がSクラスにも修学旅行の正式な日程が知らされた。詳しくは今配ったしおりをみてくれ」

放課後、教壇に立った恭介から修学旅行についての通知を受けていた。

「行き先は今朝話したが京都で四泊五日を予定している。初日と三日目までは京都見物をして、四日目と最終日は奈良を見物する予定になっている」

「ふーん、意外と普通だね」

「ああ、前はクラスごとに行き先もばらばらだったらしいが世間の非難が集まったんでせめて行き先は同じにして体裁を繕ったんだろうな、Fクラスまで含めて考えるとここくらいしか行き先がなかったんだろうな」

「まあいいさ、とにかく旅行、修学旅行だぜ！　楽しみすぎて筋肉も震えてやがるぜ」

「ふっ！　甘いな真人、俺なんてすでに楽しみすぎて昨日は寝ていない」

「な、なんだと……畜生、負けたぜ……」

「何を競ってるのさ!？」

おもわず理樹がつっこむ。

「それで、どんな感じなんだ恭介氏？ 決まりきったように名所を廻るのか？」

「いや、奈良以外自由行動だ。好きに三日間廻れるぞ」

「なに！？ それは本当か？」

「ああそうだが……なぜそこまで食いつく」

「くく、恭介氏にはわからないだろうさ、おっとよだが」

「何をしようとしているの！？」

「ふ、安心したまえ少年。君もちろん加えてあげるよ」

「何に加える気なのさ！？」

「それはリトルバスターズ女子舞妓化計画ではなく萌え成分補完計画だよ」

「欲望駄々漏れのうえに誤魔化せてない！？」

煩惱が垂れ流しだ。

「女装した直枝さんですか……いいですね」

「ちょっと西園さん！？」

「あー、確かに理樹君なら女装が似合いそうですね！」

「理樹君が舞妓さんになるの？　似合いそうだね」

「理樹なら似合いそうだな」

「わふー！　理樹なら大丈夫なのです！」

「ちょっとみんな！？」

慌てて理樹は味方を探すも真人と謙吾は気まずそうに目を逸らすばかりだった。

「くっ！　すまねえ理樹！　似合うと思っちゃまった！」

「ぐ、こんな想像をしてしまうとは……」

「理樹、たぶん似合うぜ！」

そしてサムズアップしながらいい笑顔で叫んだ恭介を理樹はぼこぼこにした。

「……でだ、自由行動とはいっても大まかなスケジュールを報告しないといけないんでな。　全員いきたい場所を一つあげてくれ」

珍しくキレた理樹にぼこぼこにされた恭介は満身創痍といった感じで立っていた。

「ふむ、これといってないな」

「……私も特にありません」

「よーわからん」

しかし、早速力を振り絞って伝えたこともあっさり拒絶されていた。

「そうか……ふふ、理樹。後は任せた……ぜ……」

ドサリッ！

そう言い残すと恭介は倒れた。　　どうやら今のでとどめを刺されたようだ。

「えっと、それなら真人と謙吾はどこか行きたいところある？」

気をとりなおして理樹が尋ねると

「筋肉神社だな」

真人が即答した。

「…………さて謙吾はどこかある？」

理樹！？スルーかよ！？なんて声が聞こえたけど無視する。

「俺か？　　そうだな嵐山はどうだ？」

「いいね、じゃあ行き先に加えておくよ」

やっとまともな意見が出てほっとしながらメモした理樹だったが

「けっ！　　そんな所に行ったって筋肉の足しにもなりやしねえよ」

「なに？　　筋肉神社だとかいうふざけた場所に行くよりは千倍有意義だと思うが？」

「んだとお！？　　筋肉神社を馬鹿にするなんて許さねえぞ！　　筋肉神社を馬鹿にするということはてめえは筋肉に喧嘩を売ったもどうぜん！　　全国1300000000人の筋肉信者を敵に回したぞ！！」

「日本の人口は一億三千万だ。十三億人もおらん」

「うるせえ！　　てめえ！　　俺を完全に怒らせやがったな！！」

「逆ギレ！？」

相変わらず怒るポイントがおかしかった。

そして今にも激突するかに見えたが……

「うっさいわボケえ！！」

「ガハアッ！」

その前に鈴に蹴飛ばされていた。

「さっきからうっさい！　もっと静かにしろ！」

「だな、なあ少年。細かいことは各々がメールすることにすればいいだろう」

「わかった。それじゃあ皆いきたい場所を僕にメールで送っておいて、できれば明日までお願いね」

そういつてこの場は解散になった。

修学旅行当日

『よし、全員揃ってるな！ 車内ではくれぐれも他のお客さんに迷惑をかけないように！』

修学旅行当日。鉄人の指示を受けて新幹線に乗り込む、座席は指定席だけど僕の隣は雄二でその後ろが秀吉とムツツリーニだった。

さらに通路を挟んで姫路さんと美波がいる。

「いやー、僕新幹線に乗るのって初めてだから楽しみだなあ」

「うむ、わしもそうじゃ」

「……俺も」

「へえ、俺もだ。 どうやら全員初めてみたいだな」

「だね、あつ、姫路さんと美波はどうなの？」

「ウチも初めてよ、フランスのTGVなら乗ったことあるけど」

「私は一度あるみたいなんですけど覚えてないです」

「へえ、じゃあ結局初めてみたいなものなんだ」

「おっと、どうやら出発するみたいだな」

「あ、ホントだね」

アナウンスと共に扉が閉じて出発した。

さあ、修学旅行の始まりだ！

リトルバスターズの場合

「真人！　ほら急いで！」

「待ってくれ理樹！　プロテインが……」

「そんなの後で買ってよ！」

「理樹！　いくら理樹でもプロテインを——」

「うっさいわぼけえ！！！」

「——ぐはっ！」

「って！？　鈴！　真人を気絶させたらだめでしょう！？」

「仕方ない、謙語！」

「おう。　しかしこの筋肉ばかはどこん……」

「あはは、仕方ないよ、真人だもん」

「理樹は馬鹿に甘すぎる」

「うむ、たまにはおねーさんを見習ってみてはどうだ？」

「どこを見習えっていうの!？」

「ほわわ、はやく、はやく!」

「わふー、はりーあっぷ! なのです!」

「やばい、本当に間に合わないよ!？」

「走るしかないな」

「そうだ、このときのために俺たちは走り込みを行ってきた!」

「野球のためじゃ……」

「少年、どうやらつつこんでいる暇はなさそうだぞ」

「あ、来ヶ谷さんがふざけてないなんて、本気でまずいんだね」

「うむ、正直まずいな」

「ならその両手に構えているものをおろしなよ……」

なんでデジカメなんか……

「なに、少々土屋少年からな」

こんな状況で余裕だね。

「何を言っているんだ少年こんなときだからこそだよ」

「もうだめだ！」

まじめに見えて来ヶ谷さんは絶対この状況を楽しんでる。

「もう少しだぞ！」

「うおおおおお！」

「結局こうなるんだね……」

リトルバスターズの旅立ちは前途多難だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9250o/>

バカと奇跡とリトルバスターズ！

2011年9月13日17時43分発行